

佛鑑、勲和尚太平より智海に遷る、郡主曾公元禮、問ふ、「孰れか住持を繼ぐべき。」佛鑑、曷首座を擧す。公一たび見んことを得んと欲す。佛鑑曰く、「曷、人となり剛正にして、世に於て逸然たり、嗜好する所なし、之を請すれども、猶ほ恐らくは從はじ、詎んぞ肯つて自ら來らんや。」公、固く之を邀ふ。曷曰く、「此れ所謂呈身の長老なり」と。竟に司空山に逃る。公顧みて佛鑑に謂つて曰く、「子を知んことは父に若くはなし」と。即ち諸山に命じて堅く請す、抑ふるども止むことを得ずして命に應ず。(續侍者日録)

佛鑑、詢佛燈に謂つて曰く、「高上の士は名位を以て榮と爲さず、達理の人は抑挫の爲めに困せられず。其れ恩を承けて力を効し、利を見て誠を輸すことあるは、皆中人以下の爲るところなり」と。(日録)

佛鑑、曷首座に謂つて曰く、「凡そ長老と稱せば、須らく一物好むところなきことを要す、一も好むところあるときは、則ち外物に賊せらる。嗜欲を好むときは、則ち貪愛の心生す、利養を好むときは、則ち奔競の念起る。順從を好むときは、則ち阿諛の小人合す、勝負を好むときは、則ち人我の山高し、培植を好むときは、則ち嗟怨の聲作る。總べて之を窮むれば、一心を離れず、心若し生ぜざれば、萬法自ら泯す、平生の所得斯れを越ゆることなし、汝宜しく旃れを勉めて來學を規正すべし。」(南華石刻)

佛鑑曰く、「先師節儉にして一の鉢囊鞋袋も百緞千補するも、猶ほ棄つるに忍びず、嘗て曰く、「此の二物相従つて關を出づ、僅かに五十年、詎んぞ肯へて中道にして之を棄てん。」南泉の悟上座ありて、褐布襪を送る、自ら言く、「之を海外に得たり」と。冬服すれば則ち温なり、夏服すれば則ち涼し。先師の曰く、「老僧寒き時は柴炭紙衾あり、熱きときは松風水石あり、此れを蓄へて奚んか爲ん。」終に之を却く。」(日録)

佛鑑曰く、「先師、眞淨遷化すと聞いて、位を設け供を辨じて、哀哭禮に過ぎたり。嘆じて曰く、「斯の人得難し、道の根柢を見て枝葉に滯らす、惜むらくは其れ早く亡ぶることとを。殊に未だ其の道を繼ぐ者あることを聞かず、江西の叢林此れより寂寥ならん」と。(日録)

① 此章は古徳の出世は、止むを得ざるに出づ、自ら街ふて住持せざるを明す。
 ② 曷首座。韻州南華の知潤禪師、太平勲禪師の法嗣。
 ③ 司空山。舒州にあり、即ち太湖縣の北西百六十餘里にして、祖師來の相傳の地にして、三祖傳衣の地と稱し、山高く峻嶒なり、半腹に洗馬が池あり、古の司空原なり。唐の李白に詩あり、
 「卜居司空原。北將天柱縣。雲霧萬里月。鸞開九江春。」
 ④ 詢佛燈。太平勲の法嗣、安吉州何山佛燈守禪師なり。

① 棄斂刻剝、費を無理に節して蓄積するなり。
 ② 南華石刻。蘇翰林子瞻、紹聖元年秋、南華を經由し、銘を作ると、雲臥紀談にあり。
 ③ 持鉢(食器)を包装する袋。(佛在世の時、比丘鉢を包まして持ち顛倒して破る、之より袋を以て包むことを制す)
 ④ 悟上座。泉南の悟とは、高庵善悟禪師なる歟。
 ⑤ 火浣布なり。

佛鑑曰く、「先師曰く、『白雲、師翁、平生疏通にして城府なし、義の爲すべきものあるを顧みては、踴躍して身を以て之を先んず。好んで賢能を引抜して附離苟合を喜ばず、一榻、儵然として危座し日を終ふ。嘗て凝侍者に謂つて曰く、道を守り貧に安んずるは、衲子の素分なり。窮達、得喪を以て、其の守る所を移す者は、未だ道を語るべからず』と。」(日錄)

佛鑑曰く、「道の爲めに憂へざる時は、則ち心を操ること遠からず、身を處すること常に逸なるときは、則ち志を用ふること大ならず。古人艱難を歴、險阻を嘗む、然して後に終身の安を享く。蓋し事難きときは則ち志鋭し、刻苦するときは則ち慮り深し。遂に能く禍を轉じて福と爲し、物を轉じて道と爲す。多く學者を見るに物を逐ふて道を忘れ、明に背いて暗に投ずることを。是に於て己が不能を飾つて人を欺いて以て智と爲し、人の遠ばざるを強ひて人を侮つて以て高と爲す。此を以て人を欺いて欺くべからざるの先覺あることを知らず。此を以て人を掩ふて掩ふべからざるの公論あることを知らず。故に自ら智とする者をば人之を愚とす、

①此の垂示は、古人義に勇み、附離己が心の爲めにするを惡み、并せて衲子の本分を明す。②累する所なく、ゆつたりしたかたち。③凝侍者。白雲庵の法嗣、天柱度禪師は、端に參じて、久しく侍者寮にあり、常に蕙服を煖つて、師の疾に應ずといふ。④本章の大意は、古人道を求むるには刻苦し、得たる道の尊きを明す。⑤物を轉じて道云々。楞嚴經に曰く、「一切衆生無始已來、已に迷ふて物の爲めに本心を失す、物の爲めに轉ぜらる。故に此中に於て大を觀じ小を觀じ、若し能く物を轉せば、則ち如來と同じ云々。」

自ら高しとするものをば人之を下す。惟だ賢者は然らず、謂ゆる事散じて窮まることなく、能涯つて盡ることあり、盡ることあるの智を以て、窮りなきの事を周うせんと欲せば、則ち識偏なる所あり、神因る所あらん。故に大道に於て必ず闕くる所あり。」(與三 秀紫芝書)

佛鑑、龍牙の才和尚に謂つて曰く、「前人の蔽を革めんと欲せば、亟かに去くべからず、須らく事に因つて之を革むべし。小人をして疑はざらしむるときは、則ち庶くは怨恨なけん。予、嘗て言く、「住持に三訣あり。見事、能行、果斷、三つのものを缺くときは、則ち見事明かならず、終に小人の爲めに忽慢せられて住持振はず」と。」

①秀紫芝。蜀僧、祖秀、字は紫芝、蚤に文を以て鳴る。張丞相、羅唐に列たるや、秀をして長樂の蘭若に住せしむ、後蜀に歸臥せり。(雲臥紀談)②潭州龍牙、智才禪師、太平勳の嗣なり。③尙書に曰く、惟れ克く果斷なれば後難なし。④運と塵と相去ること遠し、故に懸隔の意を表はす。

佛鑑曰く、「凡そ一寺の主たらば、貴ぶ所操履清淨なり。大信を持して以て四方の衲子を待つ。差、毫髪も猥嫌の事、己に於て去らざることあれば、遂に小人に窺視せらる。道德古人の如くなることありと雖も、則ち學者疑つて信せず。」(山堂小參)

佛鑑曰く、「佛眼の弟子唯だ高庵、逕庭にして人情に近づかず、人となり嗜好なし、事を爲すこと

黨援なし。清嚴恭謹にして始終名節を以て自立す、古人の風あり、近世の衲子倫比あること罕なり。
(與三昧龍學一書)

佛眼の遠和尚の曰く、「衆に蒞むの容は必ず閑暇の日に肅む、賓に對するの語は私昵の時に嚴なるべし。林下の人、言を發し事を用ふ、舉措施爲先づ籌慮して、然して後に之を行ふべし、倉卒に暴く用ふること勿れ。或は自ら予れ決すること能はずんば、應に須らく耆舊に諮詢し、博く先賢に問うて以て見聞を廣くし、其の未能を補ひ其の未曉を燭すべし。豈に虚らに氣勢を爲し、専ら貢高を逞しうし、自ら其の醜きことを彰すべけんや。苟も一行之を前に失すれば、百善と雖も得て後に掩ふべからず。」(與三昧龍學一書)

③量に過ぎたること。
④眞牧。佛眼遠の法嗣、南康軍臨宗の眞牧正賢禪師をいふ。
⑤應眞。翻譯名義集に、「阿羅漢を譯して應眞といふ」と。阿羅漢は佛道修行上の一經程にして、自行なり。

佛眼曰く、「人天地の間に生ず陰陽の氣を稟けて形を成す、應眞、悲願力に乗じて世間に出現するに非ざるよりは其の利欲の心卒かに去くべからざるに似たり。惟だ聖人、人の利欲を去くべからざるを知る、故に先づ道徳を以て其の心を正しうして然して後に仁義禮智を以て之を教化堤防す。日に就り月に將みて其の利慾をして其の仁義禮智に勝たざらしめて、其の道徳を全うす。」(與三昧龍學一書)

佛眼曰く、「學者文字語言に泥むべからず、蓋し文字語言は他に依り解を作して、自悟の門を障へて言葉の表に出づること能はず。昔達觀の頌、初めて石門聰和尚に見ゆ、室中口舌の辯を馳騁す。聰曰く、「子の説く所は乃ち紙上の語なり、其の心の精微の若きは則ち未だ其の奥を觀ず、當に妙悟を求むべし。」悟る時は則ち超卓傑立す、言に乗せず句に滯らず、師子王吼哮すれば百獸震駭するが如し。廻つて文字の學を觀れば何ぞ管什を以て百に較べ、千を以て萬に較ぶるのみならんや」と。(龍門記聞)

佛眼、高庵に謂つて曰く、「百丈清規は大槩正を標し、邪を檢し、物を軌し、衆を齊ふ、乃ち時に因つて以て後人の情を制す。夫れ人情は猶ほ水の如し、規矩禮法は堤防たり。堤防固からざれば必ず奔突を致す、人の情制せざる時は則ち肆に亂る、故に情を去け妄を息め、惡を禁じ邪を止む。一時も規矩を亡すべからず、然れば則ち規矩禮法、豈に能く盡く人の情を防がんや、茲れ亦道に入ることを助くるの塔墀なり。規矩の立つこと昭然として日月の如し、之を望むもの迷はず、擴乎として大道の如し、之を行するもの惑はず、先聖建立、殊なりと雖も、源に歸すること異なることなし。近代の叢林、規矩

①達觀頌。石門聰の法嗣にして、名は曇頌、錢塘の丘氏の生なりと。
②本章にては人情まことに制すべからず、規矩を以て之を制すべきを示し、且つ規矩の用を示す。
③百丈清規。百丈禪師、初めて禪苑の規矩を整理して、以て禪僧禪院の行事を正す、百丈清規は即ち禪宗規矩成立の最初をなすものとして、今に傳はり、日本に及び、諸方の禪徳是によりて各山の清規を作る。
④塔前の高地、即ち上に向ふ下地といふこと。

を力役するものあり、規矩を死守するものあり、規矩を蔑視するものあり、斯れ皆道に背き理に失し、情を縦にし、惡を逐ふて然ることを致す。曾つて先聖末法の蔽を救ひ、放逸の情を禁じ、嗜欲の端を塞ぎ、邪僻の路を絶つが故に、建立する所以なることを念はず。」(東湖集)

① 佛眼、高庵に謂つて曰く、「秋毫の末を見る者、自ら其の睫を見ず、千鈞の重きを擧ぐるもの、自から其の身を擧げず。猶ほ學者の人を責むるに明かにして、己を恕するに味き者のごとし、少しも異ならず。」(真牧集)

高庵悟和尚曰く、「予、初め祖山に遊ぶ、佛鑑の 小參を見る、謂く、「貪欲瞋恚は寃賊よりも過ぎたり、當に智を以て之を敵すべし。智は猶ほ水の如し、用ひざる時は則ち滯る、滯る時は則ち流れず、流れざる時は則ち智行はれず。其れ貪欲瞋恚を如何せん」と。予是の時、年少なりと雖も、心に其の善知識たることを知る、遂に 挂搭を求む。」(雲居實錄)

① 本章にては他を責めて己を顧みざるの非なるを明す。
② 大參に對していふ、上堂演法を大參といひ、不時の開示説法を小參といふ。
③ 衣鉢袋を掛く、即ち隨從して參禪せんとするなり。

高庵曰く、「學者、存する所中正にして、百たび挫折せらるると雖も浩然として憂なし。其の或は向ふ

所、偏邪にして朝夕區々として、利の爲めに是れ計らば、予れ恐らくは堂々の軀、將に天地の間に措くことなからんとす」と。(真牧集)

④ 高庵曰く、「道徳仁義は獨り古人之を有するのみならず、今人も亦之を有す。其の智識明かならず、學問廣からず、根器淨からず、志氣狹劣にして之を行つて力めざるを以て、遂に聲色の爲めに移されて自覺せざらん。蓋し妄想情念、積習濃厚なるに因つて、頓に除くこと能はず、所以に古人の地位に至らざるのみ。」(真秋龍學書)

高庵、成枯木金山に住して受用侈靡なりと聞いて、嘆息すること久しうして曰く、「比丘の法、貴ぶ所は清儉なり、豈に宜しく此くの如くなるべけんや。徒らに後生の輩、輕肥に習ふ者の爲めに、無厭の求を増す、古人に愧ぢざることを得んや。」(真牧集)

④ 本章にては、道徳仁義の心を具するは、固より凡聖の隔てなく、其の殊なりは至、不至とあるを云ふ。
⑤ 事理生用せしむるは根なり、事理受用せしむるは器なり、心、事理を生ずる邊を根といひ、受用する邊を器といふ。
⑥ 法成、古木禪師は芙蓉道楷の嗣にして、東京淨回に住す。
⑦ 根機の區別。
⑧ 印可を付授すること。

高庵曰く、「住持の大體は叢林を以て家と爲す、區別宜しきを得、付授器に當る、舉措安危の理に係り、得失教化の源に關はる。人の模範たる、安んぞ容易なるべき。未

だ住持弛べ縦にして、能く衲子をして服従せしめ、法度^①凌遲にして叢林の暴慢を禁せんと欲することを見ず。昔^②育王の謀、首座を遣し、仰山の偉侍僧を貶す、典文に載せたり、令範と爲るに足れり。今各私欲に徇つて大いに百丈の規繩を墮る。夙に興るに懈くして多く參會の禮法を缺く。或は貪饕を縦にして忌憚なし、或は利養に縁つて喧争を致す、便僻醜惡に至るまで有らざる所なし。烏呼法門の興り、宗教の盛んなることを望むとも、詎んぞ得べけんや。」(龍耳集)

高庵、雲居に住す、衲子室中に其の機に契はざる者を見る毎に、即ち其の袂を把つて色を正しうして之を責めて曰く、「父母汝が身を養ふ、師友汝が志を成す、飢寒の迫なく征役の勞なし、此に於て堅確精進にして道業を成辨せずんば、他日何の面目あつてか父母師友に見えんや。」衲子其の語を聞いて泣涕して止まざる者あり、其の號令整嚴なるも此の如し。(且庵逸事)

高庵、雲居に住す、衲子病んで、延壽堂に移るを聞いては嗟嘆嘆息して、

- ① 陵夷なり、漸廢といふに同じ。
- ② 育王山無示介諸禪師は、天寧阜の法嗣にして、性剛毅、世に譴議面と稱す。
- ③ 行偉禪師は、黃龍南の嗣にして、性剛直なり。僧寶傳にその逸事をのす。
- ④ 外威儀あり、内實道徳なきを云ふ。
- ⑤ 能化と所化と心の合ふ處、問髪を容れざるをいふ。
- ⑥ 且庵。烏巨行禪師の法嗣、眞州長眞且庵守仁禪師をいふ。
- ⑦ 延壽堂。病僧の療治處。唐末、一山寺に備あり、臥病自ら其の月に照して曰く、「枕有思、無源。門無問病人。塵埋床下履。風動架上中。」適ま部使者あり、寺中を過ぎ之を見て、惻然として之を迎へ、墳庵に歸り、療治す。後、朝に申言して天下の寺に令して延壽堂

己に出づるが如し。朝夕間候し、自ら煎煮して嘗めざれば食を與へず、或は天氣稍や寒きに遇へば、其の背を拊して曰く、「衣單ならざるか。」或は時の暑きに値へば、其の色を察して曰く、「太だ熱きことなしや。」不幸にして救はざれば、彼の有無を問はず、常住禮を盡して津送す。知事或は他辭すれば、高庵叱して曰く、「昔百丈病者の爲めに常住を立つ、爾病ます死せざらんや」と。四方の識者其の人となりを高うす。雲居を退いて天台に過ぐるに及んで、衲子相從ふ者僅かに五十輩、間往くこと能はざるものあり、泣涕して別る、其の徳を盡し人を感ずること此の如し。(山堂小意)

高庵、雲居を退く、圓悟、佛印の臥龍庵を治め、燕休の所と爲さんと欲す。高庵が曰く、「林下の人、苟も道義の樂あらば形骸外れつべし。予れ縦心の年を以て正に長庚曉月の如し、光影能く幾時ぞ、且つ西山廬阜林泉相關る、皆予が逸老の地なり、何ぞ必ずしも諸己を有して然して後に樂むべけんや。」未だ幾ばくならざるに即ち杖を曳いて天台を過ぐ、後に

- を置かして、洞竹の瘴風處となさしむ。
- ⑧ 涅槃金の有無(死を用意したる金)。
- ⑨ 雲居山丁元佛印禪師、開善運の法嗣。
- ⑩ 高庵が隱居して安息する居となす。
- ⑪ 七十歳、論語爲政に、「七十にして心の欲する所に從へども矩を論えず云々。」
- ⑫ 皆金星なり、其の日に先だつて出づ、之を啓明といひ、日に後れて入る之を長庚といふ、要之、日に先だつて起き、日の入るに及んで休す、日々休息するなきをいふ。
- ⑬ 華頂峰。天台山の北の別峰を名く。

華頂峰に終ふ。(興牧集)

高庵曰く、「衲子賢愚なし、惟だ善知識の委曲にして以て其の徳業を崇び、歴試して以て其の器能を發し、旌獎して以て其の言を重んじ、優愛して以て其の操を全うするに在り、歲月積ること久しければ、聲實並びに豊かなり。蓋し人皆靈を含む、惟だ勤誘を以て致す、玉の璞に在るが如し、^① 抵擲するときは則ち瓦礫なり、琢磨する時は則ち圭璋なり。水の源に發するが如し、^② 壅闕するときは則ち淤泥なり、^③ 澆するときは則ち川澤なり。乃ち知んぬ、^④ 像季、獨り賢を遺て、用ひざるに非ず、其の養育勸獎の道に於て、亦未だ至らざる所あり。叢林殷盛の時に當つて皆是れ季代の棄材なり。季にあるときは則ち愚なり、興に當るときは則ち智なり。故に曰く、「人皆靈を含む、惟だ勤誘を以て致す」と。是に知んぬ學者の才能時と升降す。之を好むときは則ち至る、之を獎むるときは則ち崇し、之を抑ふるときは則ち衰へ、之を斥くるときは則ち絶ゆ。此れ學者の道徳才能消長の由る所なり。」(與「李都運」書)

- ① 天地は萬物の父母、人は萬物の靈。
- ② 放置するとき。
- ③ 説文に璋上を刺るを圭となす、圭を半ばにするを璋といふ。
- ④ ふせぎ止むるなり。
- ⑤ 深く通ずる川也。
- ⑥ 像季、正、像、季、三法時代の中の佛法衰弱の像季二代を擧ぐる也。
- ⑦ 李都運、李士衡、字は天均、秦州成紀の人、後に京兆府進士に及第し、河北都轉運使となる。

高庵曰く、「教化の大なるは道徳禮義より先なるはなし、住持の人、道徳を尊ぶ時は則ち學者恭敬を尙ぶ、禮義を行ふ時は則ち學者貪競を耻づ。住持容を失するの慢ある時は、則ち學者凌暴の蔽あり、

住持色を動するの諍あるときは、則ち學者攻闘の禍あり。先聖未然に知つて遂に明哲の士を選んで叢林を主らしむ。人をして具に瞻て論さずして化せしむ。故に石頭馬祖、道化盛んに行はるゝとき英傑の士出づ。威儀柔嘉、雍々肅々、言を發し令を擧ぐ、瞬目揚眉皆以て後世の模範たるべきものなり、宜しく其れ然べし。」(與「死心」書)

高庵曰く、「先師嘗て言く、「行脚して關を出づ、至る所の小院多く不如意の事あり、因つて法眼地藏に參じ、^① 明教、神鼎に見ゆる時を思ふ。便ち煩惱あることを見ず」と。」(記聞)

高庵、表裏端勁にして風格凜然たり、動靜禮法を忘れず。衆に在りし日、屢々侵害せらる、殊に意に介まず、身を終るまで簡約を以て自奉す。^② 室中妄りに許可せず、稍や相契はざれば、必ず色を正し辭を直うして之を裁る、衲子皆信服す。嘗て曰く、「我道學の人に過ぎたることなし、但平生事をなして心に耻なきのみ。」

- ① 時に曰く、「憐々たる師尹、民具に爾を瞻る」とあり、人の師たるものは衆之を仰ぎ見るのみにて、服化するをいふ。
- ② 石頭希遷大師は青原行思の法嗣なり。
- ③ 時に曰く、「爾が威儀を敬して柔嘉せざるなし。」
- ④ 和敬なり。
- ⑤ 本章の大意は、雲水に任して修行するときは、油断なく正念工夫すべきを示す。
- ⑥ 法眼文登禪師、行脚して石山地蔵院に雨の霽るゝを待つ、時に老僧環禪師と尙景する故事。僧寶傳卷四、法眼の章を見よ。
- ⑦ 明教見神鼎。僧寶傳卷十四にある契嵩の故事。
- ⑧ 參禪は實證實悟を要す、安寛禪法を爲さず。

高庵、雲居に住す、禘子の人の 隱惡を攻むるものあるを見て、即ち從容として之を論じて曰く、「事此くの如くならず、林下の人道惟だ急務なり、和して身を修せん、豈に苟も愛憎を 縦にして人の行止を壞るべけんや。」其の委曲なること此くの如し。師始め雲居の命に赴かず、佛眼書を遣はして之を勉めて云く、「雲居江左に 甲たり、以て衆を安んじ、道を行ふべし、須らく固讓すべからざるに似たり。師曰く、「叢林有りてより已來、學者、這般の名目に節義を壞了せらるゝもの少からずとなさす」と。佛鑑之を聞いて曰く、「高庵去就禘子の及ばざるところなり。」(記聞)

① 論語に曰く、「許いて以て直とする者を惡む云々、人の陰私を許さ攻むること。」
② 甲乙丙の順序、即ち雲居は江左の第一名聖なりといふこと。

國譯禪門寶訓集上終

國譯禪門寶訓集下

雪堂の行和尚、薦福に住す。一日、① 暫到の僧に問ふ、「甚れの處より來る。」僧云く、「福州より來る。」雪堂の云く、「沿路に好長老を見るや。」僧の云く、「近ごろ信州を過ぐ、博山の住持 本和尚、曾て拜せずと雖も、好長老なるを識る。」雪堂の曰く、「安んぞ得て其の好たることを知るや。」僧の曰く、「寺に入る路徑開闢し、② 廊廡修整す、殿堂香燈絶えず、晨昏の鐘鼓分明なり、二時の粥飯精潔なり、僧 行人を見て禮あり、此を以て其の好長老たることを知る。」雪堂咲つて曰く、「本、固に賢なり、然して爾も亦眼を具す」と。直に斯言を以て、郡主吳公傳明に達して曰く、「這の僧の持論、頗る 范延齡が張希顔を薦めし事に類す、而して閣下の賢、③ 張忠定公に減らす、老僧年邁かなり、乞ふ本を請じて住持せしめよ、庶幾はくは林下の盛事たらん」と。吳公大いに喜ぶ。本、即日薦福に遷る。(東湖集、范延齡事未詳三所出)

① 衢州烏巨雪堂遺行禪師は佛眼の法嗣なり。
② 入夏中に挂搭せし禘子。
③ 悟本禪師は徑山大惠果の法嗣、饒州薦福に住す。
④ 諸堂伽藍。
⑤ 僧、徑を行くこと。
⑥ 范延齡云々。張希顔、景德の間、評議廳に知たり。時に張、殿直范延齡に問ふ。「曾て、好官員を見るや。」延齡乃ち希顔を稱す。張曰く、「何の故ぞ。」答へて曰く、「昨其の壙を通る、驛傳橋道、皆修葺し、野に惰農無く、肆に賭博なく、市島の喧からず、夜に邸中に宿るに、更鼓分明、是れを以つて其の好官員たるを知る」と。

雪堂の曰く、「金隄千里なるもの蟻壤より潰ゆ、白壁の美なるも環玷より離る。況んや無上の妙道、特に金隄白壁のみにあらず、貪欲瞋恚特に蟻壤環玷のみにあらず。要すらくは志の端謹に、行の精進に、守ることの堅確に、修することの完美なるに在り。然して後に以て自利し他を利すべし。」(興王十國書)

雪堂の曰く、「予、龍門に在りし時、曷鐵面、太平に住す。言へることあり、曷、行脚して郷を離るゝこと未だ久しからず、受業、一夕遺火して悉く煨燼と爲りしことを聞いて、曷書を得て之を地に擲つて乃ち曰く、「徒らに人意を亂すのみ」と。」(東湖集)

雪堂、晦庵の光和尚に謂つて曰く、「予弱冠の年、見獨居士の言く、「中に主ななければ立せず、外正しからざれば行はれず。此の語宜しく身を終るまで之を踐むべし、聖賢の事業備れり。予其の語を佩びて家に在つて

即ち誅、潘願を朝に薦む。
①張忠公。濮州鄆城の人、趙宋の太宗の時、進士たり、再び益州に知となり、隣を築き、田を殖すること萬餘頃、威惠民に及び、民信服す、卒して、左僕射を贈り、忠定公と諡す。
②東湖集。東湖居士とは除師川の號也、靈源性清禪師とよく、黃龍に禪談すといへば、恐らくは除師川の集錄ならん。
③堅高に譬ふる也。
④きすより折破するをいふ。
⑤王十國。王十國、字は龜齡、温州樂清の人也、龍圖閣の學士たり。紹興三年忠文と諡せらる。
⑥羅僧當時より養育せられたる寺。
⑦火災に罹る。
⑧信州龜峰晦庵の惠光禪師は、雪堂の法嗣也。
⑨雪堂の父、葉氏名は仲臨。

は身を治め、家を出で、は道を學ぶ。以至身を率ゐて衆に臨むに、衡石の重輕を定め、規矩の方圓を成すが如し、此を捨て、は則ち事々準を失へり。」(廣錄)

雪堂曰く、「高庵、衆に臨むに必ず曰く、「衆中に須らく識者あることを知るべし」と。予因つて其の故を問ふ、高庵の曰く、「見すや、瀉山道く、舉措他の上流を見て謾りに庸鄙に隨ふことなかれと。平生衆に在つて下愚に沈まざることは、皆此の語より出でたり。稠人廣衆の中、鄙者は多く、識者は少し、鄙者は習ひ易く、識者は親しみ難し。果して能く自ら志を其の間に奮つて、一人と萬人と敵するが如くならば、庸鄙の習力盡きて眞の挺特没量の漢ならん。」予身を終るまで其の言を踐んで、始めて出家の志に負かざることを得ん。」(廣錄)

雪堂、且庵に謂つて曰く、「事を執るには須らく重輕を權るべし、言を發するには思慮を先せんことを要す。務めて中道に合して、偏頗せしむることなかれ、若し倉卒に暴く用ひば、克く濟すことあ

①居士は家に在つて世法に従事し、傍ら出世間の道を信行するをいふ。
②禮記に曰く、禮の國を正しうするに於けるや、猶ほ衡の輕重に於てし、繩墨の曲直に於てし、規矩の方圓に於けるが如し。
③本章は古人の格言を服膺すべきを示す。
④瀉山警策に出づ。「伏望與決列志、開三特達之懷、舉措若他上流、莫擅隨庸鄙。」
⑤超越獨立を挺といふ。
⑥以上の大意は眼を上流に注ぎ、奮志一番没量の漢たるべきを明す。
⑦平らかならざる様にすべし。

ること鮮し。就使成すことを得るとも、終に萬全なること能はず。予衆中に在つて、備に利病を見る、惟だ有徳の者は寛を以て人を服す、常に後來志力あるもの審かにして之を行ふことを願ふ、方に美利と爲す。靈源嘗て曰く、「凡そ人平居内に照して多能く曉了すれども、事に涉つて外に馳するに及んで、便ち混融に乖いて其の法體を喪ふ。必ず佛祖の任を紹ぎ、後昆を啓迪せんと欲せば、常に自ら檢責せずんばあるべからず」と。(廣錄)

應庵の華和尚、妙果に住す、雪堂未だ嘗て一日も過從せずんばあらず、間竊議するものあり。雪堂曰く、「華姪人と爲り利を悦び名に近づかず、先に譽めて後に毀られず、阿容して苟合せず、佞色巧言せず。加之ならず見道明白にして去住豁然たり、衲子中得難し、予固く之を重んず。」(且庵逸事)

雪堂曰く、「學者氣志に勝つときは則ち小人たり、志氣に勝つときは則ち端人正士たり、氣と志と齊しうして得道の賢聖たり。人あり剛狠にして規諫を受けずんば氣の然らしむるなり。端正の士強ひて不善を爲さしむと雖も、寧ろ死すとも不二なるは、志の然らしむるなり。」(廣錄)

- ① 人に損あるを病といひ、人に益あるを利といふ。
- ② 天童の應庵曇華和尚、虎丘隆の法嗣也。
- ③ 衢州桐山の妙果院。
- ④ 愛して之を導くこと。
- ⑤ 孟子曰く、夫れ志は氣の帥なり、氣は體の充てる也。

雪堂曰く、「高庵雲居に住す、普雲の圓、首座たり、一村僧書記たり、白楊の順、藏主たり、通鳥頭、知客たり、賢真牧、維那たり、華姪、副寺たり、用姪、監寺たり。皆是れ徳業あるものなり。用姪尋常廉約にして常住の油を點せず。華姪、因に之に戯れて曰く、「異時長老と做らば須らく是れ鼻孔端正にして始めて得べし、豈に此を以て得たりと爲すべけんや。」用姪對へず、用姪己を處すること儉なりと雖も、人に與ふる甚だ豊なり、四來を接納して略倦める色なし。高庵、一日之を見て曰く、「監寺、用心固に得難し、更に須らく常住を照管して疎失せしむること勿るべし。」用姪曰く、「某に在つては失小過たり、和尚に在つては賢を尊び、士を待つて海の如くに納れ、山の如くに容れて、細微を問はざるを誠に大徳と爲す」と。高庵咲ふのみ。故に叢林、用大碗の稱あり。」(逸事)

雪堂曰く、「學者道の向ふ所を知らざるときは、則ち師友を尋ねて以て之を參扣す、善知識、道の獨化することを以てすべからず。故に學者を假つて之を贊祐す、是を以て招提を主るに道德の師あり、法社を成する

- ① 廣南軍、雲居の普雲自圓禪師、雲居悟の法嗣なり。
- ② 叢林に表率たり、人天の眼目にして分座說法し後昆を導くもの。
- ③ 台州萬年の雲集法一禪師、草堂清の嗣。
- ④ 文翰を執筆する役。
- ⑤ 撫州白楊法順禪師、佛眼の法嗣。
- ⑥ 經藏を掌り、義學に通ずるもの。
- ⑦ 眞州北山の法通禪師、長蘆の了禪師の法嗣。
- ⑧ 賓客を知典し、編白相遇し、香茶に對應し、迎請して務めて整齊ならしむ。
- ⑨ 佛眼の法嗣にして正賢眞牧禪師。
- ⑩ 梵華兼稱にして僧衆に綱維し、曲きに調攝を盡す、僧事の内外掌らざるなく、大衆行

に必ず賢智の衲子あり、是れを虎咲けば風烈しく龍驤れば雲起ると爲す。昔江西の馬祖は百丈、南泉に因つて其の大機大用を顯はす。南嶽の石頭は薬山、天皇を得て、其の大智大能を著はす。所以に千載一たび合して、論説疑なし。翼然として鴻毛の風に遇ふが若く、沛乎として巨魚の壑に縦なるに似たり。皆自然の勢なり。遂に叢林の功助を建て、佛祖の光耀を増すことを致す。先師、龍門に住す、一夕、予に謂つて曰く、「我れ徳業なくして浩きに湖海の衲子を歸すること能はず、終に老東山に愧づ」と。言ひ畢つて潛然たり。予、嘗て之を思ふに、今人の師法たるもの、古人と相去ること倍萬なり。」(與二竹庵書)

雪堂曰く、「予龍門に在りし時、靈源太平に住す、有司非意を以て之を擾ます。靈源先師に與ふる書に曰く、「直うして以て道を行すべくとも殆んど爲すべからず、枉げて以て住持すべくんば誠に我が志に非ず、如かじ意を千巖萬壑の間に放にして、日に菟粟に飽いて以て餘生を遂げんには、復た何ぞ憐々たらんや」と。旬浹ならざる間、黃龍の命あり、

乃ち輿に乗じて江西に歸る。」(聽首座記聞)

雪堂曰く、「靈源好んで衲子を比類す、曰く、「古人言へることあり、土木偶人を爲らん者は耳鼻先づ大ならんことを欲す、口目先づ小ならんことを欲すと。此の言小なり雖も以て大いに喩へつべし。夫れ土木偶人を爲つて耳鼻先づ小さきに口目先づ大ならんには、人或は之を非すれども改むべからず、耳鼻大なるときは則ち以て小ならしむべし。口目小なるときは則ち以て大ならしむべし。學者事に臨んで取捨も亦宜しく是くの如くなるべし、三思を厭はずんば、以て忠厚の人たるべし」と。」(記聞)

雪堂曰く、「萬庵、高庵を送つて天台に過ぎて回る、予に謂つて言く、徳貫首座と云ふものあり、景星巖に隠るゝこと三十載、影、山を出でず、龍學耿公、郡を爲む、特に瑞巖を以て之を迎ふ。貫、辭するに偈を以てす、曰く、

三十年來獨り關を掩ふ、

事の次第を辨じ、能く衆を悦服せしむ、故に又悦衆ともいふ。

- ① 曇華禪師。
- ② 雙林徳用禪師、靈居悟の嗣。
- ③ 梵には摩訶帝といふ、且暮勤めて香花を事とし、官員に應接し、事を經て廉能、譚んで上下怨恨ならしむ。寺主と譏す。
- ④ 法身道體の全きをいふ。
- ⑤ 梵には招提提者、唐に四方僧物、又は別房施といふ。今は伽藍を建て、招提の名を創立す。後魏の大武始光元年なりき。
- ⑥ 法席又は法會といふこと。
- ⑦ 馬祖。道一禪師、嘗て日而佛、月而佛の難公案を發明して、天下の衲子を殺盡す。江西の大寂に主たり、湖南に石頭あり、雲水往來に二大士に相見せざる者を無知といふは

- ① 名高き禪門の祖老なり。
- ② 百丈。洪州の新吳の果に講に應じ、大雄山に住し、居所峻岩なるを以て、百丈と名づく。馬祖道一につぐ。
- ③ 南泉。馬祖に大雄に參じ、頓に大事を了つて、大用を顯はす、猶を斬つて衆に殺到す、普願禪師と號す。
- ④ 南嶽石頭。衡山の南寺、石臺の上に庵居し、自ら石頭和尚と號す。希遷はその本名也。
- ⑤ 薬山。石頭遷に嗣ぐ、澧州薬山性靈禪師なり。
- ⑥ 天皇。石頭遷の法嗣、天皇の道悟禪師なり。
- ⑦ 竹庵。佛眼遠の法嗣、龍翔の竹庵士珪禪師なり。
- ⑧ 此章の大意は古徳、進止自由、去就洒脫なるを明す。
- ⑨ 無理なる事。
- ⑩ 十日を旬となし、十二日を浹辰といふ。

使符那んぞ青山に到ることを得ん、
休めよ頼末たる人間事を將つて、
我が一生林下の閑に換ふることを。

使命、再び至れども終に就かず。耿公嘆じて曰く、「今日、隱山の流なり」と。萬庵の曰く、「彼に老宿、能く其の語を記する者あり。乃ち曰く、道、本を體せざれば、死生に没溺す、境に觸れて心を生じ、情に隨ひ念を動す、狼心狐意、誑行して人を誑かす、勢に附いて阿容して名に徇ひ利を苟め、眞に乖き妄を逐ひ、覺に背き、塵に合す、林下の道人終に爲ざるなり」と。予が曰く、「眞も亦僧中の間氣なり」と。(逸事)

雪堂 富貴の室に生れて驕倨の態なし、躬を處すること節儉にして、雅に物を事とせず、烏古山に住す。衲子鐵鏡を獻するものあり、雪堂曰く、「溪流の清泚、毛髮鑑みるべし、此を蓄へて何にか爲ん」と。終に之を却く。(行實)

雪堂、仁慈、忠恕にして賢を尊び、能を敬す。戲咲俚言口より出づること罕なり、峻阻なく、暴怒せず、去就の際に至つて極めて介潔を爲す。嘗て曰く、「古人の學道、外物に於て澹然として嗜好する所なし、以至ち勢位を忘れ聲色を去つて、勉めずして能くするに似たり。今の學者、伎倆を傲盡して終に奈何ともせず。其の故何ぞや、志堅からず、事、一ならず、把つて匹似閑と作すのみ」と。(行實)

雪堂曰く、「死心雲巖に住す、室中好んで怒罵す、衲子、皆崖を望んで退く。方侍者の曰く、「夫れ善知識と爲つては、佛祖の道を行じ人天に號令す、當に學者を見ることが赤子の如くすべし。今、慘怛の憂を施し、撫循の恩を垂れ中和の教を用ふること能はず、奈何ぞ仇讐の如くにして見るときは、則ち詬罵する、豈に善知識の用心ならんや。」死心、拄杖を拽いて之を趁ふて曰く、「爾が見解此くの如し、他日勢位に諂奉し、苟も權豪に媚びて佛法を賤賣し、鬻俗を欺罔せんこと定まれり。予、忍びず、故に重言を以て之を激す、安んぞ他あらんや、其の耻を知り、過を改め、懷慕し

- ① 古人云。桓赫を指していふ。韓非子に此の言出づ。
- ② 三思。論語に出づ。三思而後行しと。
- ③ 萬庵。東林萬庵道顔禪師、大惠果の法嗣。
- ④ 德實。この人の傳、未だ詳ならず。
- ⑤ 隱山。馬大師の法嗣、潭州龍山和尚、又の名を隱山といふ。洞山价、行脚の時、迷路して山に入る。參禮の次で、山間ふ、來路なし、什麼の處より來るやと、价、路なきは且く置く、和尙何に従つて入る。山曰く、「曾て雲水よりせず。价曰く、「和尚此の山に住してより多少の年ぞ。」「春秋に涉らず。」「此山に先住ありや。」「不知。」「何の爲にするや。」「我人天の爲に來らず。」价問ふ、「和尚何の爲に入するの道理をい見る。」山答へて、

- 「我兩箇の泥牛、關つて海に入るを見てより、直に如今に至るまで消息なし」と。頌あり、曰く、「三閭蒨風從來住。一道神光萬境閑。莫作是非來辨我。一生穿鑿不相關」と。高風見るべし。
- ⑥ 德實首座の言なり、即ち自らその語を稱したるを、他人の傳稱せるを再び答せるなり。
- ⑦ 孟子曰く、五百年にして必ず王者興るものあらん、其の間必ず世に名ある者あらん云云。即ち稱に見る英才なりといふ意。
- ⑧ 父は見獨居士にして、財足り位尊き故に謂ふ。
- ⑨ 己れを盡すを思、人に譲るを想といふ。
- ⑩ 方言なり、閑事に匹似する也、即ち沒緊要なりといふこと。
- ⑪ 望崖而退。莊子に、「山木君暍於江而浮於海、望之而

て忘れずして、異日、好人と做らんことを欲するのみ」と。(唯首座記聞)

① 死心新和尚の曰く、「秀圓通嘗て言く、『自ら正すこと能はずして他人を正さんと欲する者、之を徳を失すと謂ふ、自ら恭しきこと能はずして他人を恭しと欲する者、之を禮を悖ると謂ふ。夫の善知識と爲つて徳を失ひ禮に悖らば、將に何を以てか範を後に垂れんや』と。」(與三靈源書)

死心、陳瑩中に謂つて曰く、「大道を求めんと欲せば、先づ其の心を正しうせよ、少しも忿、嗔あるときは則ち其の正を得ず、少しも嗜欲あれば亦其の正を得ず。然も聖賢世に應ずるに非ざるよりは安んぞ愛惡喜怒無きことを得ん、直に須らく之を前に置いて以て其の正を害せざるべし、是れを得たりと爲す。」(廣錄)

死心曰く、「節儉放下は最も入道の捷徑たり、多く學者を見るに、心憤々口排々たり、孰れか踵を古人に繼ぐことを欲せざらん。其の放下節儉を觀るに及んでは萬中に一もな

し、恰も庶俗の家の子弟の肯つて書を讀ます、官人と做ることを要するに似たり。三尺の孺子し雖も、其れ必ず爲すこと能はざらことを知る。」(廣錄)

死心、洪堂に謂つて曰く、「學者才識忠信節義ある者は上なり、其の才高からずと雖も、謹んで量あるものは次なり。其れ或は邪を懷いて、觀望し、勢に隨つて改め易へば此れ眞の小人なり。若し之を人前に置けば必ず叢林を壞り法門を汚漬せん。」(實錄)

死心、草堂に謂つて曰く、「凡そ住持の職、言を發し事を行ふこと、要は誠信に在り、言誠にして信あらば感ずる所必ず深し、言誠信ならざれば感ずる所必ず淺し。誠ならざるの言、信あらざるの事は平居庶俗と雖も、猶ほ行ふに忍びず、恐らくは郷黨に欺かれん。況んや叢林の主となつて佛祖に代つて化を宣ふ、言を發し事を行ふ、苟も誠信なくんば、則ち湖海の滌子孰れか相從はん。」(黃龍實錄)

死心曰く、「利を求むるものには道と與ふるべからず、道と求むるものには利と與ふるべからず、古

不見其崖、愈往而不見其所、窮、送君者、自崖而反、君自此遠矣」と。

② 方侍者。吉州禾山超宗惠方禪師、黃龍新の嗣。

③ 慈悲惻隱の貌。

④ 尊を屈して卑に就くこと。

⑤ 佛拄杖を著ふるを許す、二因縁あり、

一、老瘦と爲つて無力、

二、病苦の爲めに嬰身、

是れなり。

⑥ 此の章の大意は、己れに有して後に人に求むるを明す。

⑦ 東京、法雲寺法秀圓通禪師、

天衣圓の嗣。

⑧ 嗔。音ちなり、いなどと訓すべからず、氣のことなり。

⑨ 愛憎等の妄念起る時。

⑩ 論語に曰く、「憤せずんば啓せず、排せずんば發せず。」

① 天下の輿論を觀察すること。

② この章の大意は、學者の三根を説き、以て後昆に示す。

③ 論語に曰く、「五家を郷となし、五郷を里となし、萬二千

五百家を郷となし、五百家を黨となす。」

④ 此の章の大意は、人を服するは言行の誠信あるを示す也。

人之兼ぬること能はざるにあらす、蓋し其の勢不可なればなり。利と道とをして兼ね行はしめば、則ち商賈^①屠沽^②閭閻^③負販の徒も皆能く之を求めん、何ぞ必ずしも古人富貴を棄て、功名を忘れて灰心泯智して、空山大澤の中に於て澗飲木食して、其の身を終へんや。必ず利と道と之行つて相違礙せずと謂はゞ、譬へば漏卮を捧げて焦釜に灌ぐが如し、則ち終に能く溉濟することなし。^④ (與^⑤韓子蒼書)

死心曰く、「晦堂先師、昔東吳に游んで、圓照の淨慈の請に赴くを見る、蘇杭の道俗之を争つて止まず。一は曰く、「此れ我が師なり、汝何ぞ之を奪はん。」一は曰く、「今我が師なり、汝何ぞ有せん」と。(一本見三林間録)

死心、翠巖に住す、覺範、海外に竄逐せられて、道に南昌に過ぐると聞き、邀へて山中に歸る。迎侍連日、禮を厚うして、津送す。或人の謂く、「死心、喜怒常ならず」と。死心が曰く、「覺範は有徳の衲子なり、郷には言を極めて其の圭角を去く、今、横逆に罹る、是れ其の素分なり。予、平

① 屠肉酒沽。

② 屠者。

③ 行商人。

④ 此章の大意は、道徳と聲利とは相容れざるを明す。

⑤ 韓子蒼、韓駒、字は子蒼、仙臺の人也。

⑥ 圓照、圓照禪師、諱は宗本。初め懷公、吳江の壽聖院を退く。都使者李公復圭、懷公を過ぎ、夜話して瑞光の虚席を告ぐ。懷公、照を擧ぐ。瑞光に到つて常に五百人の衆を飯す。杭州の太守陳公襄、承天の興教を以て堅請す、蘇人、堅く之を留む。又淨慈を以て懇請す、三年にして、淨慈の席盛なり。既にして、萬壽、龍華の二刹を以て請す、迎人千餘人。元豐五年道場寺を門人善本に附し、瑞峰庵に居す。蘇人、又師の道譽を慕ふて奪

日叢林の道義を以て之に處す」と。識者謂へり、死心、人に私なきが故に此くの如し。(西山記聞)

死心、草堂に謂つて曰く、「晦堂先師の言く、「人の寛厚は天性に得たり、若し之に強ふるに猛を以てせば必ず悠久ならず、猛しうして久しからざる時は、則ち返つて小人の爲めに侮慢せらる。然も邪正善惡も亦天性に得たり、皆移すべからず、惟だ中人の性は上し易く下し易し、従つて之を化すべし」と。(實錄)

草堂清和尚曰く、「原を燎くの火は熒々より生ず、山を懷ぬるの水は涓々より漏る。夫れ水の微なるは捧土塞ぐべし、其の盛なるに及んでは木石を漂はし、丘陵を没す。火の微なるは水を勺んでも滅すべし、其の盛なるに及んでは都邑を焦し、山林を燔く。夫の愛欲の水腫毒の火を易んぞ常に異ならんや。古の人其の心を治むること、其の念の未だ生せず、情の未だ起らざるに防ぐ。所以に力を用ふるに甚だ微にして、功を收むること甚だ大なり。其の性情相亂れ愛惡交々攻むるに及んでは、自らは則ち其の生を傷り、他は則ち其の人を傷ふ、殆んど危し、救ふべからず。」 (與^①韓子蒼書)

へ歸らんとす。杭州人、郡守を多くして守る。遂に奪得す。後、待制曾公孝、照に謁して、漸く舟に乗つて津に浮び歸る、以て蘇人の望に慰むる也。尊隆山照院に舉る、年六十三歳なりき。

① 渡船場へ送る。

② 圭角あるは生れつき。

③ 其の四面を包むこと。

④ 此章の大意は、求道の人、第二念なきの大意を説く。

草堂曰く、「住持他なし、要は人情を審察し、上下を周知するにあり。夫れ人情審かにするときは、則ち中外和す、上下通ずる時は、則ち百事理あり、此れ住持の安んずる所以なり。人情審察すること能はず、下の情、上に通ずること能はず、上下乖反し百事矛盾す、是れ住持の廢する所以なり。其れ或は主者自ら聰明の資を恃んで、好んで偏見を執して物情に通せず、僉議を捨て、己が權を重んじ、公論を廢して私の惠を行はゞ、善に進むの途漸く隘く、衆に任ずるの道益微ならしむることを致す。其の未見未聞を毀り、其の所習所蔽を安んじて、其の住持大を經、遠きに傳へんと欲する時は、是れ却き行きて、前むことを求むが如し、及ぶべからず。」(與二 山堂一書)

草堂曰く、「學者身を立つるには正當ならんことを須要す、人をして竊議せしむること勿れ。一たび異論に涉れば則ち證を終るまで立つべからず。昔大陽の平侍者、道學叢林の爲めに推重せらる、心を處することの正しからざるを以て、識者之を非る、遂に身を坎珂に終つて死に速んで歸ること無きことを致す。然して豈に獨り學者のみならんや、一方の主人となつて尤も宜しく祗み畏るべし。」(與二 書記書)

●山堂。隆興府、黃龍山堂道暈禪師にして、草堂清禪師の法嗣なり。

●明安の室内を預り盡く、其の深旨を得たれども、他を陪擠して其の同列、己の右に出づるを惡む。大陽に住する時、先師の靈塔を發き、其の顛貌生けるが如きを火を放ちて之を焼けども焼けず、扇を破して油火す。此の罪に依つて衣を俗にせられ、黃秀才と稱し、諸方を流浪すれども皆顧みるなし。後三叉路口に於て、大蟲に食はれ坎珂に投ぜらる。

草堂、如和尚に謂つて曰く、「先師晦堂の言く、「稠人廣衆の中、賢不肖踵を接す、化門廣大なるを以て親疎を其の間に容れず、惟だ少しく精選を加ふるに在り。苟も才徳人の望みに合ふ者、己が怒る所を以て之を疎にすべからず、苟も見識庸常にして衆人の惡む所の者も、亦己が愛する所を以て之に親しむべからず。此くの如くならば則ち賢者は自ら進み、不肖者は自ら退いて叢林安からん。若し夫れ主者は好んで私心を逞しうし、己が喜怒を專にして人を進退せば、則ち賢者は緘嘿し不肖者は競ひ進まば、紀綱紊亂し叢林廢れなん。此の二者は實に住持の大體なり、誠に能く審かにして之を踐めば、則ち近き者は悦び遠き者は傳へん。則ち何ぞ道の行はれず、禱子の來り慕はざることを慮らんや。」(疎山石刻)

草堂、空首座に謂つて曰く、「叢林あつてより已來、人を得ることの盛んなるは、石頭、馬祖、雪峰、雲門に如くはなし。近代は唯だ黃龍、五祖の二老のみ、誠に能く四方の英俊の禱子を收拾す、其の器度の淺深、才性の能否に隨つて發して之を用ふ。譬へば輕車に乗り駿驥に駕して、其の六轡を總べ、其の鞭策を奮ふが如し。抑縱其の願盼の

●如和尚。未詳、或は佛眼遠の法嗣、雲居の法如和尚ならんか。
●疎山。靈隱佛海諸堂惠遠の法嗣、疎山歸庵如水禪師か。
●空首座。福州雪峰東山慧空禪師、草堂清の法嗣。
●石頭遷の法嗣二十一人、馬祖一の法嗣八十四人、雪峰存の法嗣四十二人、雲門偃の法嗣六十一人。
●黃龍南の法嗣二十四人、五祖演の法嗣二十二人。

間にあり、則ち何くに往くとしてか達せざらんや。」(廣錄)

草堂の曰く、「住持他なし、要其の偏聽、自專の蔽を戒謹するに在り、先入の言を主とせざれば、則ち小人の諂佞、迎合の讒、得て惑ふべからず。蓋し衆人の情一ならず、至公の論見難し、須らく是れ其の利病を察し、其の可否を審かにすべし。然して後に之を行ふて可なり。」(疎山實錄)

草堂、山堂に謂つて曰く、「天下の事、是非明かならず、謹まざることを得ず、是非既に明かなり、理を以て之を決せよ。惟だ道の在る所、之を斷つて疑ふことなかれ、此くの如くならば則ち姦佞も惑はすこと能はず、強辯も移すこと能はず。」(清泉記聞)

①中庸に曰く、「賤しうして自ら専らなるを好む云云、己だけ尊しとなすこと。
②移書に同じ、己が情を以て彼れに移す、又移は馬なり、己が情を以て彼れに馬ふるなり。

山堂の震和尚、初め曹山の命を却く、郡主移文して之を勉む、山堂之を辭して曰く、「若し梁を飯ひ肥を嚼んで名を貪るの糝子と作さしめんより、若かじ草衣木食して隱山の野人たらんには」と。(潘泉才庵主記聞)

山堂曰く、「蛇虎は、鷓鴣の雛に非ず、鷓鴣從つて號ぶことは何ぞや、其の異心あるを以ての故なり。牛豕は鷓鴣の馭にあらず、鷓鴣集まつて之に乗ることは何ぞや、其の異心なきを以ての故なり。昔、趙州、一庵主を訪ふ、生飯を出すに値ふ、州云く、「鷓鴣子、人を見て甚が爲めにか飛び去る。」主罔然たり、遂に前語を踏んで州に問ふ、州對へて曰く、「我れに殺心の在るが爲めなり。」是の故に人を疑ふものは人も亦之を疑ふ、物を忘るゝものは物も亦之を忘る。古人蛇虎と伍たるものは、善く此の理に達すればなり。老龐が曰く、「鐵牛は獅子吼を怕れず、恰も木人の花鳥を見るに似たり」と。斯言之を盡せり。」(與二周居士書)

山堂曰く、「下を御するの法、恩過すべからず、過ぐる時は則ち驕る。威嚴なるべからず、嚴なるときは則ち怨あり。恩あつて驕らず、威あつて怨みざらんことを欲せば、恩は必ず功あるに施して、妄りに人に加ふべからず、威は必ず罪あるに加へて濫りに辜なきに及ぼすべからず。故に恩厚しと雖も人驕る所なく、威嚴なりと雖も人怨む所なし。功或は稱するに足ら

①鷓也。
②かまきぎ、きじ。
③趙州訪一庵主。趙州、一庵主に問ふ、「什麼より來る。」對へて曰く、「生を送り來る。」州曰く、「強、什麼としてか飛去る。」某甲に怕す。「是れ什麼の語話ぞ。」院主却つて問ふ、「鷓子、什麼としてか飛去る。」師代つて云ふ、「某甲、殺生の心ありしと。
④生飯。衆生食、比丘食時必ず生飯數粒を取つて鬼子母に供養す。鬼子母は阿利帝也。
⑤古人蛇虎。嚴陽尊者、當に一蛇一虎を左右に隨ひ、手中に飯をとつて與ふと。
⑥老龐。江西馬大師の法嗣、襄州の居士。龐祖は、字は道支。頌して曰く、「但自無心於萬物。何妨萬物常圍繞。鐵牛不怕獅子吼。恰似木人見三花」

すして、之を賞すること己に厚く、罪或は責むるに足らずして之を罰すること至つて重ければ、遂に小人をして故に驕怒を生せしめん。(與三張 尚書考)

山堂曰く、「佛道の道は中を得るに過ぎず、中を過ぐるときは則ち偏邪なり。天下の事を極むべからず、意を極むるときは則ち禍亂す。古今の節せず、謹ますして殆んど危亡に至る者多し。然らば則ち孰か過なからんや。惟賢達の士は之を改めて吝なることなし、是を稱して美となす。」(與二 趙超然書)

山堂、韓尙書子蒼、萬庵、顔首座、賢真牧と同じく、難を雲門庵に避く。韓公因つて萬庵に問ふ、「近ごろ聞く、李成が兵吏の被めに執らはるゝと、何の計あつてか脱るることを得ん。萬庵の曰く、「昨に執縛せられて飢凍連日、自ら必死を度るに、偶々大雪屋を埋む、其の繋る所の屋壁故なくして崩倒す、是の夜幸に脱るゝもの百餘人。公の曰く、「正に執はるゝことを被る時、如何が排遣せん。」萬庵對へず、公再び之を詰る、萬庵の曰く、「此

れ何ぞ道ふに足らん、吾が輩學道、義を以て質と爲し死あるのみ、何ぞ懼るゝ所ならんや。」公之を領ふ、因つて前輩世を渡ること禍害死生、皆處斷あることを知る。(真牧集)

山堂、百丈を退す、韓子蒼に謂つて曰く、「古の進むものは徳あり命あり、故に三たび請じて行き、一たび辭して退く。今の進む者は惟だ勢と力となり、進退を知つて其の正を失はざる者は、賢達と謂つべし。」(記聞)

山堂、野庵に謂つて曰く、「住持は心を存して公にして事を行ふことを要す。必ず己より出でたるを是となし、他を以て非と爲さざるときは、則ち愛惡異同心に生せず、暴慢邪僻の氣自つて入ることなし。」(幻庵集)

山堂が曰く、「李商老が言く、「妙喜、器度凝遠にして節義人に過ぎたり、學を好んで倦まず老夫と寶峰に相従ふ、僅に四五載、十日見ざれば必ず人を遣はして問を致す。老夫家を擧つて腫を病む、妙喜、舍を過ぎて躬自

鳥。木人本體自無情。花鳥遷人亦不驚。心境如々遺足。何慮菩提道不成。

①周居士。大洪老禪祖證の法嗣。丞相益國周公。監丞成乘周公の二人あり、そのいづれなるやを詳にせず。

②尙書。職原に曰く、「辨は從四位上に相當す。殿中にありて、書を教くことを司る。尙書の名、既に七國の時代にあり、唐、秦等にあり、漢に及び、成帝の建始四年に、四人の尙書をおくこと、百官表に詳なり。尙主ともいへど、尙主は、王命により、萬機を敷奏し、罪決、行賞を司る重役なり。後、この尙主、尙書と改名せり」といへり、或は然るか。

③趙超然。圓悟の法嗣にして、郡主趙令幹、字は表之、超然居士と號す。

④李成云云。宋の高宗の紹興元

年春正月、張俊を以て、江淮招討使となす。岳飛之が副たり。時に孔彦舟、武陵に據り、張用は襄漢に據り、李成は江淮に據る、湖湘の十餘郡、尤も悍強なる連兵數萬、東南を席卷せんとの意あり、多く符璽を作つて、中外を幻惑し、久しく江州を圍む。朝廷之を患ひて、俊を以て招討使になす、俊、岳飛と共に是れを討つ、李成を黃梅に敗り、成、劉豫に奔る。俊、江を渡り、成を追つて蕪州黃梅縣に到り、更に大いに是れ敗り、その衆數萬、皆潰えて、劉豫に降るといふ。

⑤記聞に、「君子は三たび請じて進み、一たび辭して退く、以て亂を遠くす。」

⑥野庵。大惠果の法嗣、水陸野庵和尙なり。その語録を見ざるは遺憾なり。

ら煎煮す、子弟父兄に事ふる禮の如し、既に歸る、元首座之を責む、妙喜唯々として教を受く、識者其の法器なることを知る。『湛堂嘗て曰く、『呆侍者は再來人なり、山僧惜しいかな一見るに及ばざることを』と。湛堂、遷化する。妙喜千里に墮足して、無盡居士を洛宮に訪ふて、塔の銘を求む、湛堂、末後一段の光明は、妙喜の力なり。』(日涉記)

妙喜杲和尚の曰く、『湛堂前賢の書帖を得る毎に、必ず香を焚いて開讀す、或は之を石に刊る、曰く、『先聖の盛徳佳名詎んぞ棄置するに忍びん。』其の雅尚なること此くの如し、故に其の亡するときは十金の聚なし、唯だ唐宋諸賢の墨蹟僅かに兩竹籠のみ。衲子競つて相誦唱す、錢捌拾餘千を得て、茶毘の禮を助く。』(可庵集)

妙喜曰く、『佛性、大瀉に住す、行者地客と相歐つ。佛性、行者を治せんと欲す。祖超然因に言く、『若し地客を縦め行者を推辱せば、爲上下の名分を失するあるのみに非ず、切に恐らくは小人時に乗じて侮慢して

事行はれざらん。』佛性聽かず、未だ幾くならざるに、果して莊客の知事を殺す者あり。』(可庵集)

妙喜曰く、『祖超然、仰山に住す。地客常住の殺を盗む、超然素より地客を嫌ふ、意に之を遣せんと欲す、庫子の行者をして彼が爲めに狀を供せしむ、行者地客を保全せんと欲す、超然の意を察して起離狀を供せしむ。仍つて返つて叫喚せしめて肯て責を供せず、超然、行者の權を擅にするを怒つて、二人皆竹篋を決するのみ。蓋し超然陰かに行者の爲めに謀らるることを知らず。烏乎、小人の狡猾此くの如し。』(可庵集)

妙喜曰く、『愛惡異同は人の常の情、惟だ賢達高明は其の所轉を被らず。昔し圓悟雲居に住す、高庵東堂に退す、圓悟を愛する者は高庵を憎み、高庵に同する者は圓悟に異なり、是に由つて叢林紛々然として圓悟高庵の黨あり。竊かに二大士を觀るに、大名を海上に播す、常流の擬すべきにあらず、惜しいかな、軽く小人の諂言を信するに味うして聰明を惑亂す

目暴は理に反るを恐れず、恭密ならざるをいふ。慢は慢肆にして事を怠り緩むをいふ。
②この章の大意は、住持は公論を以て本懐とすべきを明す。
③逸人湛堂の法嗣。
④老夫舉家。大惠武庫に廬山の李商老、修造に依つて土を犯し、一家腫を病む、醫にて治し難し、依つて李商老、清掃して祈禱す。七日に満たざるに靈驗ありといふ。
⑤元首座。昭覺微庵元禪師、圓悟勤の嗣。大惠武庫に曰く、『師、寶峰にありしとき、元首座、極つて見て喜ぶ。一日請暇して往つて、李商老に見えんとす、一ヶ月にして歸らん、後四十日にして漸く歸る。元見て遽に云く、『噫、野了や、無常迅速』と、師、覺えず汗下る也。
⑥敬禮するなり。

①其の應世化導するを見ること能はず。
②蘭の歩るくが如し。
③湛堂示寂に及び、覺範をして行實を狀せしめ、龍安の照をして、張無盡に塔銘を求めしむ。舍利は孔老の書に聞くことなし云々と銘に書せりといふ。
④茶毘。だびとよむ、梵語、此に焚燒といふ。
⑤可庵。大惠杲の法嗣、寶峰慧然禪師なり、傳なきを恨む。
⑥佛性。圓悟勤の法嗣、潭州大瀉の佛性法泰禪師にして、蜀の人、姓は李氏といふ。
⑦未だ度牒を得ず、有髪の僧、僧寺に止まる者ないふ。
⑧細戸の下作人なり。
⑨祖超然。臨安府の佛日文祖慧然禪師、天衣懷の法嗣。
⑩此の章にては、小人の狡智を説き、主者の注意を抽く也。

ることを。遂に識者の爲めに咲はる、是の故に宜しく其れ 亮座主、隱山の流、高上の士たるべし。」(智林集)

妙喜曰く、「古人善を見ては則ち遷り、過あるときは則ち改む。徳を率ゐて循行して免れて咎なからんことを思ふ。患ふる所は其の惡を知らざるより甚だしきはなし、美とするところは好んで其の過を聞くより善きはなし。然も豈に古の人才智足らず、識見明かならずして是くの如くならんや。誠に後世自廣として人を狭くする者をして戒と爲さしめんと欲す。夫れ叢林の廣き、四海の衆一人の能く獨知する所にあらず、必ず左右の耳目を資として思慮す。乃ち能く其の義理を盡し、其の人情を善くす。苟し或は尊居して自ら重く、細務を謹しみ、大體を忽にし、賢者知らず不肖者察せず、事の非なる改めず、事或は是なれども従はず、意を率ゐて狂爲して忌み憚る所なくんば、此れ誠に禍害の基なり、安んぞ懼れざることを得んや。或は左右果して諮詢すべきものなくんば、猶ほ宜しく法を先聖に取るべし、豈に嚴城堅兵の如くにして、自つて入ることなかるべけんや。此れ殆んど所謂百川を納れて大海を成すに非ずや。」(與三竹庵一書)

- ① 竹庵を以て撲つに決す。
- ② 前住の位を指す。
- ③ 二大士に此の行ありしや、未考、然りと雖も叢林紛々たるは、其の主たる二大士の罪といふべきや。
- ④ 亮座主。江西馬大師の法嗣。亮座主はもと蜀人也、頗る経論を講じ、因に馬大師に參じ、後に聽衆に告げて曰く、「我が所講の經論、人の及ぶなしと謂へり、今日、馬大師に一間せられて、平生の功夫、氷の釋くるが如し」といつて、西に隱れて消息なし。
- ⑤ 實和尚。大惠果の法嗣、大鴻法實禪師にして、福州の人、或はこの人ならんや。未だ確かならず。

妙喜曰く、「諸方長老を舉せば須らく道を守つて 恬退なる者を舉すべし。之を舉する時は則ち志節愈々堅くして至る所に常住を破壊せず、叢林を成就す。亦法を主する者は今日の蔽を救ふ。且つ詐佞狡猾の徒、羞耻を知らず、自ら能く勢位に諂奉し、權貴の門に結托せば、又何んぞ舉することを須ひん。」(與三竹庵一書)

妙喜、超然居士に謂つて曰く、「天下公論たる廢すべからず、縦ひ之を抑へて行はざれども其の公論を如何せん、所以に叢林一りの有道の士を舉ぐれば、聞見必ず忻然として稱賀す。或は一りの不諱當の者を舉ぐれば衆人必ず憾然として嗟嘆す。其れ實に他なし、公論行と不行とを以てなり。烏乎此を用つて以て叢林の盛衰を卜すべし。」(可庵集)

⑥ 音順なり、淡くして無欲の形。

妙喜曰く、「節儉放下は乃ち身を修むるの基、道に入るの要なり。古人を歴観するに、節儉放下せざる者あること鮮し。年來衲子荆楚に遊んで毛褥を賣り、浙右を過ぎて紡絲を求む、古人に愧ぢざることを得んや。」

妙喜曰く、「古徳の住持、常住を親らせず、一切悉く知事に付して掌管せしむ。近代の主者自ら才力餘りあるを恃んで、事大小となく皆方丈に歸す、而して知事徒らに其の虚名あるのみ。嗟乎苟も一身の資を以て一院の事を把攬して、小人をして蒙蔽ならず、紀綱紊亂せずして至公の論に合はしめんと欲せば、亦難からざらんや。」(與三山堂一書)

妙喜曰く、「陽極るときは則ち陰生じ、陰極るときは則ち陽生す。盛衰相承く乃ち天地自然の數なり。惟れを『豊いに享る、日中に宜し。』故に曰く、『日中なるときは則ち戻り、月満つるときは則ち虧く、天地の盈虧時と消息す、而も況んや人に於てをや。』所以に古の人、其の血氣壯盛の時に當つて、光陰の往き易き事を慮る。則ち朝に念ひ夕に思ひ、戒め謹んで彌懼る。情を恣にせず逸欲せず、惟れ道是れを求む、遂に能く其の令聞を全うす。若し夫れ之を墮るに逸欲を以てし、之を敗るに恣情を以てせば、救ふべからざるに殆し。方に足を頓らしめ、腕を振ひて之を追へども晚からん、時得難うして失ひやすし。」(蘇林集)

①方丈。維摩居士の方丈の室より取る、今は即ち住持の居室のこと、蓋し寺院の正殿を指す。唐の顯慶年中差衛尉寺丞李義表前融州に、黃水の令王玄策に勅して西域に往かしむ。毘耶利城の東北四里計に到つて、維摩居士の示疾の蹟を見たるに石にて疊みたるもの、王策、手板を以て縱横を量るに、十笏なりき、故に方丈と名づく。②豊。易の豐卦なり。③豐。下震上、雷火豊之卦。④蘇林集。向子諷伯恭は臨江の人なり、敏中が玄孫にして、退閑十五年、所居を號して蘇林といふ。卒する時、年六十八。この人の集をいふなるべし。

妙喜曰く、「古人先づ道徳を擇ぶ、次に才學を推して進む。當時苟も良器に非ずして身を人前に置く者ば、見聞多く之を薄くす、是に由つて衲子自ら名節に砥礪して立たん事を思ふ。比る見る、叢林凋喪して學者道徳を顧みず、節義少く廉耻なくして、淳素を讓つて鄙朴となし、鬻浮を獎けて俊敏と爲す。是れ晚輩識見明かならず、涉獵抄寫して用つて口舌の辯を資けて、日に滋く月に浸つて、遂に澆漓の風を成すことを致す。聖人の道を語るに遠んでは書として、牆に面ふが如し、此れ殆んど救ふべからず。」(與三子書)

①此節の大意は、初めに古と今の不同を説き、併せて文字の恃むべからざるを戒す。②至近の地に即き、一物も見ると所なく一步も進むべからず。③司馬君實諫院の題名記也。

妙喜曰く、「昔し晦堂、黃龍、題名の記を作るに曰く、『古への學者は居は則ち巖穴、食は則ち土木、衣は則ち皮草、心を聲利に係けず、名を官府に籍せず。魏晉齊梁隋唐より以來、始めて招提を糊め、四方の學徒を聚む。賢者を選んで不肖を規し、智者をして愚迷を導かしむ。是に由つて賓主立つて上下分る。夫れ四海の衆、一寺に聚る、其の任に當る者誠に亦能くし難し。要は其の大を終へ、其の小を捨て、其の急を先にし、其の緩を後にして、私の計を爲さず、専ら人を利するにあり。汲々として一身の謀を爲す者に比するに、實に霄壤なり。今黃龍歴代の住持を以て其の名を石に題す。後の來者をして見て之を目けて、孰か道徳ある、孰

か仁義ある、孰か衆に公なる、孰か身を利すると曰はしむ。嗚呼懼れざるべけんや」と。(石刻)

張侍郎子詔、妙喜に謂つて曰く、「夫れ禪林首座の職、乃ち賢を選ぶの位なり、今諸方賢不肖を問はず、例して以て僥倖の津途と爲す、亦法を主る者の失なり。然れば則ち像季固に其の人を得難し、若し其の履行稍優かに、才德稍備り、廉耻節義を識る者を選んで之に居らしめば、夫の險道の徒と亦差勝らん。」(可庵集)

妙喜、子詔に謂つて曰く、「近代法を主る者、眞如の語に如くはなく、善く叢林を輔弼するは、楊岐に若くはなし。議者謂へらく、慈明眞率にして事を作すこと忽畧なり、殊に避忌なし、楊岐身を忘れて之に事ふ。惟だ周からざることを恐れ、惟だ辨せざることを慮る。寒を衝き、暑を冒すと雖も、未だ嘗つて己が情容を急にせず。始め南源より興化に終ふ、僅かに三十載、總て綱律を柄す、慈明の世を盡して後に止む。眞如の如くんば、

初め東包行脚せしより、世に應じ徒を領するに逮ぶまで、法の爲めに軀を忘ること、管に飢渴の者の如くなるのみにあらず、造次にも顛沛にも違てたる色あらず。疾く言ふことなし、夏窓を排かず、冬火に附かず、一室翛然として凝塵、案に滿つ。嘗て曰く、「衲子、内に高明遠見なく、外、嚴師良友乏しきときは、克く器を成する者あること尠し。」故に當時執拗なること孚鐵脚の如く、倔強なること秀圓通の如くなる、諸公、皆風を望んで偃す。嗟乎二老は實に千載衲子の龜鑑なり。」(可庵記聞)

子詔、妙喜、萬庵と同じく三人、前堂本首座の寮に詣して疾を問ふ。妙喜曰く、「林下の人身安くして然して後に以て道を學ぶべし。」萬庵直に謂へり、「然らず、必ず學道を欲せば、當に更に其の身を顧みるべからず」と。妙喜曰く、「爾這の漢又顛するや」と。子詔、妙喜の言を重んずと雖も、終に萬庵の語を愛して當れりとす。(記聞)

子詔、妙喜に問ふ、「今の住持に方つて何をか先にせん。」妙喜曰く、「禪

②張侍郎。張九成、字は子詔、其の先は開封の人、徒つて鐘塘に居る、紹興二年進士となり、召されて宗正少卿權禮部侍郎、兼侍講兼刑部侍郎たり。眞如の語。大鴻に住し、衆を領すること二千指、約條なけれども、人々自律してよく入室參禪して問道す。語、諸方に講じて、寧日なく、然も故參罷めば、自ら作務して、側に命令者のあるが如し、かくあること十有四年、夜禮拜して殿廡の燈火を視、倦れば杖を以て首に蒙り、三聖堂に假寐すること又十有餘年、而も老に到るまで、滯せざること十有餘年に及び、法を大切にし、叢林を重んずること斯の如し。

③楊岐の會禪師は、慈明の南原に住せる時、是れを輔けて勳勞を分ち、慈明、道吾石霜に還るや、會俱に請ふて雙院を領す、積妄を挾んで、金穀を典す、慈明爲に摩拂す、世傳へて當となせり。

④長蘆の應夫廣照禪師、天衣懷の嗣。行脚の時、一邸に宿る、婦女あり、母の爲に迫られて、照の室に入り去らず、照、脚臥して且に達す、叢林傳へ聞いて、夫鐵脚と稱す。鐵脚燈、大惠武庫に俱に出づ。

⑤秀圓通。秀化して後、月を踏えて、法雲の叢林を觀るに、其の遺風餘烈、嚴として存す。その像を見るに、面目嚴冷として、怒氣人に噴く、平生、罵を以て佛事となし、又一に叢林の一害と謂へるも虚言にあらず。

⑥本首座。萬福の悟本禪師、大惠果の嗣。

⑦僧といふこと。

和子を安著することは、錢穀に過ぎざるのみ。時に萬庵座に在り、以て謂く、「然らず。常住の所得を計つて善能く浮費を樽節し、之を用ふること道あらば、錢穀數ふるに勝へず、何ぞ慮を爲すに足らん。然らば今の住持に當つては、唯だ抱道の衲子を得るを先とす。假使ひ住持智謀あつて、能く十年の糧を儲くとも、座下に抱道の衲子無からんには、先聖の所謂坐ながら信施を消し、仰いで龍天に愧づと何の住持に補あらん。」子韶が曰く、「首座の言ふ所極めて當れり。」妙喜、萬庵を回顧して曰く、「一箇々都て備に似たり」と。萬庵休し去る。(已上並見可庵集)

萬庵の顔和尚の曰く、「妙喜先師始め徑山に住す、夜參に因つて諸方を持論す、曹洞の宗旨に及んで已ます。次日、音首座、先師に謂つて曰く、「夫れ出世利生素より細事にあらず、必ず宗教を扶振せんと欲せば、當に時に隨つて蔽を救ふべし、必ずしも目前の快を取らず。和尚前日禪和子と作つて諸方を持論す、猶ほ妄にすべからず、況んや今寶華王座に登つて善知識と稱するをや」と。先師の曰く、「夜來一時の説なり。」首座の曰く、

「聖賢の學は天性に本づく、豈に率然なるべけんや。」先師首して之を謝す、首座猶ほ之を説いて已ます。萬庵曰く、「先師衡陽に竄せらる、賢侍者貶詞を録して僧堂前に揭示す、衲子父母を失ふが如くにして涕泗愁嘆す、居處るに違あらず。」音首座衆寮に詣して之に白して曰く、「人世の禍患苟も免るべからず、妙喜をして平生婦人女子の如くにして、下板に陸沈して緘黙して言はざらしめば、故らに今日の事なからん、況んや先師爲すべき所の者是に止まらず、爾等何ぞ苦ろに自ら傷む。昔し慈明、瑯琊、谷泉、大愚伴を結んで汾陽に參す、適々西北の兵を用ふるに當つて、遂に衣を易へて火隊の中に混じて往く。今、徑山、衡陽相去ること遠からず、道路間關を絶し、山川險阻なし、妙喜を見んと要せば、復何ぞ難からんや」と。是に由つて一衆寂然たり、翌日相繼いで去る。(廬山智林集)

萬庵曰く、「先師梅陽に移る、衲子間々竊議する者あり、音首座曰く、「大凡人を評論せば、當に有過の中に於て無過を求むべし、詎んぞ無過の中に於て有過を求むべけんや。夫れ其の心を察せずして、其の跡を疑はゞ、

①會下即ち師化に隨從する者共を云ふ。
②慈覺禪師自贊文に曰く、坐ながら信施を消し、仰いで龍天に愧すと。
③此の一節は、全文二段と爲すべし。
一、先づ會下に諫者あれば、師道昌なるを明し。
二、後段は人生禍患は苟くも免るべからざるを示す。
④曹洞。洞山真价禪師は會稽の人、靈岩曇成の法嗣、曹山本寂禪師は泉州の人、洞山真价の法嗣、この二人の宗派を曹洞宗といふ。
⑤音首座。長蘆和禪師の法嗣、法音首座禪師なり、此人には無縁なり。
⑥天台四教義別教に曰く、十蓮花藏世界七寶の菩提樹下大寶花王座に坐し給ふ云々。即ち

師化説法の時の座床を指す。
①先師。衡陽。大愚年譜によれば、紹興十一年師五十三、四月、侍郎長公、九成、交卒哭を以て、山に登り法を修す、大愚、陸座して、偈して曰く、「神臂弓一發。邊過千里甲。子細拈來看。當其真皮履」と。張九成、喪服ならざるを以て、徑山の主と共に罪せられ、一人、徑山の主、宗杲、追隨、衡州に賣すと。
②賢侍者。大愚果の法嗣、編嚴の了賢禪師也。
③下位といふが如し。
④谷泉。汾陽昭の法嗣、南嶽芭蕉の大道谷泉禪師也。
⑤大愚。汾陽昭の法嗣、瑯州大愚山の守芝禪師也。
⑥西北用兵。宋太宗興國四年己卯春正月、帝議して、漢の薛居正等を代んとす、多く不可となす、惟曹彬力めて賛す。乃

誠に何を以てか叢林の公論を慰めん。且つ妙喜の道德才器、天性より出でたり、身を立て事を行ふこと惟れ義、是れ從、其の量度、固に人に過ぎたり。今造物之を抑ふ必ず道あり、安んぞ其の法門。異時の福たることを知らざることを得んや。聞く者此れより復議論せず。」(智林集)

●音首座、萬庵に謂つて曰く、「夫れ善知識と稱せば、當に其の心を洗濯して至公至正を以て四來を接納すべし、其の間道徳仁義を抱く者あらば、騷隙ありと雖も、必ず須らく之を進むべし。其れ或は姦邪險薄なる者私恩ありと雖も、必ず之を遠ざくべし。來者をして各守る所を知つて心を一にし、徳を同じうせしめて、而して叢林安からん。」

ち帝決して潘美を北路都招討使とし、崔彦進、李漢瓊、劉遇曹、韓米信、田重進等軍を四分して、太原城を攻む。契丹、遼馬長壽を遣はし來つて、曰く「名は何として僕をうつや。」太宗曰く「河東命に遡く、問罪すべき也、若し北朝援けずんば、和約せん、然らずば惟れ戦はんのみ」と。
●易衣濕云々。守芝、谷泉と伴を結んで入洛し、汾陽の昭禪師、道望の天下第一なるを聞いて、志を決して親依す。時に朝廷、方に河東に問罪し、露澤、到る處、軍兵に充つ。即ち大河を渡り、太行に登り、衣を易へ、斷髮に類し、名を大隊の中に宣し、露眠、草食して龍州に到り、遂に汾陽に至る。昭公、之を壯なりとす。
●徑山衡陽云々。天目の東北峰に路あり、天目に通じ、故に

徑山と名づく。天目は臨安縣の西五十里。衡山縣は常德府の城東北、百五十里にあり、三國時代、吳衡陽縣をおく、晉に衡山と改む。
●此の章の大意は、大徳の行爲は、庸人の窺知する所にあらず、漫りに之を評すべからざるを示す。
●梅陽に移る。大惠年譜に紹興二十年、庚午、六月二十五日、命に准じ、梅州に移る、十月初二日、既州に至ると。
●巨窟の跡をいふ。
●音首座の言空しからず、後十五年にして高宗特赦して放つ、四方席を慮しくして師を待つ、皆就かず、朝命に依つて曹王に住し、逾年徑山と改む。道俗の歸仰、前に過ぐ、孝宗其の徳を賞して妙喜庵の額を賜ひ、並に贊を製して之に警せらる。

音首座曰く、「古への聖人は災なきを以て懼と爲す、乃ち曰く、「天豈に不般を棄てんや。」范文子曰く、「惟だ聖人は能く内外患なし、聖人にあらざるよりは、外寧きときは必ず内憂ふ。」古今の賢達其の免るゝこと能はざるを知つて、嘗て其の始めを謹しむ。之が爲めに自ら防ぐ、是の故に人世稍憂勞あり、未だ必ずしも終身の福を爲らすんばあらず。蓋し禍患誘辱は堯舜と雖も逃るべからず、況んや其の他をや。」(興二妙喜一書)

音首座、萬庵に謂つて曰く、「凡そ住持する者、孰れか叢林を建立することを欲せざらん。而れども克能く振ふ者鮮し。其れ道德を忘れ仁義を廢て、法度を捨て私情に任ずるを以て、然ることを致す。誠に法門の凋喪を念ふて、當に己を正しうして以て人に下り、賢を選んで以て佐け佑く。宿徳を推奨し小人を疎遠し、節儉身を修め徳惠人に及ぶ、然して後に用ふる所の執侍の人稍や近づく。老成の者をば之を存し、便佞の者をば之を疎んず。貴ぶらくは醜惡の誘り偏黨の亂なからんには、此くの如くならば則ち馬祖百丈にも倅しくすべく、臨濟・徳山にも遠ぶべし。」(智林集)

●萬庵の顔和尚の曰く、「此の叢林を見るに、絶えて老成の士なし。至る所三百五百、一人を主と

し多人を伴とす。法王の位に據つて、拈槌豎拂、互に相欺誑す、縦ひ談説あるも典章に涉らず、宜なるかな、其の老成の人なきや。夫れ出世利生は佛に代つて化を揚ぐ、心を明らめ本に達し行解相應するに非ずんば、詎んぞ敢て之を爲さん。譬へば人ありて妄りに帝王と稱して自ら誅滅を取るが如し、況んや復た法王如何んが妄りに竊まん。嗚呼聖を去ること逾かに遠し、水潦鶴の屬、又復縦横なり。先聖の化門をして日に淪溺に就かしむ、吾言なからまく欲すとも可ならんや。庵居無事なるに屬して、條々風を傷り教を敗りて害を爲す者、一二を陳べて叢林に流布す。後生晩進をして前輩兢兢業々として大法を荷負するを以て心となして、氷凌上に行き、劍刃上に走るが如きことを知らしむ。名利を苟むるに非ず、我れを知り我を罪す、吾れ辭するとなげん。^① (智林集)

萬庵の曰く、「古人の上堂は、先づ大法の綱要を提げて大衆に審問すれば、學者出で來つて請益す、遂に問答を形はす。今人は四句落韻の詩を杜撰して、喚んで釣話と作す、一人衆前に突出して、高く古詩一聯を吟じて、

①佛をいふ、今は堂頭和尚を指す。
 ②阿難陀、諸比丘と竹林園にあり、一比丘あり、水潦鶴と名く、頌を説いて曰く、「若し人壽百歳なるも水潦鶴を見ずんば、一日生れて水老鶴を見ることを得んには如かず」と。阿難陀之に告げて曰く、「若し人百歳なるも生滅を了せずんば、一日生れ得て生滅を了するに如かず」と。其徒之を比丘に告ぐ、比丘曰く、「阿難老暗なり、憶持なし、忘失せり、信すべからず」とて、又いふこと前の如し。要之自己の偏見を正なりと強ひて主張するを曰ふ。
 ③次に載する六編を指す。
 ④以上この本文にては、世、像季にして老成の士なきを嘆

喚んで罵陣と作す。俗惡俗惡悲しむべく痛むべし。前輩生死事大を念じて衆に對して疑を決す。既に發明するを以て、未だ生滅の心を起さず。」

萬庵曰く、「夫れ名行の尊宿、院に至れば、主人陞座、當に謙恭に謝を叙ぶべし。尊を屈して卑に就く、増重の語あり、座を下りて首座大衆と同じく請じて座に陞らしめて、法要を聞かんことを庶ふ。多く近時を見るに、相尙ぶに古人の公案を擧げて衆に對して批判せしむ、喚んで他を駭すと作す、切に此の心を萌すことなけれ。先聖法の爲めに情を忘す、同じく法化を建て互に相誦唱して、法をして久住ならしむ。肯て心を生滅に容れて、此の惡念を興さんや。禮は謙を以て主と爲す、宜しく深く之を思ふべし。」

萬庵曰く、「此ろ士大夫、監寺、郡守山に入るを見るに、處することある、次の日、侍者をして、長老を取覆せしむ。『今日、特に某の官の爲に陞座せよ』と、此の一節、猶ほ宜しく三思すべし。然も古來、方冊の中に載すと雖も、皆是れ士大夫、智識を訪尋して來れば、住持の人、因に參する次で、

じ、聖教を濫るを戒しむ。
 ⑤問ふて己が智見をますこと。
 ⑥生死事大。東陽の策和尚、曹溪に詣す。錫を振ひ、瓶を携へ、瓢を繞つて、三匝、卓然而立す、祖曰く、「夫れ沙門とを具す、大徳、何方より來つて、大我慢を生ずるや、策曰く、「生死事大、無常迅速。」
 ⑦申し出で告ぐるなり。
 ⑧方冊。中庸曰く、「文武の政、布いて方策にあり」と、方は版也、策は簡也。
 ⑨郭功揚次公訪白雲。無爲子、既に白雲端に參す、端と應酬年あり。揚次公、一日端を訪れ、夜話の間、悉く此の老の來旨を知り、上堂して、その心肝を發く、揚公深く端を敬すといふ。
 ⑩東坡居士、佛印に參す、佛印曰く、「坐禪なし、此間甚麼と

畧ば教門を外護し、泉石を光輝するの意を提ぐ。既に是れ家裡の人、家裡
兩三句の談話を説いて、彼をして敬を生せしむ。郭功輔楊次公が白雲を
訪ひ、蘇東坡黃太史が佛印を見るが如き、便ち是の様子なり、豈に是れ
特地に妄りに爲めに咲を識者に取らんや。」

萬庵曰く、「古人の入室は、立僧首座に命じて先づ牌を掛けしむ、各
人生死事大なるが爲めに踴躍して來つて決擇を求む。多く近時を見るに老
病を問ふことなく、求めて降款を納れしむ。麝あれば自然に香ばし、何ぞ
公界を之を驅ることを用ひん。此れに因つて妄りに節目を生じて賓主安か
らず、法を主る者當に之を思ふべし。」

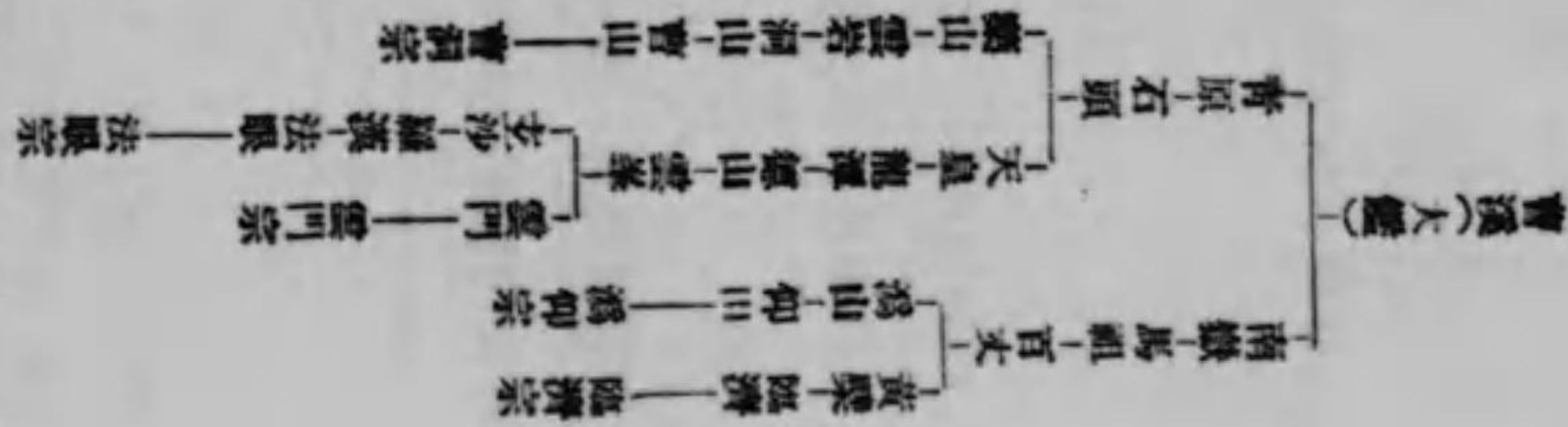
萬庵曰く、「少林の初祖、衣法雙べ傳ふ、六世にして衣は止めて傳へず、
行解相應して其の家業を世ぎ、祖道愈々光り、子孫益繁なることを取る。
大鑿の後、石頭・馬祖皆嫡孫なり、般若多羅の懸識に兒孫の脚下を假つ
て行かんと要すと云ふに應ずる是なり。二大士立言妙語、寰區に流布す、

潛符密證の者比々之あり、師法既に乘けれども學に専門なし、曹溪の
源流、派別れて五つと爲る、方圓器に任せども水體是れ同じ。各佳聲を
撞にして力めて己が任を行す。等閑に一言を垂れ一令を出して、學者を
網羅す。叢林鼎の如くに沸く苟然なるに非ず、是れに由つて互に相酬唱し
て、微を顯はし幽を聞き、或は抑或は揚、法化を佐け佑けて、語言味なし。
木札羹を煮、鐵釘飯を炊くが如くにして、後輩に與へて咬嚼せしめ、目け
て拈古と爲す。其の頌は汾陽より始まる、雪竇に暨んで其の音を宏にし、
其の旨を顯はす、汪洋乎として涯むべからず。後の作者雪竇に馳騁して之
を爲す。道德の爰若んと云ふことを顧みず、文彩煥爛として相鮮かなるを
以て美と爲す、後生晚進をして、古人渾淳大空の旨を見ること克はざらし
む。鳥乎予叢林に遊んで前燈を見るに及ぶ、古人語録に非ざれば看す、百
丈の號令に非ざれば行はれず、豈に特に好古ならんや。蓋し今人は法るに
足らざればなり。望むらくは通人達士、我を言外に知らば可ならん。」

萬庵曰く、「叢林至る所邪說熾然たり、乃ち云く、「戒律必ずしも持せず、

して作さん、居士曰く、暫
く佛印の四大を借らん、山
僧に一間あり、若し道ひ得ば
請坐し、道ひ得ざれば、居士の
玉帶を輪せん。居士、欣然と
して首肯す、師曰く、居士適
來して、山僧の四大を借つて
坐榻とせんと、四大、本と空、
五陰有にあらす、居士甚慶と
して、坐せん。居士、答ふる
能はず、即ち玉帶を留む、師
遂に雲山の衲衣を贈ると。
◎成立兼僧の意。
◎普說、入室等の掛札なり。
◎衣法雙傳。正宗記卷七に曰
く、「從上以衣與法、僧傳」
と。

◎東天竺の人、法を不如實多に
顯ぎ、佛より二十七祖なり、
南印度に至り、香至王の子な
度す、達磨大師之なり。
◎曹溪の源流派、別れて五とな
る。次の如し。



◎此の章にては、末世の比丘
三學を修せず、妄りに大乘の

定慧必ずしも習はず、道徳必ずしも修せず、嗜欲必ずしも去ざけず。」又維摩圓覺を引きて證となし、貪瞋痴、殺盜婬を賛して梵行と爲す。烏乎斯言豈に特に叢林今日の害を起すのみならんや、眞に法門萬世の害なり。且博地の凡夫、貪瞋愛慾、人我無明、念々攀緣して一鼎の沸くが如し、何に由つてか清冷ならん。先聖必ず大に此に於ける者あらんことを思ふて、遂に戒定慧の三學を設けて之を制す、庶はくは迴すべきことを。今後生晚進戒律持せず、定慧習はず、道徳修せず、専ら博學強辯を以て、流俗を搖動す、之を牽けども返ることなし。予固に所謂斯言は乃ち萬世の害なり、惟だ正因行脚の高士、當に生死の一著を以て辨明して誠を持し信を存して、此の輩の爲めに牽引せられざるべし。乃ち曰く、「此の言信すべからず、猶ほ鳩毒の糞、蝨飲の水の如し、聞見猶ほ不可なり、況んや之を食はんをや。」其れ人を殺すこと疑なし、識者は自然に之を遠ざく。」

(吳草堂書)

語を曲解し、己が穢行を助く、實に是れ法門の萬世の怨害なることを嘆く也。
 ②本章の大意は主法上下之に效ふを明す。
 ③公事あるとき。

① 萬菴曰く、「草堂の弟子、惟だ山堂のみ古人の風あり、黃龍に住せし日、知事公幹ある時は、必ず威儀を具して方丈に詣して曲折を受く、然して後に茶湯の禮を備ふ、始終易へず。智恩上座と云ふ者あり、母の爲に冥福を修す、金二錢を透下す、兩日尋ねず、聖僧の才侍者、地を掃くに因つて之を得たり、拾遺の牌に掛く、一衆方に知る。蓋し主法の者清淨なれば上行下効の所以なり。」(清泉集)

萬菴曰く、「比る衲子を見るに、好んで偏見を執して物情に通せず、輕信廻らし難し。人の己を佞ふを愛す、之に順ふ時は則ち美め、之に逆らふ時は則ち疎にす。縦ひ一知半解あるも、返つて此の惡習に蔽はるゝことを被る。白首に至るまで成ることなきもの多し。」(已上並見三子智林集)

萬菴、節儉にして小參普説を以て供に當つ、衲子間竊議するものあり、萬菴之を聞きて曰く、「朝に膏粱を饗すとも、暮に麤糲を厭ふは人の常情なり、汝等既に生死事大を念じて寂莫の瀕に相求む、當に道業未だ辨せず、聖を去ること時遙かなることと思ふべし、朝夕に貪饗を事とすべけんや。」(眞牧集)

② 萬菴、天性仁厚にして躬を處すること廉約なり、尋常語句を出示するに、辭は簡にして義は精なり、博學強記にして道理を窮詰す、苟も止めて妄りに隨ふことを爲さず、人と古今を評論するときは、身其の間を履むが若し、聽者曉然として目に觀るが如し。衲子嘗て曰く、「歳を終るまで參學せんより、若かじ一日師の談論を聽いて得たりとせんに

③此の章は衲子、重んずる處は、唯だ生死事大なり、麤糲を飲食するをいふに非ずとの意を明す也。
 ④此の章の主意は、師仁厚なれば學者信じて二意なきことを明す也。

は」と。(記問)

萬菴、辯首座に謂つて曰く、「圓悟師翁言へることあり、「今時の禪和子、節義少く廉耻なし、士大夫多く之を薄んず、爾異時儒し這般の蟲豸と做らんことを免れずんば、常々繩墨上に在つて行せよ、勢利に趨り人の顔色に依ることなかれ、生死禍患一切之に任せん、即ち是れ魔界を出でずして佛界に入るなり」と。(法語)

辯首座出世して廬山の棲賢に住す。常に一笈を携へ雙屨を穿いて九江の東林に過ぐる、混融老之を見て呵して曰く、「師は人の模範なり、舉止かくの如く自ら輕からざることを得んや、主體甚だ滅裂す。」辯笑ふて曰く、「人世は意に適するを以て樂と爲す、吾れ何の咎あらん。」毫を援つて偈を書して去る。偈に曰く、

「謂ふこと勿れ棲賢窮すと、

身窮して道窮せず。

草鞋猛にして虎に似たり、

拄杖活して龍の如し。

此の章の主旨は、主法人は一寺の主たるも、執利を忘れ、志の堅固なるべきを明す。

混融老。廬山の元は慧明の嗣也、後に雪豆の難を得、兼は燕寛印を得、混融の然、實に之を嗣ぐ。乾道の間、然、金陵天禧に住す、時に妙庵禪、保寧に住す、明大禪、廬山に住す。明、然を薄んず、其の流派、黃龍楊岐の直下にあらざる也。併て與に庭に諍ふ。然、口辯捷、明、頗る困じ、痴禪を得て之を解す。然、器量人に過ぎ、出世甚だ早く、諸方の門戸を歴すして、宗源混融す、故に叢林多く之を薄んず。

曹溪の水。天台の韶國師傳に、一日、淨惠上堂し、偈あり、問ふ、「如何なるかこれ曹溪の一滴水。」淨惠曰く、「是れ曹溪の一滴水」と。

渴しては曹溪の水を飲み、飢ゑては栗棘蓬を呑む。

渴しては曹溪の水を飲み、

飢ゑては栗棘蓬を呑む。

銅頭鐵額の漢、

盡く我が山中に在り。

混融之を覽て愧づることあり。(月窟集)

辯公、混融に謂つて曰く、「象龍雨を致すに足らず、畫餅安んぞ飢に充つべき。衲子内に實徳なく、外、華巧を恃む。尙ほ敗漏の船に盛んに丹糝を塗つて、偶人をして之に駕して陸地に安んせしむるが如し。則ち信然として觀るべし、一旦江湖を涉り、風濤を犯さば危からざることを得んや。」(月窟集)

辯公曰く、「所謂長老とは佛に代つて化を揚ぐ、要己を潔くするに在り、衆に臨んで事を行はゞ當に其の誠を盡すべし、豈に利害を擇んで自ら其の心を分つべけんや。我れに在つては之を爲すこと固に當に是くの如くなるべし。若し其れ成と不成とは先聖と雖も必ずすること能はず、吾れ何ぞ苟もせんや。」(月窟集)

栗棘蓬。楊岐に偈問ふ、「栗棘蓬、備作麼生か呑まん。金剛圈、備作麼生か透らん」と。

銅頭鐵額。菴氏の兄弟七十二人、銅頭鐵額にして、鐵石を食ふ。涿鹿の野に誅せらる。

月窟集。迦庵の法嗣、何山の月窟禪師の衆ならんか。

象龍不足致雨。揚子、方言先知窟の語也。

畫餅云云。荆州香嚴智閑、滬山の禪會に依る。その法器たるを見て、智光を激發せんと欲し、一日、是れに謂つて曰く、「吾れ汝が平生の學解及び經卷册子の上に記得する者を問はず、汝未だ胞胎せられざる時、東西遊せず、その時本分の事、試に一句を道ひ來れ」と、師、歸堂し、諸經を検して遂に一言あらず、乃自ら歎じて曰く、「畫餅不可充飢」と。

辯公曰く、「佛智裕和尚、西禪に住す、禱子務めて整齊を要す、惟だ水庵和尚、賦性冲澹にして身を奉すること至つて薄し、昂々然として稠人中に在り。曾つて屑慮せず、佛智因に之を見て呵して曰く、「奈何せん。蒸直なること此くの如くなる。」水菴、對へて曰く、「其れ受用を好まざるにはあらず、直に以て貧にして之を爲すべきの具なし、若し錢あらしめば亦一兩件の皮毛を做つて、同じく社火に入れんと欲す、既に貧固にして之を如何ともすることなし。」佛智之を笑ふ、其の強ふべからざることを意ふて、遂に休し去る。」(月窟集)

①水庵和尚。青王裕の法嗣、臨安府淨慈水庵師一禪師をいふ。
 ②蒸直。事文類聚別集に曰く、「蒸直は蜀人を謂ふ、放誕にして、軌範に遵はず、故に川蒸直といふ」と。
 ③此の章は、道徳仁義の本來及び住持學者の相待つ所以を明す。

●佛智、水菴に謂つて曰く、「住持の體四つあり、一には道徳、二には言行、三には仁義、四には禮法なり。道徳言行は乃ち教の本なり、仁義禮法は乃ち教の末なり、本なければ立つこと能はず、末なければ成ること能はず。先聖學者の自ら治むること能はざるを見る、故に叢林を建て、以て之を安んず、住持を立て、以て之を統ぶ。然れば則ち叢林の尊きことは住持の爲めにするに非ず、四事の豊美なるは學者の爲めにするに非ず、皆佛祖の道を以ての故なり。是を以て住持たるものは必ず先づ道徳を尊び言行を守る。能く學者たるものは必ず先づ仁義を存し禮法に遵ふ。故に住持は學者に非ざれば立

たす、學者は住持に非ざれば成せず。住持と學者とは猶ほ身と臂頭と足との如し、大小適稱して悖らざれば、乃ち相須ひて行ふなり。故に曰く、「學者は叢林を保つ、叢林は道徳を保つ。」と、住持の人、道徳なきときは則ち叢林將に其の廢することを見んとす。」(實錄)

佛智の曰く、「駿馬の奔逸して敢て足を肆にせざることは、御轡の禦げばなり、小人の強横にして敢て情を縱にせざることは刑法の制すればなり。意識の流浪して敢て攀緣せざることは、覺照の力なり。嗚呼學者の覺照なきは猶ほ駿馬の御轡なく、小人の刑法なきが如し。將た何を以てか貪欲を絶ち妄想を治せんや。」(興二 郷居士二法語)

①郷居士。大惠果の法嗣、郷居士なるべきや。

水庵の一和尚曰く、「易に言く、「君子は患を思ふて預め之を防ぐ」と。是の故に古人生死の大患を思ふて之を防ぐに道を以てす、遂に能く大に經、遠に傳ふ。今の人は道を求むることの迂闊なるよりは、利を求むるの切當なるには若かずと謂へり。是に由つて競つて浮華を習ひ毫末を計較す、目前の事を希ひ苟且の計を懐く、至るところ肯て周歲の規を爲す者なし、況んや生死の慮をや。所以に學者日に鄙しく、叢林日に廢し、綱紀日に墜つ。以至凌夷顛沛して殆んど救ふべからず、嗟乎鑑みざるべけんや。」(雙林實錄)

水庵曰く、「昔し雲居に遊んで高庵の夜參を見るに謂く、「至道は逕庭にして人情に近かず、誠心正意にして矯飾偏邪を事とすること勿らんことを要須す、矯飾なるときは則ち詐佞に近し、偏邪なるときは則ち中正ならず、至道と皆合はず」と。竊かに其の言を思ふに理に近し、乃ち意を刻めて之を踐む。佛智、先師を見るに逮んで始めて浩然として大徹す。方に平生行脚の志に負かざることを得たり。」(與二月堂二書)

水庵曰く、「月堂の住持、至る所に行道を以て己が任と爲す、化主を發せず、登調を事とせず、毎歳の食指常住の所得に随つて之を用ふ。衲子化導に充てられんと志す者あれば、多く之を却く。或人の曰く、「佛、比丘を戒めて持鉢して以て身命を資く、師何ぞ之を拒んで容さざる。」月堂曰く、「我が佛在せし日は則ち可なり、恐らくは今日之を爲さば、必ず利を好む者あつて自露に至らん」と。因つて月堂微を防ぎ、漸を杜ぐ、深切著明なることを思ふ。稱實の言と今猶ほ耳にあり。今日を以て之を觀れば、又豈に止た自露のみならんや。」(法語)

①月堂。雪峰慧禪師の法嗣、杭州淨慈の月堂道昌禪師をいふ。
②尤延之。尤表字は延之、常州無錫の人也。

水庵、侍郎尤延之に謂つて曰く、「昔し大愚、慈明、谷泉、瑯琊、伴を結んで汾陽に參ず、河東苦寒なり、衆人之を憚る。惟だ慈明、志道に在り、曉夕怠らず、夜座睡らんと欲せば錐を引いて自刺す。嘆じて曰く、「古人生死事大の爲めに食せず寝ねす、我れ何人ぞや、而も荒逸を縱にせんや、生きて時に益なく死して後に聞ゆることなからんには、是れ自ら棄つるなり。」と、一旦辭して歸る、汾陽嘆じて曰く、「楚圓今去る、吾が道東す」と。」(西湖記聞)

水庵曰く、「古德住持す己を率ゐて道を行す、未だ嘗て苟簡にして自恣せず。昔汾陽毎に嘆す、「像季澆漓にして學者化し難し。」慈明曰く、「甚だ易し、患ふる所は主法の者善く導くこと能はざるのみ。」汾陽曰く、「古人淳誠なるすら尙ほ三二十年にして方に成辨することを得たり。」慈明の曰く、「此れ聖哲の論に非ず、善く道に造る者は千日の功なり。」と、或人、慈明妄誕なりと謂つて聽かず、會々梵僧あつて夢を汾陽に託して、法施をして後來を啓迪せしむ、三年ならざるに果して六人成道する者あり。汾陽嘗て頌あり、曰く、

①吾道東矣。初梁の項王、田何に従つて馬を交く、時に丁寬、項王の從者となる、馬を讀み、精敏の材、項王に遇きたり、遂に何に事へ、學成り、謝して東に歸らんとす、何、門人に謂つて曰く、「易以東矣」と、又、漢の鄭玄、馬融に事へて、辭し歸る、融曰く、「吾道東矣」と。
②此の事、續傳燈卷一、汾陽照の章に出づ。河東苦寒、汾陽夜參を罷む、時に一比丘ありて、振錫して至る、前に言つて曰く、「會中大師六人あり、奈何が法を説かざる」と、言ひ訖つて去ると。此の後の頌は、又續傳燈に出づ。

「胡僧金錫の光、法の爲めに汾陽に到る。六人大器を成す、故に我れ爲めに敷揚す」と。(西河記聞)

① 投子の清和尚、水庵の像を圖して贊を求む。曰く、「嗣清禪人、孤硬にして敵なし、晨昏一齋、脇席に至らず、深く禪定に入り、出入息を離る、名九重に達し、禪を遺徳に談す。」と。

龍顔大いに悦んで、賜ふに金帛を以つてす。力め辭する者三たび、上乃ち嘉嘆す、眞の道人なり。草木騰煥す、予が陋質を傳ふ、香を炷いて贊を請ふ。是れ所謂青きことは藍より出で、藍よりも青き者なり。(見圖像)

水庵曰く、「佛智禪師言く、東山の演祖嘗て耽龍學に謂つて曰く、「山僧が圓悟に在るは、魚の水あり鳥の獄あるが如し。」故に丞相紫嵩居士贊して曰く、「師資相可ふ一時に希遇す、始終の分誰か能く之を問てん。」紫嵩居士謂つべし言を知れりと。比る諸方の尊宿を見るに、心術を懐いて以て衲子を御し、衲子勢力を挾んで以て尊宿に事ふ。主賓交利し上下欺き侮る。安んぞ法門の興、叢林の盛なることを得んや。」(與梅山洞書)

① 投子清和尚。水庵一の嗣、仰山嗣清禪師也。

② 不至脇席。脅尊者、伏臥尊者に値遇して、その左右に執侍し、未だ睡眠せず、脅席に至らず、遂に脇尊者と號せらる。

③ 九重。離騷に曰く、「君の門は九重を以てす」とあり。

④ 青出於藍。荀子勸學篇に云く、「學は已むべからず、青は藍より出でて藍より青く、水は水より生れて、水より寒し」と。

⑤ 如魚之有水。蜀志に曰く、「先主得諸葛亮、情好日密、關羽張飛不悦、先主解之曰、孤之有孔明、猶魚之有水也」と。

⑥ 紫嵩居士。張溪字は德遠、紫岩居士と號す、紹興中、相を拜す。

水庵曰く、「人を動するに言を以てせば、惟だ深切なることを要せよ、言深切ならざれば感ずる所必ず淺し、人誰か肯て懐かん。昔し白雲師祖、師翁を送つて四面に住せしむ、叮嚀に曰く、「祖道凌遲して危きこと累卵の如し、荒逸を恣にして虚しく光陰を喪し、至徳を敗ることなけれ、當に量度を寛容して物を利し衆を存す。此の事を提持して佛祖の恩を報すべし。」と、當時聞者孰れか感動せざらん、爾來た召されて宸庭に對す、誠に法門の幸と爲す、切に宜しく身を下し道を尊んで、利濟を以て心と爲すべし。己に矜つて自ら伐るべからず、從上の先哲謙柔敬畏にして、身を保ちて徳を全くす、勢位を以て榮と爲さず、遂に能く清一時に振ひ、美萬世に流る。予光景の長からざることを慮るに、復面會することなげん、故に此に切囑す。」(見投子一書)

水庵少かりしより偶儻にして大志あり、氣節を尙んで浮靡を事とせず、細檢に極はす岸谷を騰凌す、身に徇ふに義を以てす、禍害前に交ると雖も殞穢の色あることなし。八院に住持し、四郡を経歴す、至る所競々業々として行道建立を以て心と爲す。淳熙五年西湖の淨慈に退す、偈あり、曰く、

「六年灑掃皇都の寺、瓦礫翻つて釋梵宮と成る。」

⑦ 淳熙。南宋孝宗の年號。

今日功成つて歸去也、杖頭八面清風起る。

士庶遮り留むれども止まらず、小舟にして嘉禾の天寧に至る、未だ幾ばくならずして疾を①示す、衆に別れて終りを告ぐ。(行實)

月堂昌和尚曰く、昔し大智禪師末世の比丘、驕惰ならんことを慮つて、特に規矩を製して以て之を防ぐ、其の器能に随つて各司る伎を設く。主は丈室に居し、衆は通堂に居す、②十局頭首の嚴肅なるを列ぬること官府の如し。上に居る者は其の大綱を提げ、下に在る者は其の衆目を理す、上下をして相承けて、身の臂を使ひ臂の指を使ふが如くならしむ、率の從はずと云ふことなし。是を以て前輩連承翼載して、拳々として奉行することは、先聖の遺風未だ混びざるを以ての故なり。比ろ見る叢林衰替して、學者通才を貴んで守節を賤しんず、浮華を尙んで眞素を薄くす、日に滋く月に侵して漸く澆漓に入る。始めは則ち儉かに一時を安んずれども、玩習既に久しきに及んでは、其の理の當に然るべしと謂へり。之を非義と謂はず之を非理と謂はず、上に在る者は憚々焉として其の下を畏る、下に在る者は睨々焉として其の上を伺ふ。平居は則ち言を甘し體を屈して、以て相媚悦す

①示疾。示寂の示の字、忽過する勿れ、達道の人、世間門に従つて、假りに之を示すのみ。
②十局頭首。百丈禪門規式に、十務をおく、之を寮舎といひ、每寮首領一をおく、各々その局を管す。前堂首座、後堂首座、書記、藏主、知客、都監、監寺、副寺、維那、典座の十頭首あり。

れども、間を得ては則ち狼心詭計、以て相屠猶す。成す者をば賢と爲し、敗る者をば愚となす、復た尊卑の序では非の理を問はず。彼既に之を爲せば此れ則ち之に効ふ、下既に之を言へば上則ち之に従ふ、前に既に之を行はば後に則ち之に襲ふ。烏乎彥聖の師、願力に乗じて百年の功を積むに、其の蔽固則ち能く革むることなけん。」(與二 舜和尚一書)

月堂、淨慈に住すること最も久し、或人の謂く、「和尚の行道、年を経て門下未だ弟子あることを聞かず、③妙湛に幸かざることを得んや。」月堂對へず。他日再び言ふ、月堂曰く、「子聞かずや、昔、人瓜を種ゑて愛すること甚だしき者、盛夏の日、方に中なるに之に灌ぐ、瓜腫を旋さすして淤敗す。何ぞや、其の之を愛すること勤めざるにはあらず、然も之に灌ぐこと時を以て適はず、所以に之を敗す。諸方の老宿衲子を提掣すること、其の道業内に充ち、才器宏遠なることを見ずして止む、其の人と爲りを速かにせんと欲して、其の道徳を審かにするに速んでは則ち淫汚なり、其の言行を察するときは則ち乖戾なり、其の公正を謂ふ時は則ち邪佞なり、之を愛すること其の分に過ぐるに非ざることを得んや、是れ正に由は日中に瓜に灌ぐが如し。予深く識者の笑ふことを恐れて固に爲さざるなり。」(北山記聞)

③舜和尚。雪峰演禪師の法嗣、福州西禪慧禪師。
④妙湛。法雲義本禪師の法嗣、福州雪峰思慧妙湛禪師をいふ。

月堂曰く、「黃龍、積翠に居す、病に因つて三月出でず、眞淨宵夜に懇禱す。以至、頂に燃し臂を煉り、仰いで陰相を祈る。黃龍之を聞いて責めて曰く、「生死は固に吾が分なり、爾參禪理に達せざることは是くの如し。」眞淨從容として對て曰く、「叢林克文なるべきも和尚なくんばあるべからず。」識者謂へらく、眞淨師を敬ひて法を重んず、其の誠此に至る、他日必ず大器と成らん。」と。(北山記聞)

月堂曰く、「黃太史魯直嘗て曰く、「黃龍南禪師、器量深厚にして事物の爲めに遷されず、平生矯飾なし、門弟子身を終るまで其の喜怒を見ざる者あり、走使致力の輩と雖も、一に誠を以て之に待つ、故に能く聲氣を動せずして慈明の道を起す、苟然に非ず」と。(一本見于黃龍石刻)

月堂曰く、「建炎己酉上巳の日、鐘相豐陽に叛す、文殊導禪師難に厄す、賊勢既に盛なり、其の徒逸し去る。師曰く、「禍避くべけんや。」即ち毅然として丈室に處す、竟に

①頂に燃し云々。黃龍の愛道を執るの厚き、眞淨の師に孝にして護法の念の熾なる、實に千古の美事といふべし。燃頂、煉臂は梵網經に、「若燒身臂指、臂燒指、若不燒身臂指、供養諸佛、非出家菩薩事」と。建炎己酉云々。宋の高宗、建炎四年庚戌、鼎州の人鐘相、亂を作し、澧州を陥る、日に金人潭州を去る。群盜大に起る、相嘗るに、左道を以てず、衆惑ひ、忠義を結集して、名づくるに捍賊を以てす、自ら楚主と稱し、天載と改元し、澧州に寇し、之を陥る、三月、孔彥舟、鐘相を後へ、行在に送つて是れを誅せり。②文殊導。太平勲の法嗣、常傳府文殊の心導禪師是れなり。

賊の爲めに害せらる。無垢居士其の法語に跋して曰く、「夫れ生を愛して死を畏るゝことは人の常情なり、惟だ至人は其の本不生を悟る、生と雖も愛する所なし、其の未だ嘗て滅せざるに達す。死と雖も畏るゝ所なし、故に能く死生禍患に臨んで、其の守る所を移さざるは、師其の人か。師の道徳節義を以て、以て叢林を教化し、範を後世に垂るゝに足れり。師の名は正導、眉州丹稜の人なり、佛鑑の嗣なり」と。(一本見于廬山岳府惠大師之記聞、蓋惠乃鐘相之小女也矣)

心聞の 賁和尙曰く、「教外別傳の道、至簡至要なり、初めより它説なし、前輩之を行つて疑はず、之を守つて易へず。天禧の間、雪竇博辯の才を以て美意變弄して新を求め巧を琢く、汾陽に繼いで頌古を爲つて、當世の學者を籠落す、宗風之に由つて一變す。宣政の間に遠んで、圓悟又己が意を出して、之を離つて碧巖集を爲る。彼の時邁古淳全の士、寧道者、死心、靈源、佛鑑の諸老の如き、皆能く其の説を廻すことなし。是に於て新進後生其の語を珍重して、朝に誦し暮に習ふ、之を至學と謂へり。其の非を悟る者あることなし、痛ましきかな、學者の心術壞れぬ。紹興の初め佛日闍に入り、學者の之を牽いて返らず、日に馳せ月に驚いて、浸漬して蔽を成すを見て、即ち其の板を碎いて其の説を闢す。以至迷を祛け溺るゝを扱

①青王議の法嗣、萬年の心聞魯實禪師。②天禧。宋の第三世眞宗の年號。③宣政。宋の徽宗の年號、宣和、政和を略していふなり。④寧道者。五祖演の法嗣、潭州開福の道寧禪師なり。⑤紹興。南宋、光宗の年號。

け、繁を剔り劇を撥ひ、邪を摧き正を顯はす、特然として之を振ふ。禿子稍其の非を知つて復た慕はず、然も佛日、高明遠見にして悲願力に乗じて、末法の蔽を救ふに非ずんば、則ち叢林大いに畏るべき者あらん。」(與三張子語書)

心聞曰く、「禿子禪に因つて病を致す者多し、病耳目に在る者あり、眉を瞠げ目を努り、耳を側て頭を點するを以て禪と爲す。病、舌に在る者あり、顛言倒語、胡喝亂喝を以て禪と爲す。病、手足に在る者あり、進前退後、東を指し西を劃するを以て禪と爲す。病、心腹に在る者あり、玄を窮め妙を究め、情を超え見を離るゝを以て禪と爲す。實に據つて論せば、是れ病に非ずと云ふことなし。惟だ本色の宗師は機微を明察して、目撃して其の會と不會とを知り、門に入つて其の到と不到とを辨す。然して後、一錫一筭を用ひて其の廉纖を脱し、其の搭滯を攻め、其の眞假を驗し、其の虛實を定む。而して一方便を守つて變通に味からず、終に安樂無事の境を踏ましめて、而して後に已む。」(語錄)

心聞曰く、「古に云く、『千人の秀を英と曰ひ、萬人の英を傑と曰ふ。』

この章は禿子の病を擧げ、更に眞の作家の町摩深切なるを示す。
此の章は、古人の淡枯澹泊を擧げ、并に學道の人、初めより進むに吝ならざるべきを明す。
千人秀、人に倍するを英といひ、十人に倍するを傑といひ、選の倍を傑と稱し、千人に秀れたるを英といふ。英に倍するを傑と唱ひ、萬人に倍れたるを傑といふ、傑に倍するを英と稱す。
風穴白丁、後唐の長興二年、汝州に至り、山に依るの草庵を見て田夫に問へば、古の風穴寺なりと。「我れ茲に居らん」と。是より茲に留錫し、村落に乞食し、單丁なるもの七年、檀信、爲に新に是を叢林となす。風穴延詔禪師是なり。劉禹錫、陋室の銘に曰く、「談笑有鴻儒、往來無白丁」と。
藥山の牛欄、藥山和尚、遊山して澧陽に到る、人家を見れば、一座山の好きものあり、便ち他を化し、道場を建てんことを要す。百姓從はず、便ち他の牛欄に入りて坐禪す、人家、之を備れて已むを得ず牛を率ゐて歸る。屋裡より火を放つて牛欄を燃く。牛欄の基の上に又坐禪す、太守是を

禿子智行あつて叢林に閑ゆる者、豈に英傑の士に近きに非ざらんや、但能く勤めて參究して、虚を去け實を取りて、各其の用を得ば、則ち院に大小となく、衆に多寡となく、皆其の化に従はん。昔し風穴の白丁、藥山の牛欄、常公の大梅、慈明の荆楚、此の時に當つて、悠々たるの徒、若し位貌を以て相求めば、必ず見て之を詒かん。一旦師席に據り華座に登つて、萬指圍遶して、佛祖叔世の光明を輝かす。叢林孰れか風を望んで靡かざらん、矧んや前輩皆環瑋の材、英傑の氣を負ふて、尙ほ能く區々として未遇の際に於て、耻を含み垢を忍んで、世に混じ波を同じうすることは是くの如し。況んや茲に降らん者をや。烏乎古も猶ほ今のごとし、此れも猶ほ彼のごとし。若し必ず藥山風穴を待つて之を師とせば、千載の一遇なり、若し必ず大梅慈明を待つて之を友とせば、百世の一出なり。蓋し事微より著に至ることあり、功小を積んで大を成すことあり、未だ學ばずして成ることあり、修せずして先づ達する者を見ず。若し此の理を悟らば、師求むべく友擇ぶべし、道學ぶべし徳修すべし。則ち天下の事何くに施すとしてか不可ならん。古云く、「人を知ること誠に難し、聖人も病める所なり、況

んや其の他をや」と。(與三竹庵書)

● 拙庵佛照光和尚、初め雪堂に薦福に參す。相者あつて一たび見て之を器とす、雪堂に謂つて曰く、「衆中の光上座、頭顱方正にして廣類豐願なり、七處平滿なり、他日必ず帝王の師と爲らん。」孝宗皇帝淳熙の初め、召對して旨に稱ふ。内觀堂に留まること七宿、待遇優異なり、度前來に越ゆ。佛照の名を賜ふ、天下に聞ゆ。(記聞)

● 拙庵、虞尹文丞相に謂つて曰く、「大道洞然として本愚智なし、譬へば伊呂耕漁より起つて帝王の師となるが如し、詎んぞ智愚階級を以て能く擬すべけんや。然りと雖も大丈夫に非ずんば、其れ孰れか能く爲れに與せん。」(廣錄)

● 拙庵曰く、「野庵常に言く、黃龍南禪師寛厚忠信にして、恭にして慈愛あり、量度凝遠にして博學洽聞なり。嘗て雲峰の悦と同じく湖湘に遊ぶ、

聞き、山を買ひ、一所の庵を建て、雇して牛欄といひ、後に叢林となる。
⑦ 常公の大梅。大梅山の法常禪師、初め大寂に參す、問ふ、如何なるが是れ佛。大寂曰く、「即心是佛。」師即ち大悟し、唐の貞元中、大梅山鄞縣の南、七十里、梅子眞が舊隱に居る。
⑧ 慈明の荆楚。慈明、初鼎に見えず、荆楚の間を流寓す、衆皆之に易る。
⑨ 拙庵。大憲果の法嗣、慶元府曹王の佛照德光禪師ならん。
⑩ 法界次第に、三十二相、十七、兩足下に兩手兩肩頂中の七處平滿云々。
⑪ 孝宗皇帝。孝宗諱は昚、字は元永、太祖七世の孫なり。
⑫ 虞尹文丞相。虞允文、字は彬甫、隆州仁壽の人なり、隆興八年二月、允文は特に進められて、左丞相を授けらる。

雨を樹下に避く。悦笑居して相對す、南獨り危坐す、悦目を瞋しめ、之を視て曰く、「佛祖の妙道は、是れ三家村の古廟裡の土地のごとくに死模様を作さず」と。南稽首して之を謝す、危坐愈甚だし。故に黃太史魯直之を稱して曰く、「南公動靜恭敬を忘れず、眞に叢林の主なり」と。(幻庵集)

● 拙庵曰く、「身を率ゐて衆に臨まば、智を以て妄を遣らんと要す、情を除くには須らく先覺すべし。覺に背き塵に合ふ時は、則ち心蒙蔽す。智恵分たざるときは、則ち事紊亂せん。」(重監寺書)

● 拙庵曰く、「佛鑑太平に住す、高庵維那に充てらる。高庵齒少うして氣豪なり、諸方を下視するに、其の意に可なるものあること少し。一日齋時に鍵を鳴す、行者の別器に食を佛鑑の前に置くを見て、高庵堂を出で、聲を厲まして曰く、「五百僧の善知識這般の去就を作す、何を以てか後學に模範たらん。」佛鑑聞見せざるが如し。堂を下るに速んで之を詢へば、乃ち水盃菜なり。蓋し佛鑑素より脾疾あり、油を食はず、故に高庵愧づることあり、方丈に詣して退を告ぐ。佛鑑曰く、「維那の言ふ所甚だ當れり、慧勳病に縁つて乃ち耳れり。嘗て聞く、聖人の言く、理を以て諸礙を通すと。食する所既に

① 伊は伊尹の略、伊尹は庶士なり。
② 呂は呂尙の略、貧家漁家の人なり。
③ 此の章は、禪衲は恭敬を忘れざるべきを明す。
④ 此の章は學道の士、病の依つて來る處を示す。
⑤ 重監寺。太平勳の法嗣、靈巖畫禪師をいふ。
⑥ 本章の大意は、古人の寛大以て衆に接し、眞實を以て人に接するを示す。

衆に優らざるを以て遂に疑はず、維那志氣明遠なり、他日當に宗門の柱石たるべし、幸に此れを以て芥蒂することなかれ。」佛鑑智海に遷るに逮んで、高庵龍門に過ぐる、後に佛眼の嗣たり。」

抽庵曰く、「大凡そ官員と道を論じて須らく是れ剝去の知解を酬酢せば、他をして窠窟裡に坐せしむること勿るべし、直に單に向上の一著子を明すことを要す。妙喜先師嘗て言く、「士大夫相見せんに問ふことあらば即ち對へよ、問ふことなくば即ち不可なり」と。又須らく是れ箇中の人にして、始めて此の語時に補あることを得べし。住持の體を傷らす、切に宜しく之を思ふべし。」(與ニ 興化普庵一書)

抽庵曰く、「地の美なるは善く物を養ふ、主の仁あるは善く士を養ふ。今住持と稱する者、多く衆人を以て心と爲す、己が欲する所を急にす、善言を聞くことを惡む、過惡を蔽ふことを好む、恣に邪行を行ひ、徒らに一時の意を快しとす。返つて小人に其の好惡に就いて之を取らる、則ち住持の道安んぞ危からざることを得んや。」(與ニ 洪老一書)

抽庵、野老に謂つて曰く、「丞相崇崙居士の言く、「妙喜先師、平生道徳節義勇敢を以て先となす、親しむべし、疎んずべからず、近づくべし、

①興化普庵。黃龍思禪師の法嗣、遠州慈化普庵印肅禪師をいふ。
②洪老。大馮果の法嗣、鹽州大洪老禪師禪師なり。
③此の章は、妙喜を讚する次で、智見銳利に過ぎたる傷缺の怖れあるをいふ。
④可親不可疎。禮記儒行にあり、「儒に親しむべくして動かすべからざるなり、近づくべくして迫るべからざるなり、殺すべくして辱しむべからざるなり。その居るところ、淫せずして其飲食、海にせずす」と。
⑤干將鑊。吳越春秋卷の二に曰く、「干將に請じて、名劍二枚を作らしむ、一つは干將といひ、一つは鑊といふ、鑊は干將の妻なり、是に於て干將が妻髪を斬り、爪を剪つて爐中に投じ、童女童男三百人をして、藥を鼓し、炭を裝し、金鐵刀鑊、遂に以て劍を成す、名づけて、干將といひ、鑊といふ」と。

迫るべからず、殺すべし辱しむべからず、居所淫せず飲食源かにせず、生死禍患に臨んで、之を視ること無きが如し、正に所謂 干將鑊、與に鋒を爭ひ難し、但傷缺を虞るゝのみ。」後に紫崙の言の如し。」(幻庵記聞)

抽庵曰く、「野庵の住持は人情の始終に通じ、叢林の大體を明らむ。嘗て予に謂つて言く、「一方の主者たらば、須らく志行ある衲子を選んで、相與に毗贊すべし、猶ほ髮の梳あり面の鑑あるが如し。則ち利病好醜得て隠すべからず。慈明の楊岐を得、馬祖の百丈を得るが如きんば、水を以て水に投ず、之を逆らふことなし」と。」(幻庵集)

抽庵曰く、「末に學び膚に受けて、徒らに耳を貴び目を賤しめば、終に能く其の奧妙を究むることなからん。故に曰く、「山は高きを厭はず、中に重岳積翠あり、海は深きことを厭はず、内に 四溟 九淵あり、大道を究めんと欲せば、要は其の高深を窮むるにあり、然して後に以て幽微を照燭して、應變窮まらざるべし。」(與ニ 觀老一書)

①四溟。東西南北の四海を以つて、四溟となす。字典に、溟は海也、水は黒きが故なりと。
②九淵。旋旋の淵を淵と爲す、止水の淵を淵となす、流水の淵を淵となし、流水の淵を淵となし、沈水の淵を淵となし、雍水の

① 拙庵、尤侍郎に謂つて曰く、「聖賢の意、含緩にして理明かなり、優遊にして事顯はる、用ふる所の事、期するに速成を以てせず、許すに持久を以てせず、許すに必ず進むことを以てせず、許すに庶幾を以てす。是を用つて聖賢の意を推す、故に能く萬世に亘つて之を持して、過失なきことは乃ち耳り。」(幻庵集)

侍郎尤公曰く、「祖師以前住持の事なし、其の後應世行道することは已むことを得ざるにあればなり。然して居は則ち蓬華、風雨を蔽ふを取る、食は則ち魚糲、飢饉に充つるを取る。辛苦憔悴其の憂に堪へざることあり、而して王公大人、至つて見んと願へども得べからざる者あり。故に其れ建立するところ皆磊々落落、天を驚し地を動す、後世は然らず、高堂廣廈、美衣、豊食、顧指如意なり。是に於て波旬の徒、始めて洋々然として其の心を動す、權門に趨起し尾を搖して憐みを乞ふ。甚だしき者は巧に取り豪に奮ふ、正晝に金を擲むが如し、復た世間に因果の事あることを知ら

潘を瀾となし、沂水の潘を瀾となし、肥水の潘を瀾となし、是を合して九瀾といふ。

② 觀老、佛照光禪師の法嗣、東禪性空智觀禪師をいふ。

③ 此の章は、學道は不退を以て本分とし、速成急進に害あることを示す。

④ 頤指如意、賈誼傳如淳曰く、「但動頤指應、則所欲皆如意」と。

⑤ 波旬。正しくは波早夜なりと、茲に惡魔と譯す、釋迦出世の時に現はれし魔王の名なり。

⑥ 滄公上池之水。史記、扁鵲倉公の傳に曰く、「倉の客長、桑君過れり、扁鵲獨り之を奇とし、請んで是を遇す、桑君も亦扁鵲の非凡を知る。出入十餘年、私かに扁鵲に、家傳の禁方を授け、懷中の藥を與へ、是を飲ましむるに、上池の水を以てす。三十日にして、

す。妙喜の此の書、豈に特に博山の爲めに設くるのみならんや。其の諸方自來の習氣を拈盡して、毫髮を遺さず、滄公上池の水を飲んで、肝腑を洞見するが如し。若し能く信受奉行せば、安んぞ別に佛法を求むることを用ひん。」(見靈隱石刻)

⑦ 侍郎尤公、拙庵に謂つて曰く、「昔妙喜、臨濟の道を凋零の秋に中興す、而して性謙虚を尙んで、未だ嘗て見理に馳騁せず。平生權勢に趨らず、利養を苟めず、嘗て曰く、「萬事伏豫して爲すべからず、奢態にして持すべからず。」蓋し時に利あつて物に便する者あり、其れ過つて其の功なき者あり、若し之を奢佚に縱にせば則ち濟らず、不肖斯言を佩服して遂に身を終るまでの戒と爲す。老師昨者、主上に遭遇す、留つて觀堂に宿す、實に佛法の幸たり、切に冀はくは悲願に倦まず、善に進むの途をして開明し、衆に任ずるの道益々大ならしむ。庶幾はくは後生晚輩近習を謀らず、各遠圖を懷いて豈に叢林の利濟たらすや。」(然侍者記聞)

⑧ 密庵傑和尚の曰く、「叢林の興衰は禮法にあり、學者の美惡は俗習に在り、古の人巢に居し穴に處

扁鵲その處方に通するや、忽然として桑君消去る、是れより、扁鵲は名醫たり。」

⑨ 此の章は古徳必ず終身の訓練を守ることを示し、併せて人の爲めに言を吝かならざるを明す。

⑩ 秋。諸葛孔明の出師の表に、「此誠危急存亡之秋也」と。歳は秋を以つて功果るとなす、故に時の要に喩ふとなり。とさと訓す。

⑪ 然侍者。大惠衆の法嗣、可庵然。

⑫ 密庵傑。應庵華の法嗣、四明天童の密庵成機禪師なり。

して潤飲木食するをして之を今時に行せしむるときは則ち不可なり、今の人豊衣文采にして梁を飯ひ肥を嚙むことをして古の時に行せしむるも亦不可なり。安くんぞ它あらんや、習と不習との故なり。夫れ人朝夕に見る者を常となす、必ず謂へらく、天下の事正に此くの如くなるべしと。一旦之を驅つて彼れに就き此れを去らしめば、獨り疑を生じて信せざるのみに非ず、將に恐らくは亦從はざらん。是れを用つて之を觀れば、人情習ふ所を安んじ、其の未だ見ざるに駭く。是れ其の常情なり、又何ぞ怪しむに足らん。(與二 施司諫一書)

密庵、^①悟首座に謂つて曰く、「叢林の中惟だ浙人輕儒にして立つこと少し、子が才器宏大にして量度淵容なり、志端確を尙ぶ、加以見地穩密なり、他日未だ言ひ易からず、但だ自ら韜晦して圭角を露はすことなくして、方を毀つて瓦合し、持するに中道を以てせよ。勢利の爲に少しも枉ぐることなかれ、即ち是れ塵勞を出でずして佛事を作すなり。」(與三 笑庵一書)

密庵曰く、「應庵先師嘗て言く、「賢不肖相返く擇ばざることを得ず、賢者は道德仁義を持して以て身を立つ、不肖者は勢利詐佞を専らにして以て

① 施司諫。施師默ならん、宋に司諫二人あり、同名にして、その孰れなるか不明なり。司諫は唐の武后の時に置れたる重役にして、供奉、諫諍を司る。宋の端拱元年、左右司諫の名初めて定まる、唐代は左右補闕と稱せり。
② 悟首座。密庵傑の法嗣、杭州靈隱笑庵了悟禪師なり。
③ 此の章は賢者を用ふると不肖

事を用ふ。賢者は志を得ては必ず其の所學を行ふ、不肖者は位に處して多く私心を擅にして、賢を妬み能を嫉む。慾を嗜み財を苟む、至らずといふところなし。是の故に賢を得るときは則ち叢林興り、不肖を用ふるときは則ち廢る。一も斯に在れば必ず安靜なること能はず」と。(見予 岳和尚一書)

密庵曰く、「住持に三莫あり、事繁き懼るゝこと莫し、無事尋ぬることなし、是非辨すること莫し、住持の人、此の三事に達するときは、則ち外物に惑はさるゝことを被らず。」(慧 侍者記聞)

密庵曰く、「衲子履行傾邪にして素より不善の迹ある者は、叢林互に此れを知る、疾むに足らず、惟だ衆人の之を賢と謂ふて内實に不肖なる者、誠に疾むべし。」(與二 普慧一書)

密庵、水庵に謂つて曰く、「人毀辱あらば當に順つて之を受くべし、詎んぞ軽く聲言を聽いて妄りに管見を陳ぶべき、大率便佞類あり、邪巧方多し。險詖を懐く者は好んで私心を逞しうす、猜忌を起す者は偏に公議を廢す。蓋し此の輩趨尙狹促して所見暗短なり、固に自異なるを以て群ならずと爲し、

者を用ふるとは、叢林の盛衰に關すること大なるを明す。
② 岳和尚。密庵傑の法嗣、杭州靈隱松源崇岳禪師なり。
③ 慧侍者。蕭石田の法嗣、愚極慧ならん。
④ 此の章は、内、不肖の心ありて、外、賢なるが如きを思むを明す。
⑤ 普慧。徑山果の法嗣、福州雪峰の崇聖普慧遺闡禪師ならん。
⑥ 此の章は、守一なるものは、毀譽の管する處に非ざるを明す。

議を沮ふを以て乘に出でずと爲す。然るに既に我が用ふる所は終に是にして、毀謗は固に自ら彼れに在りと知ることは、久しうして自ら明めん、別白することを須ひす、亦必ず我が是を主として人を計觸せざるときは、則ち庶幾はくは以て林下の人たるべし。(與ニ永庵一書)

自得の輝和尚曰く、^①大凡衲子誠にして正しきに向はゞ、愚なりと雖も亦用ふべし、佞にして邪を懐くは智なりと雖も終に害をなさん。大率林下の人心を操ること正しからずんば、才能ありと雖も終に立つべからず」と。(見ニ于簡堂一書)

自得曰く、^②大智禪師特に清規を徇めて、末法の比丘不正の蔽を扶救す、是れに由つて前賢遵承して、拳々奉行す、教化あり、條理あり、始終あり。紹興の末、叢林尙ほ老成の者、能く典刑を守つて、敢て斯須も左右を去らざるあり。近年已來其の宗緒を失して、綱綱ならず、紀紀ならず、綱羅ありと雖も安んぞ得て正さん。諸故に曰く、「一網を擧ぐるときは則ち衆目張る、一機を弛すときは則ち萬事墜る。」殆んど綱紀振はず叢林興せず、惟り古人本を體して以て末を正す、但法度の嚴ならざることを憂ひよ、學者の所を失ふことを憂ひす、其れ正す所は公に在り、今諸方の主者私を以て公

①自得輝和尚。天童覺禪師の法嗣、杭州淨慧の自得慧禪師をいふ。
②この垂示は至誠至正の重んずべく、佞邪智の卑しむべきを示す。
③簡堂。護國元禪師の法嗣、台州國清の簡堂行機禪師をいふ。

に混じ、末を以て本を正す、上なる者は利を苟めて道を以てせず、下なる者は利を賊して義を以てせず、上下謬亂、賓主混淆、安んぞ衲子正に向ひ叢林の興ることを得んや。(與ニ允侍郎一書)

自得曰く、^④良玉未だ割たざれば瓦石と異なることなし、名驥未だ馳せざれば駑駘相雜はる。其の割つて之を瑩き、馳せて之を試みるに速んで、則ち玉石驚驥分る。夫れ衲子の賢徳あつて未だ用ひす、稠人の中に混す、竟に何ぞ辨別せん。要は高明の士、公論を以て之を擧するにあり、任するに職事を以てし、驗するに才能を以てし、責むるに成務を以てするときは、則ち庸流と迥然として同じからず。(與ニ或庵一書)

或庵體和尚、初め此庵の元布袋に天台の護國に參す、因に^⑤上堂、龐馬選佛の頌を擧す。此れは是れ選佛場と云ふの句に至つて此庵之を喝す、或庵大悟投機の頌あり、曰く、
「商量極まるところ題目を見る、途路窮まる邊試場に入る、

④此の章は、俊秀の衲子は、之を用ふる人によることを明す。
⑤良玉未割。北史蘇綽傳に曰く、「良玉未割與三瓦石相類、名驥未馳與駑駘相雜、及其割而瑩之、馳而試之、玉石驚驥、然後始分」と。
⑥或庵。護國元の法嗣、鎮江府焦山或庵師體禪師をいふ。
⑦此の章は具眼の知識は、能く所化の機を見るを示し、併せて一言半句、論は其人を知ることを明す。
⑧龐馬選佛頌。龐居士、馬祖、石頭の兩處に參じ、後に馬祖に參じ、又問ふ、「萬法と偈ならず、是れ何人ぞ。」祖曰く、「一口に四江の水を吸盡し來れ、汝が爲に道はん」と。居士豁然大悟す、頌に曰く、「十方同聚會。箇々學無爲。此是選佛場。」

毫端を拈起して風雨快かなり、這回探花郎と作さす。

此れより迹を天台に匿す。承相錢公象先、其の人となり慕つて、乃ち天封の招提を以て、勉めて應世せしむ。或庵之を聞いて曰く、「我れ羊頭を懸けて狗肉を賣ることを解せず。」即宵に遁れ去る。

乾道の始め晴堂國清に住す、因に或庵の圓通の像を讀するを見る、曰く、「本分に依らず、衆生を惱亂す。之を瞻て之を仰ぐ、眼あり旨の如し。長安の風月、今昔を貫く。那箇の男兒か壁に摸して行く。」晴堂驚喜して曰く、「謂はざりき、此庵に此の兒ありとは」と。即ち遍く之を索めて遂に江心に得たり、固く稠人の中に於て請じて第一座と爲す。(天台野錄)

或庵、乾道の始め翻然として晴堂を虎丘に訪ふ。姑蘇の道俗其の高風を聞いて、即ち郡に詣して請じて城中の覺報に住せしむ。或庵之を聞いて曰く、「此庵先師我に囑す、他日老壽に逢はゞ止まん、今符契を合すが如し。」遂に忻然として命に應ず。蓋し覺報は舊老壽庵と名付けければなり。(虎丘記聞)

或庵入庵の後、施主小參を請す、曰く、「道は常然として渝らず、事は有蔽にして必ず變ず。昔江西南嶽の諸祖古に若ひ稽へて、訓を爲して其の當否を考ふ、持するに中道を以てす、務めて人心に合す、悟を以て則となす、所以に素風凌然として今に逮んで未だ泯せず。若し衲僧門下に約せば、言前に薦得すれども我が宗風を屈す。句下に分明なるも佛祖を沈埋す。然も是くの如しと雖も、行きて到る水の窮まる處、坐して看る雲の起る時。是れに由つて緇素未だ聞かざる所を喜ぶ、歸する者市の如し。(語錄異此)

或庵既に住持を領す、士庶翕然として來歸す、衲子傳へて虎丘に至る。晴堂曰く、「這箇山蠻の杜拗子、拍盲禪を放にして、爾が那一隊野狐精を治す。」或庵之を聞いて偈を以て會へて曰く、

「山蠻の杜拗能く憎むことを得たり、衆を領し徒を匡す曾てせざるに似たり。越格倒に苜蓿柄を拈す、拍盲の禪、野狐僧を治す。」
晴堂笑ふのみ。(記聞)

心空及第歸し。
探花郎。唐の進士、杏園の初會、是れを探花宴といひ、少俊にして探花使となり、名聞を遍遊す。

錢公。錢象先、字は實元、蘇州の人也。

羊頭云々。白雲禪、一日室中に擊す、雲門示衆す、如許の大栗子、幾箇を喫得したるか。衆の下語皆契はず、五祖演に問ふ、演曰く、「懸羊頭、賣狗肉」と。

此の章の大意は、古人有道の士を重んずることを示す。

乾道。南宋、孝宗の年號。

晴堂。圓悟勤の法嗣、靈隱精堂遠禪師。

行到水窮處。王維、終南別業の詩に、「中歲頗好道。晚家南山陲。興來每獨往。勝事空自知。行到水窮處。坐看雲起時。偶然值林叟。談笑無還期」と。

本章の大意は、古人の用處微妙にして褒貶あるを示す。

或庵、^①侍郎曾公遠に謂つて曰く、「學道の要は衡石の物を定むるが如し、其の平を持するのみ、偏重ならば可ならんか、前を推し後に近づく、其の偏一なり、此を明めば道を學ぶべし。」（見于曾公書）

或庵曰く、「道德は乃ち叢林の本、衲子は乃ち道德の本、住持の人衲子を棄厭するは是れ道德を忘る、なり。道德既に忘せば將に何を以てか教化を修し、叢林を整へ、來學を誘かん。古人本を體として以て末を正す、道德の行はれざることを憂ふ。叢林の所を失ふことを憂へず、故に曰く、「叢林は衲子を保つ、衲子は道德を保つ。」住持道德無きときは、則ち叢林廢す。」（見于簡堂書）

或庵曰く、「夫れ善知識と爲らば、要賢を知るに在り、自ら賢なるに在らず。故に賢を傷る者は愚なり、賢を蔽ふ者は暗なり、賢を嫉む者は短なり、一身の榮を得んより、如かじ一世の名を得んには、一世の名を得んより、如かじ一賢衲子を得て、後學をして師あり、叢林に主あらしめんには。」（與二 圓極書）

或庵、焦山に遷ること三載、寔に淳熙六年八月四日なり。先づ微恙を示す、即ち手書并に硯一隻、郡

①侍郎曾公遠。曾豐、曾開、曾幾等の兄弟は皆榮貴なり、豐は尚書、開、幾は侍郎、豐の二子追造、幾が子達、左司となり、次子達侍郎たり。
②此の章は住持の道德を重んずべきを説き、叢林と衲子を論ず。
③圓極。雲居如禪師の法嗣、太平州隱靜圓極の産興禪師なり。

主侍郎曾公遠に別つ。中夜に至つて化し去る。公、偶を以て之を悼しんで曰く、

「^①翻々たる隻履西風を逐ふ、一物渾べて布袋の中に無し、

留下す 陶泓底を將てか用ひん、老夫筆の虚空を判する無し。」（行狀）

瞎堂遠和尚曰く、「學道の士先づ其の心を正しうせんことを要す。然して後以て己を正し物を正しうすべし。其の心既に正しき時は、則ち萬物定まれり。未だ聞かす、心治まつて身の亂る、者を。佛祖の教は内より外に及び、近より遠に至る。聲色の外を感はずは四肢の疾なり、妄情内に發するは心腹の病なり、未だ心正しくして物を治むること能はず、身正しくして人を化すること能はざるを見ず。蓋し一心は根本たり、萬物は枝葉たり、根本壯實なれば枝葉榮茂せり、根本枯悴すれば枝葉天折す。善く道を學ぶる者は、先づ内を治め以て外に敵す、外を貪つて以て内を害せず。故に物を導くこと、要心を清むるにあり。人を正さば固に先づ己を正せ、心正しければ己立つて而して萬物化に従はざる者は、未だ有ることを知らず。」

（與二 顏侍郎書）

①翻々隻履。傳燈三の達磨傳に曰く、「端居して逝く、即ち後魏の孝明帝、太和十九年丙辰歲十月五日なり。後三歲、魏の宋雲、使を西域に奉じ、師に葱嶺に遇ふに、手に隻履を携へて、翻々として獨り逝けり」と。
②陶泓。毛穎、經人陳玄、弘農の陶泓と相友としてよしと。
③顏侍郎。宋朝、顏岐復、字は夷仲、嘗て呂榮公に従つて學ぶ、呂居仁は濟陰の主簿となる、時に夷仲、適々曹南に在り、嘗て居仁に贈るに、詩あり、云く、「念昔從學日同一と。夫子堂に升る。夫子とは榮陽公ならん、建炎中、累官して、門下侍郎となる。」

① 晴堂、或庵に謂つて曰く、「人の才器は自ら大小あり、誠に教ふべからず、故に褚少き者は、大を懐くべからず、綆短き者は深きを汲む可からず、^① 鷓鴣夜蚤を撮り、秋毫を察す、晝は出で、目を瞋せども丘山をも見ず、蓋し分定まればなり。昔、^② 靜南堂、東山の道を傳ふ、幽奥を穎悟して深切著明なり、應世住持に逮んで至る所振はず。圓悟先師蜀に歸る、範和尚と同じく之を大隋に訪ふ、靜率器にして凡百弛廢なるを見て先師問はず、回つて中畧に至る。範曰く、「靜と公と同參の道友たり、一言も之を啓迪することなきは何ぞや。」先師の曰く、「應世衆に臨み、要は法令を先と爲るに在り、法令の行はるゝこと其の智能に在り、能と不能とは其の素分を以てす、豈に教ふべけんや。」範之を領す。」(虛丘記聞)

③ 簡堂の機和尚番陽の筦山に住すること僅かに二十載、藜を羹にして黍を飯ひ、意を榮達に絶つが如し。嘗て山を下る、路傍に哀泣の聲を聞いて、簡堂惻然として之を詢ふに逮んで、一家寒疾して僅かに兩口を亡す。貧にして斂具なし、特に市に就いて棺を貸つて之を葬る。郷人感嘆して已

① 此の章は、假令、得道すとも、素分に依つて化の擧否あるを示し、併せて衲子の綿裏に修行すべきを誨ふ。
② 鷓鴣云々、この語は莊子に出づ。鷓鴣は一の鳥なり、夜は晴眼なれど、日は晴性なりといふ。
③ 靜南堂、五祖演の法嗣、彭州大隋の南堂の元靜禪師。

④ 此の章は古人の接物利生、苟くも爲さず、出處進退道に順ふを示す。
⑤ 侍郎李公、字は椿年、浮梁の人、政和の間進士にあげられ、司農丞度支部中を歴たり、後に婺州に知たり、著書に、昌傳十卷、文集十卷あり。

⑥ 侍郎李公椿年、士大夫に謂つて曰く、「吾が郷の機老有道の衲子なり、慈惠を以て物に及ぼす、筦山安んぞ能く久しく處らんや。」會、樞密汪明遠、諸路を宣撫して九江に達す、郡主林公叔達、圓通の法席を虚しうして之を迎ふ。簡堂命を聞いて乃ち曰く、「吾が道行はるゝ」と、即ち忻然として杖を曳いて來り、登座說法す。曰く、

「圓通生藥鋪を開かず、單々に只だ死猫頭を賣る、知らず那箇か思算なくして、喫著して通身汗を流さしむ。」
⑦ (彌庵集)

⑧ 簡堂曰く、「古者身を修し心を治むるときは、則ち人と其の道を共にす、事を興し業を立つるときは、則ち人と其の功を共にす、道成り功著るゝときは、則ち人と其の名を共にす、所以に道明かならずと云ふことなく、功成らざることなく、名榮えざることなし。今の人は則ち然らず、己が道を専らにして、惟だ人の己に勝らんことを恐る。又善に従ひ義に移むること能はずして、以て自ら廣しとす。己が功を専らにして他人の之あることを欲せず、又賢と能とを任すること能はず、以て自ら大なりとす。是の故に道蔽を免れず、功損を免れず、名辱を免れず。此の三者は乃ち古今の學者の大分なり。」

⑥ 樞密、樞密院は、天子の機務及び天下邊境軍馬の政令を司る。
⑦ 汪明遠、汪徽、字は明遠、婺源の人、進士に登る、監察御史に除せらる。
⑧ 彌庵集、徑山果の法嗣、福州西禪の彌庵禪師。
⑨ 此の章の大意は、古徳の行道の用心を示し、併せて今時の弊を諷しむ。

① 簡堂曰く、學道は猶ほ樹を種うるが如し、方に榮えて而して之を伐つて、以て樵薪に供すべし。將た盛にして之を伐つて、以て椽桶に作るべし。稍壯にして之を伐つて、以て椽枋に充つべし。老大にして之を伐つて、以て椽棟に爲るべし。功を取ることを遠くして其の利大なるに非ざることを得んや。所以に古の人、惟だ其の道固に大にして狭からず、其の志遠奥にして近からず、其の言崇高にして卑しからず。時の艱難に適ひ、飢寒に窮して殆んど丘壑に亡すと雖も、其の遺風餘烈を以て、百千年に亘つて、後人猶ほ以て法と爲して之を傳ふ。郷に道を狭くして容れんことを苟め、志を邁うして合ふことを求め、言を卑しうして勢に事へしむ。其の利止た一身を榮ゆ、安んぞ餘澤薄く後世に及ぶことあらんや。(與三李侍郎一書)

② 簡堂、淳熙五年四月、天台の景星岩より再び隱靜に赴く、給事 吳公 希、休々堂に 佚老す。淵明が詩十三篇を和して行を送る。其の一に曰く、
「我れ林下に歸りてより、已に世と相疎なり。頼に善知識あり、時に能く吾が慮を過ぐ。我に伴なつて道話を説く、我が佛書を讀むを愛す。既に岩上より去ることを爲す、我も亦爲めに事に膏す。便ち我が鉢を展べて、師に隨つて同じく蔬を飯せんと欲す。此の塵俗の累を脱して、長く富石と

① 此の章は、古徳の遠大なる志を示し、今人の則るべき所以を明す。
② 此の章は、古人在俗の人を接化し、其の稱揚を受くることを示す。
③ 吳公希。吳希字は明可、權利部侍郎に遷せられ、給事に遷

居す。此の崑固に高し、山海の圖に卓出す。若し吾が師の高きに比せば、此の岩還つて如かず。」

二、「我れ山窟の裡に生ず、四面是れ屏顔。崑あり景星と號す、到らんと欲す知んぬ幾年ぞ。今始めて奇絶なるを信す、一覽衆山を小しとす。更に師を得て主と爲す、二妙未だ言ひ易からず。」

三、「我れ湖山の上に居す、觸目是れ林丘。若し茲の山の秀に比せば、培塿固に儔し難し。雲山千里に見る、石泉四時流る。我れ今纔に一たび到る、已に五湖の遊に勝れり。」

四、「我れ年七十五、木末殘陽に掛く。縱使ひ身未だ逝かすとも、亦能く豈に久長ならんや。尙ほ冀はくは林間に住して、師と末老を共にせん。孤雲俄かに暫く出づ、遠近駭いて蒼黃。」

五、「山を愛して端に素あり、俗に拘はる亦憐れむべし。昨に當塗郡に守たり、隱靜山を識らす。羨む師の來つて又去ることを、愧づらくは我復た何ぞ言はん。尙ほ期す久しく住することなくして、歸つて我が殘年を送らんことを。」

六、「師の心は死灰の如く、形も亦橋木に似たり。胡爲ぞ衲子歸つて、響の空谷に答ふるが若し。我

る、曉に退閑して、自ら湖山居士と號す。

④ 佚老。莊子大宗師に、「我を佚するに老を以て我を息むるに死を以てす。老いて筋力衰窮する、自然に安佚なり。」
⑤ 山海圖。南淵明、山海經を讀むの詩なり。陶靖節集の四に出づ。

⑥ 二妙。衛瓊、字は伯玉、河東安邑の人、瓊學問深博にして、文藝に明かなり、尙書郎索靖と俱に草書を善くす、時に一台二妙と號す。
⑦ 小丘阜なれば比較にならず。

が塵垢の身を顧みるに、正に醍醐の浴せんことを待つ。更に願はくは佛燈を張つて、我が爲めに明燭に代へよ。」

七、「扶疎たり崑上樹、夏に入りて總べて陰を成す。幾年か荆棘の地、一旦叢林と成る。我れ方に弟子と共に海潮音を聴く。人生聚散多し、離別忽ち心を驚かす。」

八、「我れ師と來往す、歲月長からずと雖も、相見て二老と成す、風流亦常に異なり。師は岩山に宴坐す、我れ方に爲めに糧を聚む。儻し師能く早く歸らば、此の樂未だ央ばならず。」

九、「紛々たり學禪者、腰包競つて奔走、才能葛藤を説き、痴意便ち自ら負ふ。其の道徳の尊きを求むるに、師の如きは蓋し有ること稀なり。願はくは上乘人に傳はつて、永く臨濟の後を光いにせん。」

十、「吾が邑に緇徒多し、浩々として雲海の若し。大機久しく己に亡す、頼に小機の有るあり。仍つて更に一岑を與にす、純全にして兩ながら悔なし。堂々たり二者の禪、海内共に待つことを期す。」

十一、「古は住持事なし、但只法旨を傳ふ。能く色空を悟ることあらば、便ち生死を超ゆべし。庸僧本來に味し、豈に西歸の履を識らんや。帖を買つて禪床に坐す、佛法將に何ぞ恃まん。」

十二、「僧中高僧あり、士も亦高士あり。我れ高きを爲すと雖も、心粗能く止まることを知る。師は

①大機。玄沙備の法嗣、杭州天龍寺重機明真大師なり。
②小機。簡堂行機禪師なり、前に出づ。
③一岑。四極彦岑、前に出づ。
④本來の面目即ち悟に至らずといふこと。
⑤建曆西天に歸る因縁。

是れ箇中の人、特に爲さざることを思ふのみ。何の幸あつてか我と師と、俱に是れ隣家の子。」

十三、「師は本窮和尚、我れも亦窮秀才、窮を忍んで俱に己に徹す、老いて肯て歸來せざらん。今師暫く別ると雖も、泉石相猜むこと莫れ。縁に應じて聊か復た爾り、師豈に心あらんや。」(景心石刻)

④給事吳公、簡堂に謂つて曰く、「古人千崑萬岳の間に灰心浪智して、澗飲木食す、意を功名に絶つが若し。而して一旦紫泥の詔を奉じて、負春賤役の下に韜光匿跡して、初め榮達を念ふことなし。卒

かに傳統の列に當る、故に之を無心に得る時は則ち其の道大に、其の徳宏いなり。之を有求に計るときは則ち其の名單しく其の志狭し。惟れ師度量疑遠にして踵を古人に繼ぐ。

乃ち能く筧山に棲遲すること二十七年、遂に叢林の良器と成る。今の衲子内守る所なく、外紛華を逐ふて遠謀少くして大體なし。故に宗教を扶持すること能はず、所以に師に速ばざること遠し。」(高侍者記聞)

①此の章は古今衲子修道の用心の區別を表はし、併せて韜光晦藏の意を示す。
②高侍者。開儀溪の法嗣、雲味妙高禪師ならんか。
③此の章は人の常情を評説して誤れるを正し、道の爲めに奮志すべきを誨ふ。

④簡堂曰く、「夫れ人の常情能く惑なきこと罕なり、大抵信する所に蔽はれ、疑ふ所に阻てられて、輕んずる所を忽にし、愛する所に溺る。信既に偏なるときは、則ち言を聽いて其の實を考へず、遂に過當の言あり、疑ひ既に甚だしきときは、則ち實なりと雖も其の言を聽か

す、遂に實を失するの聽あらん。其の人を輕んずる時は則ち其の重んずべきの事を遺る、其の事を愛するときは則ち其の棄つべきの人を存す。斯れ皆苟も私懷を縱にして道理を稽へず、遂に佛祖の道を忘れ叢林の心を失ふ。故に常情の輕んずる所は、乃ち聖賢の重する所なり。古徳曰く、「遠きを謀る者は先づ其の近きを驗み、大を務むる者は必ず微を謹む、將に博く探つて審かに其の中を用ふるに在り。固に高を慕つて異を好むに在らず。」(與三吳給事書)

① 簡堂、清明坦夷にして慈惠物に及ぶ、禘子稍註誤あれば蔽護保借して、以て其の徳を成す。嘗て言く、「人誰か過なからん、之を改むるを美と爲るに在り。鄱陽の筓山に住せし日、適々隆冬雨雪連りに作るに値ふ、饘粥だも繼がす、師聞見せざるが如し。故に頌あり、曰く、

② 本草は古徳の接衆寬恕にして温諒なるを示し、併せて身を持する頗る儉素なるを明す。

「衲帳蒙頭燒檜栴、知らず身の寂寥の中に在ることを。」平生、道を以て自適す、榮名に急ならず、廬山圓通の請に赴きし日、拄杖草履のみ、見る者色莊かに意解く。九江の郡主林公叔達、之を目して曰く、「此れ佛法中の津梁なり。是に由つて名四方に重し、其の去就眞に前輩の體格を得たり。歿するの日、走使致力と雖も之が爲に涕下る。」

國譯禪門寶訓集 下 終

禪門寶訓集 上

東吳沙門 淨善 重集

明教嵩和尚曰、尊莫尊乎道、美莫美乎徳、道德之所存、雖匹夫非窮也、道德之所不存、雖王天下非通也、伯夷叔齊古之餓夫也、今以斯人比之、而人皆喜、桀紂幽厲古之人主也、今以其人比之、而人皆怒、是故學者患道德不充乎身、不患勢位不在乎己。 錫津集

明教曰、聖賢之學、固非一日之具、日不足繼之以夜、積之歲月、自然可成、故曰、學以聚之、問以辨之、斯言學非辨問、無由發明、今學者所至罕、有發一言問辨於人者、不知將何以裨助性地、成日新之益乎。 九峰集

明教曰、太史公讀孟子、至梁惠王問、何以利吾國、不覺置卷長嘆、嗟乎利誠亂之始也、故夫子罕言利、常防其原也、原者始也、尊崇貧賤、好利之蔽、何以別焉、夫在公者、取利不公則法亂、在私者、以欺取利則事亂、事亂則人爭不平、法亂則民怨不伏、其悖戾鬪諍、不顧死亡者、自此發矣、是不亦利誠亂之始也、且聖賢深戒去利、尊先仁義、而後世尙有恃利相欺、傷風敗教者、何限、況復公然張其征利之道而行之、欲天下風俗正而不澆、不薄、其可得乎。 錫津集

賢絕之於未萌防之於禮法則其為害也不亦甚乎。西湖廣記

明教曰大覺璉和尚住育王因二僧爭施利不已主事莫能斷大覺呼至責之曰昔包公判開封民有自陳以白金百兩寄我者亡矣今還其家其子不受望公召其子還之公嘆異即召其子語之其子辭曰先父存日無白金私寄他室二人固讓久之公不得已責付在城寺觀修冥福以薦亡者子目觀其事且塵勞中人尚能疎財慕義如此爾為佛弟子不識廉耻若是遂依叢林法殯之。西湖廣記

大覺璉和尚初遊廬山圓通訥禪師一見直以大器期之或問何自而知之訥曰斯人中正不倚動靜尊嚴加以道學行誼言簡盡理凡人資稟如此鮮不有成器者。九峰集

仁祖皇祐初遣銀瑤小使持綠綈尺一書召圓通訥住孝慈大伽藍訥稱疾不起表疏大覺應詔或曰聖天子旗崇道德恩被泉石師何固辭訥曰予濫廁僧倫視聽不聰幸安林下飯蔬飲水雖佛祖有所不為況其他耶先哲有言大名之下難以久居予平生行知足之計不以聲利自累若厭于心何日而足故東坡嘗曰知安則榮知足則富避名全節善始善終在圓通得之矣。行實

圓通訥和尚曰璧者命在杖失杖則顛渡者命在舟失舟則溺凡林下人自無所守挾外勢以為重者一旦失其所挾皆不能免顛溺之患。廬山野錄

圓通訥曰昔百丈大智禪師建叢林立規矩欲救像季不正之蔽曾不知像季學者盜規矩以破百丈之叢林上古之世雖巢居穴處人人自律大智之後雖高堂廣廈人人自廢故曰安危

德也與亡數也苟德可將何必叢林苟數可憑曷用規矩。野錄

圓通謂大覺曰古聖治心於未萌防情於未亂蓋預備則無患所以重門擊柝以待暴客而取諸豫也事預為之則易卒為之固難古之賢者有終身之憂而無一朝之患者誠在于斯。九峰集

大覺璉和尚曰玉不琢不成器人不學不知道今之所以知古後之所以知先善者可以為法惡者可以為戒歷觀前輩立身揚名於當世者鮮不學問而成之矣。九峰集

大覺曰妙道之理聖人嘗寓之於易至周衰先王之法壞禮義亡然後奇言異術間出而亂俗逮我釋迦入中土醇以第一義諦始末設為慈悲以化群生亦所以趨於時也自生民以來淳朴未散則三皇之教簡而素春也及情竇日鑿五帝之教詳而文夏也時與世異情隨日遷故三王之教密而嚴秋也昔商周之誥誓後世學者故有不能曉比當時之民聽之而不違則俗與今如何也及其弊而為秦漢也則無所不至矣故天下有不忍願聞者於是我佛如來一推之以性命之理冬也天有四時循環以生成萬物聖人設教迭相扶持以化成天下亦由是而已矣然至其極也皆不能無弊弊者迹也要當有聖賢者世起而救之自秦漢以來千有餘載風俗靡靡愈薄聖人之教列而鼎立互詆訾大道寥寥莫之返良可嘆也。答侍郎孫莘老書

大覺曰夫為一方主者欲行所得之道而利於人先須克己惠物下心於一切然後視金帛如糞土則四衆尊而歸之。與九德潤和尚書

大覺曰前輩有聰明之資無安危之慮如石門聰開先舜二人者可為戒矣然則人生定業固

難明辨，細詳其原，安得不知其為忽慢不思之過歟？故曰：禍患藏於隱微，發於人所忽，用是觀之，尤宜謹畏。九峰集

雲居舜和尚，字老夫，住廬山開先，以郡守槐都官私忿，羅橫逆民其衣，往京都訪大覺，至山陽也。阻雪旅邸，一夕有客，携二僕破雪而至，見老夫如舊識，已而易衣拜於前。老夫問之，客曰：昔在洞山，隨師荷擔之，漢陽幹僕宋榮也。老夫共語，疇昔客嗟嘆之久，凌晨備飯，贈白金五兩，仍喚一僕，客曰：此兒來往京城數矣，道途間關，備悉師行，固無慮乎？老夫由是得達，輦下，推此益知其二人平昔所存矣。九峰集

大覺曰：舜老夫賦性簡直，不識權衡貨殖等事，日有定課，曾不少易，雖炙燈掃地，皆躬為之。嘗曰：古人有一日不作，一日不食之戒，予何人也？雖垂老，其志益堅。或曰：何不使左右人，老夫曰：經涉寒暑，起坐不常，不欲勞之。

舜老夫曰：傳持此道，所貴一切真實，別邪正去妄情，乃治心之實，識因果明罪福，乃操履之實，弘道德接方來，乃住持之實，量才能請執事，乃用人之實，察言行定可否，乃求賢之實，不存其實，徒街虛名，無益於理，是故人之操履，惟要誠實，苟執之不渝，雖夷險可以一致。二事坦然庵集舜老夫謂浮山遠錄公曰：欲究無上妙道，窮則益堅，老當益壯，不可循俗苟竊聲利，自喪至德，夫玉貴潔潤，故丹紫莫能渝其質，松表歲寒，故霜雪莫能凋其操，是知節義為天下之大，惟公標致可尚，得不自強？古人曰：逸翮獨翔，孤風絕侶，宜其然矣。廣錄浮山遠和尚曰：古人親師擇友，曉夕不敢自怠，至於執爨負舂，陸沈賤役，未嘗憚勞，予在葉縣

備曾試之，然一有顧利害較得失之心，則依違姑息，靡所不至，且身既不正，又安能學道乎？岳侍者法語

遠公曰：夫天地之間，誠有易生之物，使一日暴之，十日寒之，亦未見有能生者，無上妙道昭昭然在於心目間，故不難見，要在志之堅，行之力，坐立可待，其或一日信而十日疑之，朝則勤而夕則憚之，豈獨目前難見，予恐終其身而背之乎矣。雲首座書

遠公曰：住持之要，莫先審取捨，取捨之極，定於內，安危之萌，定於外矣。安非一日之安，危非一日之危，皆從積漸，不可不察，以道德住持積道德，以禮義住持積禮義，以刻剝住持積怨恨，怨恨積則中外離背，禮義積則中外和悅，道德積則中外感服，是故道德禮義洽，則中外樂，刻剝怨恨極，則中外哀，夫哀樂之感，禍福斯應矣。

遠公曰：住持有三要，曰仁，曰明，曰勇。仁行道德，與教化安上下，悅往來，明者遵禮義，識安危，察賢愚，辨是非，勇者事果決，斷不疑，姦必除，佞必去，仁而不明，如有田不耕，明而不勇，如有苗不耘，勇而不仁，猶知刈而不知種，三者備則叢林興，缺一則衰，缺二則危，三者無一，則住持之道廢矣。二事與淨因謙和尚書

遠公曰：智愚賢不肖，如水火不同器，寒暑不同時，蓋素分也。賢智之士，醇懿端厚，以道德仁義是謀，發言行事，惟恐不合人情，不通物理，不肖之者，姦險詐佞，矜己逞能，嗜慾苟利，一切不顧，故禪林得賢者，道德修，綱紀立，遂成法席，剛一不肖者，在其間，攪群亂衆，中外不安，雖大智禮法，縱有何用，智愚賢不肖，優劣如此爾，烏得不擇焉？惠力芳和尚書

遠公曰住持居上當謙恭以接下執事在下要盡情以奉上上下既和則住持之道通矣居上者驕倨自尊在下者怠慢自疎上下之情不通則住持之道塞矣古德住持閑暇無事與學者從容議論靡所不至由是一言半句載于傳記逮今稱之其故何哉一則欲使上情下通道無壅蔽二則預知學者才性能否其於進退之間皆合其宜自然上下雍肅遐邇歸敬叢林之興由是致耳

與晉華嚴書

遠公謂道吾真曰學未至於道街耀見聞馳騁機解以口舌辯利相勝者猶如廁屋塗汚丹纓祇增其臭耳

西遊記開

遠公謂演首座曰心為一身之主萬行之本心不妙悟妄情自生妄情既生見理不明見理不明是非謬亂所以治心須求妙悟悟則神和氣靜容敬色莊妄想情慮皆融為真心矣以此治心心自靈妙然後導物指迷孰不從化

浮山實錄

五祖演和尚曰今時叢林學道之士聲名不揚匪為人之所信者蓋為梵行不清白為人不諦當輒或苟求名聞利養乃廣街其華飾遂被識者所譏故蔽其要妙雖有道德如佛祖聞見疑而不信矣爾輩佗日若有把茅蓋頭當以此而自勉

佛鑑答投子書

演祖曰師翁初住楊岐老屋敗椽僅蔽風雨適臨冬暮雪霰滿床居不遑處衲子投誠願充修造師翁却之曰我佛有言時當減劫高岸深谷遷變不常安得圓滿如意自求稱足汝等出家學道做手脚未穩已是四五十歲詎有閑工夫事豐屋耶竟不從翌日上堂曰楊岐乍住屋壁疎滿床盡撒雪寶珠縮却項暗嗟噓翻憶古人樹下居

廣錄

演祖曰衲子守心城奉戒律日夜思之朝夕行之行無越思思無越行有其始而成其終猶耕者之有畔其過鮮矣

演祖曰所謂叢林者陶鑄聖凡養育才器之地教化之所從出雖群居類聚率而齊之各有師承今諸方不務守先聖法度好惡偏情多以己是革物使後輩當何取法

二事坦然集

演祖曰利生傳道務在得人而人之難聖哲所病聽其言而未保其行求其行而恐遺其才自非素與交遊備詳本末探其志行觀其器能然後守道藏用者可得而知沽名飾貌者不容其偽縱其潛密亦見淵源夫觀探詳聽之理固非一朝一夕之所能所以南嶽讓見大鑿之後猶執侍十五秋馬祖見讓之時亦相從十餘載是知先聖授受之際固非淺薄所敢傳持如一器水傳於一器始堪克紹洪規如當家種草此其觀探詳聽之理明驗也豈容巧言令色便僻諂媚而充選者哉

圓悟書

演祖曰住持大柄在惠與德二者兼行廢一不可惠而罔德則人不敬德而罔惠則人不懷苟知惠之可懷加其德以相濟則所敷之惠適足以安上下誘四來苟規德之可敬加其惠以相資則所持之德適足以紹先覺導愚迷故善住持者養德以行惠宣惠以持德德而能養則不屈惠而能行則有恩由是德與惠相著惠與德互行如此則德不用修而敬同佛祖惠不勞費而懷如父母斯則湖海有志於道者就不來歸住持將傳道德與教化不明斯要而莫之行也

與佛眼書

演祖自海會遷東山太平佛鑑龍門佛眼二人詣山頭省親祖集耆舊主事備湯菜夜話祖問

佛鑑舒州熟否對曰熟祖曰太平熟否對曰熟祖曰諸莊共收稻多少佛鑑籌慮問祖正色厲聲曰汝濫爲一寺之主事無巨細悉要究心常住歲計一衆所係汝猶罔知其他細務不言可見山門執事知因識果若師翁輔慈明師祖乎汝不思常住物重如山乎蓋演祖尋常機辯峻捷佛鑑既執弟子禮應對含緩乃至如是古人云師嚴然後所學之道尊故東山門下子孫多賢德而超邁者誠源遠而流長也 耿龍學與高庵書

演祖見弟子有節義而可立者室中峻拒不假辭色察其偏邪諂佞所爲猥屑不可教者愈加愛重人皆莫測烏乎蓋祖之取捨必有道矣 耿龍學跋法語

演祖曰古人樂聞己過喜於爲善長於包荒厚於隱惡謙以交友勤以濟衆不以得喪貳其心所以光明碩大照映今昔矣 答靈源書

演祖謂佛鑑曰住持之要臨衆貴在豐盈處己務從簡約其餘細碎悉勿關心用人深以推誠擇言故須取重言見重則主者自尊人推誠則衆心自感尊則不嚴而衆服感則不令而事成自然賢愚各通其懷小大皆奮其力與夫持以勢力迫於驅喝不得已而從之者何啻萬倍哉 與佛鑑書見贈侍者自錄

演祖謂郭功輔曰人之性情固無常守隨化日遷自古佛法雖隆替有數而興衰之理未有不由教化而成昔江西南嶽諸祖之利物也扇以淳風節以清淨被以道德教以禮義使學者收視聽塞邪僻絕嗜慾忘利養所以日遷善遠過道成德備而不自知今之人不如古之人遠矣必欲參究此道要須確志勿易以悟爲期然後禍患得喪賦之造物不可苟免豈可預憂其不

成而不爲之耶纔有絲毫顧慮萌于胸中不獨今生不了以至千生萬劫無有成就之時 坦然庵集

功輔自當塗 太平州也 訪白雲端和尚于海會白雲問公牛淳乎公曰淳矣白雲叱之公拱而立白雲曰淳乎淳乎南泉大滂無異此也仍贈以偈曰牛來山中水足草足牛出山去東觸西觸又曰上大人化三千可知禮也 行狀

白雲謂功輔曰昔翠巖真點胸耽味禪觀以口舌辯利呵罵諸方未有可其意者而大法實不明了一日金鑿善侍者見而咲曰師兄參禪雖多而不妙悟可謂癡禪矣 白雲夜話

白雲曰道之隆替豈常耶在人弘之耳故曰操則存捨則亡然非道去人而人去道也古之人處山林隱朝市不牽於名利不惑於聲色遂能清振一時美流萬世豈古之可爲今之不可爲也由教之未至行之不力耳或謂古人淳朴故可教今人浮薄故不可教斯實鼓惑之言誠不足稽也 答功輔書

白雲謂無爲子曰可言不可行不若勿言可行不可言不若勿行發言必慮其所終立行必稽其所蔽於是先哲謹於言擇於行發言非苟顯其理將啓學者之未悟立行非獨善其身將訓學者之未成所以發言有類立行有禮遂能言不集禍行不招辱言則爲經行則爲法故曰言行乃君子之樞機治身之大本動天地感鬼神得不敬乎 白雲廣錄

白雲謂演祖曰禪者智能多見於已然不能見於未然止觀定慧防於未然之前作止任滅覺於已然之後故作止任滅所用易見止觀定慧所爲難知惟古人志在於道絕念未萌雖有止

觀定慧，作止任滅，皆爲本末之論也。所以云：若有毫端許言於本末者，皆爲自欺。此古人見微處而不自欺。實錄

白雲曰：多見衲子，未嘗經及遠大之計，予恐叢林自此衰薄矣。楊岐先師每言：上下儉安，最爲法門大患。予昔隱居歸宗書堂，披閱經史，不啻數百過目，其簡編蔽故極矣。然每開卷，必有新獲之意，予以是思之，學不負人如此。白雲實錄

白雲初住九江承天，次遷圓通，齒甚少。時晦堂在寶峰，謂月公晦曰：新圓通微見元，不忝楊岐之嗣，惜乎發用太早，非叢林福。公晦因問其故，晦堂曰：功名美器，造物惜之，不與人全。人固欲之，天必奪之。逮白雲終于舒之海會，方五十六歲，識者謂晦堂知機而知微，真哲人矣。湛

堂記聞

晦堂心和尚，參月公晦于寶峰，公晦洞明楞嚴深旨，海上獨步。晦堂每聞一句一字，如獲至瑤，喜不自勝。衲子中間有竊議者，晦堂聞之曰：扣彼所長，矚我所短，吾何慊焉。英邵武曰：晦堂師兄道學爲禪衲所宗，猶以尊德自勝爲強，以未見未聞爲媿，使叢林自廣而狹於人者，有所矜式。小補哉。靈源拾遺

晦堂曰：住持之要，當取其遠大者，略其近小者。事固未決，宜諮詢于老成之人，尙疑矣。更扣問于識者，縱有未盡，亦不致甚矣。其或主者好逞私心，專自取與，一旦遭小人所謀，罪將誰歸。故曰：謀在多，斷在獨，謀之在多，可以觀利害之極致，斷之在我，可以定叢林之是非也。與草堂書 晦堂不赴瀉山請，延平陳瑩中移書勉之曰：古人住持無職事，選有德者居之，當是任者，必將

以斯道覺斯民，終不以勢位聲利爲之變。今學者大道未明，各趨異學，流入名相，遂爲聲色所動，賢不肖雜糅，不可別白。正宜老成者惻隱存心之時，以道自任，障回百川，固無難矣。若夫退求靜謐，務在安逸，此獨善其身者所好，非叢林所以望公者哉。靈源拾遺

晦堂一日見黃龍有不豫之色，因逆問之。黃龍曰：監收未得人。晦堂遂薦威副寺。黃龍曰：威尙暴，恐爲小人所謀。晦堂曰：化侍者稍廉謹。黃龍謂：化雖廉謹，不若秀藏主有量而忠。靈源嘗問晦堂：黃龍用一監收，何過慮如此。晦堂曰：有國有家者，未嘗不本。此豈特黃龍爲然，先聖亦曾戒之。大滄秀雙嶺化感鐵面三人也。通菴壁記

晦堂謂朱給事世英曰：予初入道，自恃甚易，逮見黃龍先師後，退思日用與理矛盾者極多，遂力行之三年，雖祁寒溽暑，確志不移，然後方得事事如理。而今咳嗽掉臂，也是祖師西來意。章江集

朱世英問晦堂曰：君子不幸小有過差，而聞見指目之不暇，小人終日造惡，而不以爲然，其故何哉。晦堂曰：君子之德比美玉焉，有瑕生內，必見於外，故見者稱異，不得不指目也。若夫小人者，日用所作，無非過惡，又安用言之。章江集

晦堂曰：聖人之道如天地育萬物，無有不備於道者。衆人之道如江河淮濟，山川陵谷，草木昆蟲，各盡其量而已，不知其外無有不備者。夫道豈二耶，猶得之淺深，成有大小耳。答張無盡書 晦堂曰：久廢不可速成，積蔽不可頓除，優游不可久戀，人情不能恰好，禍患不可苟免，夫爲善知識，達此五事，涉世可無悶矣。與祥和尙書

晦堂曰先師進士嚴重見者敬畏衲子因事請假多峻拒弗從惟聞省侍親老氣色穆然見於顏面盡禮津遣其愛人恭孝如此與謝景溫書

晦堂曰黃龍先師昔同雲峰悅和尚夏居荆南鳳林悅好辯論一日與衲子作喧先師閱經自若如不聞見已而悅詣先師案頭瞑目責之曰爾在此習善知識量度耶先師稽首謝之閱經如故已上並見靈源拾遺

黃龍南和尚曰予昔同文悅遊湖南見衲子擔籠行脚者悅驚異蹙頰已而呵曰自家閨閣中物不肯放下返累及他人擔分無乃太勞乎林間錄

黃龍曰住持要在得衆得衆要在見情先佛言人情者爲世之福田蓋理道所由生也故時之否泰事之損益必因人情情有通塞則否泰生事有厚薄則損益至惟聖人能通天下之情故易之別卦乾下坤上則曰泰乾上坤下則曰否其取象損上益下則曰益損下益上則曰損夫乾爲天坤爲地天在下而地在上位故乖矣而返謂之泰者上下交故也主在上而賓處下義故順矣而返謂之否者上下不交故也是以天地不交庶物不育人情不交萬事不和損益之義亦由是矣夫在人上者能約己以裕下下必悅而奉上矣豈不謂之益乎在上者蔑下而肆諸己下必怨而叛上矣豈不謂之損乎故上下交則泰不交則否自損者人益自益者人損情之得失豈容易乎先聖嘗喻人爲舟情爲水水能載舟亦能覆舟水順舟浮違則沒矣故住持得人情則興失人情則廢全得而全興全失而全廢故同善則福多同惡則禍甚善惡同類端如貫珠與廢象行明若觀日斯歷代之元龜也與黃燦勝書

黃龍謂荆公曰凡操心所爲之事常要面前路徑開濶使一切人行得始是大人用心若也險隘不通不獨使他人不能行兼自家亦無措足之地矣章江集

黃龍曰夫人語默舉措自謂上不欺天外不欺人內不欺心誠可謂之得矣然猶戒謹乎獨居隱微之間果無纖毫所欺可謂之得矣答荆公書

黃龍曰夫長老之職乃道德之器先聖建叢林陳紀綱立名位選擇有道德衲子命之曰長老者將行其道德非苟竊是名也慈明先師嘗曰與其守道老死丘壑不若行道領衆於叢林豈非善守長老之職者則佛祖之道德存歟與翠巖真書

黃龍謂隱士潘延之曰聖賢之學非造次可成須在積累積累之要惟專與勤屏絕嗜好行之勿倦然後擴而充之可盡天下之妙龍山廣錄

潘延之問黃龍法道嚴密因問其要黃龍曰父嚴則子敬今日之規訓後日之模範也譬治諸地隆者下之窪者平之彼將登于千仞之山吾亦與之俱困而極於九淵之下吾亦與之俱伎之窮妄之盡彼則自休也又曰姁之嫗之春夏所以生育也霜之雪之秋冬所以成熟也吾欲無言可乎林間錄

黃龍室中有三關語衲子少契其機者脫有訓對惟斂目危坐殊無可否延之益扣之黃龍曰已過關者掉臂而去從關吏問可否此未透關者也林間錄

黃龍曰道如山愈昇而愈高如地愈行而愈遠學者卑淺盡其力而止耳惟有志於道乃能窮其高遠其他孰與焉記聞

黃龍曰：古之天地日月猶今之天地日月，古之萬物性情猶今之萬物性情，天地日月固無易也，萬物性情固無變也，道胡爲而獨變乎？嗟其未至者，厭故悅新，捨此取彼，猶適越者不之南而之北，誠可謂異於人矣。然徒勞其心苦其身，其志愈勤，其道愈遠矣。通菴壁記

黃龍謂英邵武曰：志當歸一，久而勿退，他日必知妙道所歸，其或心存好惡，情縱邪僻，雖有志氣如古人，予恐終不得見其道矣。壁記

賈峰英和尚曰：諸方老宿，批判先覺語言，拈提公案，猶如捧土培太山，掬水沃東海，然後豈賴此以爲高深耶？觀其志在益之，而不自知非其當也。廣錄

英邵武每見學者恣肆不懼因果，嘆息久之曰：勞生如旅泊，住則隨緣，去則亡矣，彼所得能幾何？爾輩不識廉耻，干犯名分，污瀆宗教，乃至如是，大丈夫志在恢弘祖道，誘掖後來，不應私擅己慾，無所避忌，媒一身之禍，造萬劫之殃，三途地獄受苦者，未是苦也，向袈裟下失却人身，實爲苦也。壁記

英邵武謂晦堂：凡稱善知識，助佛祖揚化，使衲子迴心向道，移風易俗，固非淺薄者之所能爲，末法比丘不修道德，少有節義，往往苟苴骯髒，尾乞憐，追求聲利於權勢之門，一旦業盈福謝，天人厭之，玷污正宗，爲師友累，得太息，晦堂頷之。靈源拾遺

英邵武謂潘延之曰：古之學者治心，今學者治跡，然心與跡相去霄壤矣。英邵武謂真淨文和尚曰：物暴長者必夭折，功速成者必易壞，不推久長之計，而造卒成之功，皆非遠大之資，夫天地最靈，猶五載再閏，乃成其功，備其化，況大道之妙，豈倉卒而能辨哉，要

在積功累德，故曰：欲速則不達，細行則不失，美成在久，遂有終身之謀，聖人云：信以守之，敏以行之，忠以成之，事雖大而必濟。

昔詰侍者夜坐不睡，以圓木爲枕，小睡則枕轉，覺而復起，安坐如故，率以爲常，或謂用心太過，詰曰：我於般若緣分素薄，若不刻苦勵志，恐爲妄習所牽，況夢幻不真，安得爲久長計？予昔在湘西，目擊其操履如此，故叢林服其名，敬其德而稱之。靈源拾遺

真淨文和尚久參黃龍，初有不出人前之言，後受洞山請，道過西山，訪香城順和尚，順戲之曰：諸葛昔年稱隱者，茅廬堅請出山來，松花若也沾春力，根在深巖也著開，真淨謝而退。順語錄

真淨舉廣道者住五峰，與議廣疎拙無應世才，逮廣住持，精以治己，寬以臨衆，未幾百廢具舉，衲子往來競爭喧傳，真淨聞之曰：學者何易毀譽耶？予每見叢林竊議曰：那箇長老行道安衆，那箇長老不侵用常住，與衆同甘苦，夫稱善知識爲一寺之主，行道安衆，不侵常住，與衆甘苦，固當爲之，又何足道，如士大夫做官爲國安民，乃曰：我不受賊，不擾民，且不受賊，不擾民，豈分外事耶？山堂小參

真淨住歸宗，每歲化主納疏，布帛雲委，真淨視之，顰蹙已而嘆曰：信心膏血，予慙無德，何以克當。李商老日涉記

真淨曰：末法比丘，鮮有節義，每見其高談濶論，自謂人莫能及，逮乎一飯之惠，則始異而終輔之，先毀而後譽之，求其是曰是，非曰非，中正而不隱者，少矣。壁記

真淨曰：比丘之法，受用不宜豐滿，豐滿則溢，稱意之事不可多謀，多謀終敗，將有成之，必有壞

之予見黃龍先師應世四十年語默動靜未嘗以顏色禮貌文才牢籠當世衲子唯確有見地履實踐真者委曲成褻之其慎重真得古人體裁諸方罕有倫比故今日臨衆無不取法

日誌記

真淨住建康保寧舒王齋觀素練因問侍僧此何物對曰紡絲羅真淨曰何用侍僧曰堪做袈裟真淨指所衣布伽黎曰我尋常披此見者亦不甚嫌惡即令送庫司估賣供衆其不事服飾如此

日誌記

真淨謂舒王曰日用是處力行之非則固止之不應以難易移其志苟以今日之難掉頭不顧安知他日不難於今日乎

日誌記

真淨聞一方有道之士化去惻然嘆息至於泣涕時湛堂爲侍者乃曰物生天地間一兆形質枯死殘蠹似不可逃何苦自傷真淨曰法門之興賴有德者振之今皆亡矣叢林衰替用此可

下

日誌記

湛堂準和尚初參真淨常炙燈帳中看讀真淨呵曰所謂學者求治心也學雖多而心不治縱學而奚益而況百家異學如山之高海之深子若爲盡之今棄本逐末如賤使貴恐妨道業直須杜絕諸緣當求妙悟他日觀之如推門入曰故不難矣湛堂即時屏去所習專住禪觀一日聞衲子讀諸葛孔明出師表豁然開悟凝滯頓釋辯才無礙在流輩中鮮有過者

湛堂曰有道德者樂於衆無道德者樂於身樂於衆者長樂於身者亡今稱住持者多以好惡臨衆故衆人拂之求其好而知其惡惡而知其好者鮮矣故曰與衆同憂樂同好惡者義也義之

所在天下孰不歸焉

二事類可贊贊疣集

湛堂曰道者古今正權善弘道者要在變通不知變者拘文執教滯相殫情此皆不達權變故僧問趙州萬法歸一一歸何處州云我在青州做一領布衫重七斤謂古人不達權變若是之酬酢聖人云幽谷無私遂至斯響洪鐘篋受扣無不應是知通方上士將返常合道不守一而不應變也

與字商老書

湛堂曰學者求友須是可爲師者時中長懷尊敬作事取法期有所益或智識差勝於我亦可相從警所未逮萬乙與我相似則不如無也

寶峰寶錄

湛堂曰祖庭秋晚林下人不爲囂浮者固自難得昔真如住智海嘗言在湘西道吾時衆雖不多猶有老衲數輩履踐此道自大瀉來此不下九百僧無七五人會我說話予以是知得人在衆多也

寶錄

湛堂曰惟人履行不可以一訓一詰固能盡知蓋口舌辯利者事或未可信辭語拙訥者理或不可窮雖窮其詞恐未窮其理能服其口恐未服其心惟人難知聖人所病況近世衲子聰明不務通物情視聽多只伺過隙與衆違欲與道乖方相向以欺相冒以詐使佛祖之道靡靡而愈薄殆不可救矣

答魯直書

湛堂謂妙喜曰像季比丘外多徇物內不明心縱有弘爲皆非究竟蓋所附卑猥而使然如搏牛之虻飛止數步若附驥尾便有追風逐日之能乃依托之勝也是故學者居必擇處遊必就士遂能絕邪僻近中正聞正言也昔福嚴雅和尚每愛真如語標致可尚但未知所附者何人

一日見與大寧寬，蔣山元翠巖真偕行，雅喜不自勝。從容謂詰曰：諸大士法門龍象，子得從之游，異日支吾道之頽頹，彰祖教之利濟，固不在予多囑也。日涉記

湛堂謂妙喜曰：參禪須要識慮高遠，志氣超邁，出言行事，持信於人，勿隨勢利，苟枉自然，不爲朋輩描模時所上下也。寶錄記附

湛堂曰：予昔同靈源侍晦堂于章江寺，靈源一日與二僧入城，至晚方歸，晦堂因問：今日何往？靈源曰：適往大寧來，時死心在傍厲聲呵曰：參禪欲脫生死，發言先要誠實，清兄何得妄語？靈源熱面不敢對，自爾不入城郭，不妄發言，予固知靈源死心皆良器也。日涉記

湛堂曰：靈源好閱經史，食息未嘗少憩，僅能背諷，乃止。晦堂因呵之，靈源曰：嘗聞用力多者收功遠，故黃太史魯直曰：清兄好學，如飢渴之嗜飲食，視利養紛華若惡臭，蓋其誠心自然，非特爾也。雙疣集

靈源清和尚住舒州太平，每見佛眼臨衆周密，不甚失事，因問其要，佛眼曰：用事寧失於寬，勿失於急，寧失於略，勿失於詳，急則不可救，詳則無所容，當持之於中道，待之以含緩，庶幾爲臨衆行事之法也。拾遺

靈源謂長靈卓和尚曰：道之行固自有時，昔慈明放意於荆楚間，含耻忍垢，見者忽之，慈明吟而已，有問其故，對曰：連城與瓦礫相觸，固知不勝矣，逮見神鼎後，譽播叢林，終起臨濟之道，嗟呼，道與時也，苟可強乎？筆帖

靈源謂黃太史曰：古人云：抱火措子積薪之中，而寢其上，火未燃固以爲安，此誠喻安危之機。

死生之理明如杲日，間不容髮，夫人平居燕處，罕以生死禍患爲慮，一旦事出不測，方頓足振腕而救之，終莫能濟矣。筆帖

靈源謂佛鑑曰：凡接東山師兄書，未嘗言世諦事，唯丁寧忘驅弘道，誘掖後來而已，近得書云：諸莊早損，我總不憂，只憂禪家無眼，今夏百餘人室中舉箇狗子無佛性話，無一人肯得，此可爲憂，至哉斯言，與憂院門不辨，怕官人嫌責，慮聲位不揚，恐徒屬不盛者，實霄壤矣，每念此稱實之言，豈復得聞吾姪爲嫡嗣，能力振宗風，當慰宗屬之望，是所切禱。續侍者日錄

靈源曰：磨礪砥礪不見其損，有時而盡，種樹蓄養不見其益，有時而大，積德累行不知其善，有時而用，棄義背理，不知其惡，有時而亡，學者果熟計而履踐之，成大器播美名，斯今古不易之道也。筆帖

靈源謂古和尚曰：禍福相倚，吉凶同域，惟人自兆，安可不思，或專己之喜怒而溢於含容，或私心靡費而從人之所欲，皆非住持之急，茲實恣肆之悠漸，禍害之基源也。筆帖

靈源謂伊川先生曰：禍能生福，福能生禍，禍生於福者，緣處災厄際，切於思安，深於求理，遂能祇畏敬謹，故福之生也宜矣，福生於禍者，緣居安泰之時，縱其奢欲，肆其驕怠，尤多輕忽侮慢，故禍之生也宜矣，聖人云：多難成其志，無難喪其身，得乃喪之端，喪乃得之理，是知福不可履，僥倖得不可常，覬覦居福以慮禍，則其福可保，見得而慮喪，則其得必臻，故君子安不忘危，理不忘亂者是也。筆帖

靈源謂伊川先生曰：夫人有惡其迹，而畏其影，却背而走者，然走愈急，跡愈多，而影愈疾，不如

就陰而止，影自滅而跡自絕矣。日用明，此可坐進斯道。筆帖

靈源曰：凡住持位過，其任者鮮克有終。蓋福德淺薄，量度狹隘，聞見鄙陋，又不能從善務義，以自廣而致然也。目錄

靈源聞覺範貶竄嶺海，嘆曰：蘭植中途，必無經時之翠。桂生幽岳，終抱彌年之丹。古今才智喪身，譏謗羅禍者多，求其與世浮沈能保其身者少。故聖人言：當世聰明深察，而近於死者，好議人者也。博辯宏大，而危其身者，好發人之惡也。在覺範有之矣。章江集

靈源謂覺範曰：聞在南中時，究楞嚴特加箋釋，非不肖所望。蓋文字之學，不能洞當人之性源，徒與後學障先佛之智眼，病在依他作解，塞自悟門。資口舌則可勝淺聞，廓神機則終難極妙。證故於行解多致參差，而日用見聞尤增隱昧也。章江集

靈源曰：學者舉措不可不審，言行不可不稽。寡言者未必愚，利口者未必智。鄙樸者未必悖，承順者未必忠。故善智識不以辭盡人情，不以意選學者。夫湖海衲子，誰不欲求道於中，悟明見理者，千百無一。其間修身勵行，聚學樹德，非三十年而不能致。偶一事過差，叢林棄之，終身不可立。夫耀乘之珠，不能無類，連城之璧，寧免無瑕。凡在有情，安得無咎。夫子聖人也，猶以五十學易，無大過為言。契經則曰：不怕念起，惟恐覺遲。況自聖賢以降，孰無過失哉。在善知識曲成，則品物不遺矣。故曰：巧梓順輪奐之用，枉直無廢材。良御適險易之宜，駑驥無失性。物既如此，人亦宜然。若進退隨愛憎之情，離合繫異同之趣，是由捨繩墨而裁曲直，棄權衡而較重輕，雖曰精微，不能無謬矣。

靈源曰：善住持者，以衆人心為心，未嘗私其心；以衆人耳目為耳目，未嘗私其耳目。遂能通衆人之志，盡衆人之情。夫用衆人之心為心，則我之好惡乃衆人好惡，故好者不邪，惡者不謬。又安用私託腹心而甘服其諂媚哉。既用衆人耳目為耳目，則衆人聰明皆我聰明，故明無不察，聰無不聞。又安用私託耳目而固招其蔽惑耶。夫布腹心託耳目，惟賢達之士務求己過，與衆同欲，無所偏私。故衆人莫不歸心，所以道德仁義流布遐遠者，宜其然也。而愚不肖之意，務求人之過，與衆違欲，溺於偏私。故衆人莫不離心，所以惡名險行，傳播遐遠者，亦宜其然也。是知住持人與衆同欲，謂之賢哲；與衆違欲，謂之庸流。大率布腹心託耳目之意，有殊而善惡成敗相返如此，得非求過之情有異，任人之道不同者哉。

靈源曰：近世作長老，涉二種緣，多見智識不明，為二風所觸，喪於法體。一應逆緣，多觸衰風，二應順緣，多觸利風。既為二風所觸，則喜怒之氣交於心，鬱勃之色浮於面，是致取辱法門，譏諍賢達。唯智者善能轉為攝化之方，美導後來。如瑯琊和尚往蘇州看范希文，因受信施及千餘緡，遂遣人陰計在城諸寺僧數，皆密送錢，同日為衆檀設齋，其即預辭范公，是日侵早發船，速天明衆知已去，有追至常州而得見者，受法利而廻觀，此老一舉，使姑蘇道俗悉起信心，增深道種。此所謂轉為攝化之方，與夫竊法位苟利養為一身之謀者，實霄壤也。與德和尚書

文正公謂瑯琊曰：去年到此，思得林下人可語者，嘗問一吏，諸山有好僧否。吏稱北寺瑞光，希茂二僧為佳。予曰：此外諸禪律中別無耶。吏對予曰：儒尊士行，僧論德業，如希茂二人者，三十年蹈不越閭，衣惟布素，聲名利養了無所滯，故邦人高其操履而師敬之。若其登座說法，代佛

揚化機辯自在稱善知識者非頑吏能曉。逮暇日訪希茂二上人視其素行一如吏言予退思舊稱蘇秀好風俗今觀老吏尙能分君子小人優劣況其識者耶。瑯琊曰若吏所言誠爲高議請記之曉未聞。瑯琊別錄

靈源曰鐘山元和尙平生不交公卿不苟名利以卑自牧以道自樂士大夫初勉其應世元曰苟有良田何憂晚成第恐乏才具耳荆公聞之曰色斯舉矣翔而後集在元公得之矣。賢苑集

靈源曰先哲言學道悟之爲難既悟守之爲難既守行之爲難今當行時其難又過於悟守蓋悟守者精進堅卓勉在己躬而已惟行者必等心死誓以損己益他爲任若心不等誓不堅則損益倒置便墮爲流俗阿師是宜祇畏。

靈源曰東山師兄天資特異語默中度尋常出示語句其理自勝諸方欲効之不詭俗則淫陋終莫能及求於古人中亦不可得然猶謙光導物不啻飢渴嘗曰我無法寧克勤諸子眞法門中罪人矣。

靈源道學行義純誠厚德有古人之風安重寡言尤爲士大夫尊敬嘗曰衆人之所忽聖人之所護況爲叢林主助宜佛化非行解相應詎可爲之要在時時檢責勿使聲名利養有萌於心儒法令有所未孚衲子有所未服當退思修德以待方來未見有身正而叢林不治者所謂觀德人之容使人之意消誠實在茲。記聞

靈源謂圓悟曰衲子雖有見道之資若不深蓄厚養發用必峻暴非特無補教門將恐有招禍

圓悟禪師曰學道存乎信立信在乎誠存誠於中然後俾衆無惑存信於己可以教人無欺惟信與誠有失無補是知誠不一則心莫能保信不一則言莫能行古人云衣食可去誠信不可失惟善知識當教人以誠信且心既不誠事既不信稱善知識可乎易曰惟天下至誠遂能盡其性能盡其性則能盡人之性而自既不能盡於己欲望盡於人衆必給而不從自既不誠於前而曰誠於後衆必疑而不信所謂割髮宜及膚剪爪宜侵體良以誠不至則物不感損不至則益不臻蓋誠與信不可斯須去己也明矣。與廣院書

圓悟曰人誰無過過而能改善莫大焉從上皆稱改過爲賢不以無過爲美故人之行己多有過差上智下愚俱所不免唯智者能改過遷善而愚者多蔽過飾非遷善則其德日新是稱君子飾過則其惡彌著斯謂小人是以前義能徙常情所難見善樂從賢德所尙望公相忘於言外可也。與開主簿

圓悟曰先師言做長老有道德感人者有勢力服人者猶如鸞鳳之飛百禽愛之虎狼之行百獸畏之其感服則一其品類固霄壤矣。賢苑集

圓悟謂隆藏主曰欲理叢林而不務得人之情則叢林不可理務得人之情而不勤於接下則人情不可得務勤接下而不辨賢不肖則下不可接務辨賢不肖而惡言其過悅順其己則賢不肖不可辨惟賢達之士不惡言過不悅順己爲道是從所以得人情而叢林理矣。廣錄

圓悟曰住持以衆智爲智衆心爲心恒恐一物不盡其情一事不得其理孜孜訪納惟善是求當問理之是非詎論事之大小若理之是雖靡費大而作之何傷若事之非雖用度小而除之

何害蓋小者大之漸微者著之萌故賢者慎初聖人存戒涓涓不遏終變桑田炎炎靡除卒燬原野流煽既盛禍災已成雖欲救之固無及矣古云不矜細行終累大德此之謂也與佛智書圓悟謂元布袋曰凡稱長老之職助宣佛化常思以利濟為心行之而勿矜矜則所及者廣所濟者衆然一有矜己逞能之心則僥倖之念起而不肖之心生矣雙林石刻

圓悟謂妙喜曰大凡舉措當謹始終故善作者必善成善始者必善終謹終如始則無敗事古云惜乎衣未成而轉為裳行百里之半於九十斯皆嘆有始而無終也故曰靡不有初鮮克有終昔晦堂老叔曰黃檗勝和尚亦奇衲子但晚年謬耳觀其始得不謂之賢雲門庵集

圓悟謂佛鑑曰白雲師翁動用舉措必稽往古嘗曰事不稽古謂之不法予多識前言往行遂成其志然非特好古蓋今人不足法先師每言師翁執古不知時變師翁曰變故易常乃今人之大患予終不為也續和尚日錄

佛鑑勸和尚自太平遷智海郡守曾公元禮問孰可繼住持佛鑑舉昂首座公欲得一見佛鑑曰昂為人剛正於世邈然無所嗜好請之猶恐弗從詎肯自來耶公固邀之昂曰此所謂呈身長老也竟逃于司空山公願謂佛鑑曰知子莫若父即命諸山堅請抑不得已而應命續侍者日錄

佛鑑謂詢佛燈曰高上之士不以名位為榮達理之人不為抑挫所困其有承恩而効力見利輸誠皆中人以下之所為日錄佛鑑謂昂首座曰凡稱長老要須一物無所好一有所好則被外物賊矣好嗜欲則貪愛之心

生好利養則奔競之念起好順從則阿諛小人合好勝負則人我之山高好捨刻則嗟怨之聲作總而窮之不離一心心若不生萬法自泯平生所得莫越於斯汝宜勉旃規正來學南華

石剎

佛鑑曰先師節儉一鉢囊鞋袋百綴千補猶不忍棄置嘗曰此二物相從出關僅五十年矣詎肯中道棄之有泉南悟上座送褐布襪自言得之海外冬服則溫夏服則涼先師曰老僧寒有柴炭紙衾熱有松風水石蓋此奚為終卻之日錄

佛鑑曰先師聞真淨遷化設位辨供哀哭過禮嘆曰斯人難得見道根柢不滯枝葉惜其早亡殊未聞有繼其道者江西叢林自此寂寥耳日錄

佛鑑曰先師言白雲師翁平生疏通無城府顧義有可為者踴躍以身先之好引拔賢能不喜附離苟合一榻愴然危坐終日嘗謂凝侍者曰守道安貧衲子素分以窮達得喪移其所守者未可語道也日錄

佛鑑曰為道不憂則操心不遠處身常逸則用志不大古人歷艱難嘗險阻然後享終身之安蓋事難則志銳刻苦則慮深遂能轉禍為福轉物為道多見學者逐物而忘道背明而投暗於是飾己之不能而欺人以為智強人之不逮而侮人以為高以此欺人而不知有不可欺之先覺以此掩人而不知有不可掩之公論故自智者人愚之自高者人下之惟賢者不然謂事散而無窮能涯而有盡欲以有盡之智而周無窮之事則識有所偏神有所因故於大道必有所闕焉與秀紫芝書

佛鑑謂龍牙才和尚曰：欲革前人之蔽，不可亟去，須因事而革之，使小人不疑，則庶無怨恨，予嘗言住持有三訣：見事能行，果斷三者缺一，則見事不明，終為小人，忽慢住持不振矣。

佛鑑曰：凡為一寺之主，所貴操履清淨，持大信以待四方衲子，差有毫髮猥蝶之事，於己不去，遂被小人窺覷，雖有道德如古人，則學者疑而不信矣。山堂小參

佛鑑曰：佛眼弟子唯高庵逕挺，不近人情，為人無嗜好，作事無黨援，清嚴恭謹，始終以名節自立，有古人風，近世衲子罕有倫比。與耿龍學書

佛眼遠和尚曰：蒞衆之容，必肅於閑暇之日，對賓之語，當嚴於私昵之時，林下人發言用事，舉措施為，先須籌慮，然後行之，勿倉卒暴用，或自不能予決，應須諮詢者舊，博問先賢，以廣見聞，補其未能，竭其未曉，豈可虛作氣勢，專逞貢高，自彰其醜，苟一行失之于前，雖百善不可得而掩於後矣。與真牧書

佛眼曰：人生天地間，稟陰陽之氣而成形，自非應真乘悲願力，出現世間，其利欲之心，似不可卒去，惟聖人知不可去，人之利欲，故先以道德正其心，然後以仁義禮智教化堤防之，日就月將，使其利欲不勝其仁義禮智，而全其道德矣。與耿龍學書

佛眼曰：學者不可泥於文字語言，蓋文字語言依他作解，障自悟門，不能出言象之表，昔達觀顯初見石門聰和尚室中馳騁口舌之辯，聰曰：子之所說，乃紙上語，若其心之精微，則未親其奧，當求妙悟，悟則超卓傑立，不乘言，不滯句，如師子王吼哮，百獸震駭，廻觀文字之學，何啻以什較百，以千較萬也。龍門記聞

佛眼謂高庵曰：百丈清規大槩標正，檢邪軌，物齊衆，乃因時以制，後人之情，夫人之情，猶水也，規矩禮法為堤防，堤防不固，必致奔突，人之情不制，則肆亂，故去情息妄，禁惡止邪，不可一時亡規矩，然則規矩禮法豈能盡防人之情，茲亦助入道之階墀也，規矩之立，昭然如日月，望之者不迷，擴乎如大道，行之者不惑，先聖建立雖殊，歸源無異，近代叢林，有力役規矩者，有死守規矩者，有蔑視規矩者，斯皆背道失理，縱情逐惡，而致然，曾不念先聖救末法之蔽，禁放逸之情，塞嗜欲之端，絕邪僻之路，故所以建立也。東湖集

佛眼謂高庵曰：見秋毫之末者，不自見其睫，舉千鈞之重者，不自舉其身，猶學者明於責人，昧於恕己者，不少異也。真牧集

高庵悟和尚曰：予初游祖山，見佛鑑小參，謂貪欲瞋恚過如冤賊，當以智敵之，智猶水也，不用則滯，滯則不流，不流則智不行矣，其如貪欲瞋恚何？予是時雖年少，心知其為善知識也，遂求挂搭。雲居實錄

高庵曰：學者所存中正，雖百折挫，而浩然無憂，其或所向偏邪，朝夕區區，為利是計，予恐堂堂之軀，將無措於天地之間矣。真牧集

高庵曰：道德仁義不獨古人有之，今人亦有之，以其智識不明，學問不廣，根器不淨，志氣狹劣，行之不力，遂被聲色所移，使不自覺，蓋因妄想情念，積習濃厚，不能頓除，所以不到古人地位耳。與耿龍學書

高庵聞成枯木住金山，受用侈靡，嘆息久之，曰：比丘之法，所貴清儉，豈宜如此，徒與後生輩習。

輕肥者，增無厭之求，得不愧古人乎？真牧集

高庵曰：住持大體以叢林為家，區別得宜，付授當器，舉措係安危之理，得失關教化之源，為人範模，安可容易？未見住持弛縱，而能使衲子服從，法度凌遲，而欲禁叢林暴慢，昔育王謀遣首座，仰山偉貶侍僧，載於典文，足為令範。今則各為徇私欲，大墜百丈規繩，懈於夙興，多缺參會禮法，或縱貪饕而無忌憚，或緣利養而致喧爭，至於便僻醜惡，靡所不有，烏呼！望法門之興，宗教之盛，詎可得耶？龍昌集

高庵住雲居，每見衲子室中，不契其機者，即把其袂，正色責之曰：父母養汝身，師友成汝志，無飢寒之迫，無征役之勞，於此不堅確精進，成辨道業，他日何面目見父母師友乎？衲子聞其語，有泣涕而不可已者，其號令整嚴如此。且庵逸事

高庵住雲居，聞衲子病，移延壽堂，嗟嘆嘆息，如出諸己，朝夕問候，以至躬自煎煮，不啻不與食，或遇天氣稍寒，拊其背曰：衣不單乎？或值時暑，察其色曰：莫太熱乎？不幸不救，不問彼之有無，常住盡禮津送，知事或他辭，高庵叱之曰：昔百丈為老病者，立常住，爾不病不死也，四方識者，高其為人，及退雲居，過天台，衲子相從者僅五十輩，間有不能往者，泣涕而別，盡其德，感人如此。山堂小參

高庵退雲居，圓悟欲治佛印臥龍庵，為燕休之所，高庵曰：林下人，苟有道義之樂，形骸可外，予以縱心之年，正如長庚曉月，光影能幾時？且西山廬阜林泉相矚，皆予逸老之地，何必有諸己，然後可樂耶？未幾即曳杖過天台，後終于華頂峰。真牧集

高庵曰：衲子無賢愚，惟在善知識委曲，以崇其德業，歷試以發其器能，旌獎以重其言，優愛以全其操，歲月積久，聲實並豐，蓋人皆含靈，惟勤誘致，如玉在璞，抵擲則瓦石，琢磨則圭璋，如水之發源，壅閉則淤泥，疏濬則川澤，乃知像季非獨遺賢，而不用，其於養育勸獎之道，亦有所未至矣。當叢林般盛之時，皆是季代棄材，在季則愚，當與則智，故曰：人皆含靈，惟勤誘致，是知學者才能與時升降，好之則至，獎之則崇，抑之則衰，斥之則絕，此學者道德才能消長之所由也。與李都運書

高庵曰：教化之大，莫先道德禮義，住持人尊道德，則學者尚恭敬，行禮義，則學者耻貪競，住持有失容之慢，則學者有凌暴之蔽，住持有動色諍，則學者有攻闢之禍，先聖知於未然，遂選明哲之士，主於叢林，使人具瞻，不諭而化，故石頭馬祖，道化盛行之時，英傑之士出，威儀柔嘉，雍雍肅肅，發言舉令，瞬目揚眉，皆可以為後世之範模者，宜其然矣。與死心書

高庵曰：先師嘗言，行腳出關，所至小院，多有不如意事，因思法眼參地，藏明教見，神鼎時，便不見有煩惱也。記聞
高庵表裏端勁，風格凜然，動靜不忘禮法，在衆日，屢見侵害，殊不介意，終身以簡約自奉，室中不妄許可，稍不相契，必正色直辭裁之，衲子皆信服，嘗曰：我道學無過人者，但平生為事無愧於心耳。

高庵住雲居，見衲子有攻人隱惡者，即從容諭之曰：事不如此，林下人道惟急務，和修身，豈可苟縱愛憎，壞人行止，其委曲如此，師初不赴雲居之命，佛眼遣書勉之云：雲居甲於江左，可以

安衆行道似不須固讓師曰自有叢林已來學者被這般名目壞了節義者不爲不少佛鑑問之曰高庵去就衲子所不及記聞

禪門寶訓集 上終

禪門寶訓集 下

雪堂行和尚住薦福一日問暫到僧甚處來僧云福州來雪堂云公路見好長老麼僧云近過信州博山住持本和尚雖不曾拜識好長老也雪堂曰安得知其爲好僧云入寺路徑開闢廊廡修整殿堂香燈不絕晨昏鐘鼓分明二時粥飯精潔僧行見人有禮以此知其爲好長老雪堂笑曰本固賢矣然爾亦具眼也直以斯言達于郡守吳公傅明曰這僧持論頗類范延齡薦張希顏事而閣下之賢不減張忠定公老僧年邁乞請本住持庶幾爲林下盛事吳公大喜本即日遷薦福東湖集范延齡事未詳所出

雪堂曰金陵千里潰於蟻壤白壁之美離於瑕玷況無上妙道非特金陵白壁也而貪欲瞋恚非特蟻壤瑕玷也要在志之端謹行之精進守之堅確修之完美然後可以自利而利他也與王十鴟書

雪堂曰予在龍門時曷鐵面住太平有言曷行脚離鄉未久聞受業一夕遣火悉爲煨燼曷得書擲之於地乃曰徒亂人意耳東湖集

雪堂謂晦庵光和尚曰予弱冠之年見獨居士言中無主不立外不正不行此語宜終身踐之聖賢事業備矣予佩其語在家修身出家學道以至率身臨衆如衡石之定重輕規矩之成方圓捨此則事事失準矣廣錄

雪堂曰：高庵臨衆必曰：衆中須知有識者。予因問其故。高庵曰：不見瀉山道。舉措看他上流。莫謾隨於庸鄙。平生任衆不沈於下愚者。皆出此語。稠人廣衆中。鄙者多識者少。鄙者易習。識者難親。果能自奮志於其間。如一人與萬人敵。庸鄙之習力盡。真挺特沒量漢也。予終身踐其言。始得不負出家之志矣。廣錄

雪堂謂且庵曰：執事須權重。發言要先思慮。務合中道。勿使偏頗。若倉卒暴用。鮮克有濟。就使得成。而終不能萬全。予在衆中。備見利病。惟有德者。以寬服人。常願後來有志力者。審而行之。方爲美利。靈源嘗曰：凡人平居內照。多能曉了。及涉事外馳。便乖混融。喪其法體。必欲思紹佛祖之任。啓迪後昆。不可不常自檢責也。廣錄

應庵華和尚住妙果。雪堂未嘗一日不過從。間有竊議者。雪堂曰：華姪爲人。不悅利近名。不先譽後毀。不阿容苟合。不佞色巧言。加以見道明白。去住儵然。衲子中難得。予固重之。且庵逸事

雪堂曰：學者氣勝。志則爲小人。志勝。氣則爲端人。正士。氣與志齊。爲得道賢聖。有人剛狠不受規諫。氣使然也。端正之士。雖強使爲不善。寧死不二。志使然也。廣錄

雪堂曰：高庵住雲居。普雲圓爲首座。一村僧爲書記。白楊順爲藏主。通烏頭爲知客。賢真牧爲維那。華姪爲副寺。用姪爲監寺。皆是有德業者。用姪尋常廉約。不點常住油。華姪因戲之曰：異時做長老。須是鼻孔端正。始得。豈可以此爲得耶。用姪不對。用姪處己雖儉。與人甚豐。接納四來。略無倦色。高庵一日見之。曰：監寺用心固難得。更須照管常住。勿令疎失。用姪曰：在某失爲小過。在和尙尊賢待士。海納山容。不問細微。誠爲大德。高庵咲而已。故叢林有用大碗之稱。逸事

雪堂曰：學者不知道之所向。則尋師友以參扣之。善知識不可以道之獨化。放假學者贊祐之。是以主招提。有道德之師。而成法社。必有賢智之衲子。是爲虎啖風烈。龍驤雲起。昔江西馬祖。因百丈南泉。而顯其大機大用。南嶽石頭。得藥山天皇。而著其大智大能。所以千載一合。論說無疑。翼然若鴻毛之遇風。沛乎似巨魚之縱壑。皆自然之勢也。遂致建叢林功勳。增佛祖光耀。先師住龍門。一夕謂予曰：我無德業。不能浩歸湖海。衲子。終愧老東山也。言畢潛然。予嘗思之。今爲人師法者。與古人相去倍萬矣。與竹庵書

雪堂曰：予在龍門時。靈源住太平。有司以非意擾之。靈源與先師書曰：直可以行道。殆不可爲。枉可以住持。誠非我志。不如放意於千巖萬壑之間。日飽芻粟。以遂餘生。復何倦倦乎。不旬浹間。有黃龍之命。乃乘輿歸江西。聽首座記聞

雪堂曰：靈源好比類衲子。曰：古人有言。爲土木偶人者。耳鼻先欲大。口目先欲小。此言雖小。可以喻大夫爲土木偶人。而耳鼻先小。口目先大。人或非之。不可改也。耳鼻大則可以小。口目小則可以大。學者臨事取捨。亦宜如是。不厭三思。可以爲忠厚之人也。記聞

雪堂曰：萬庵送高庵過天台。謂予言。有德貫首座。隱景星巖三十載。影不出山。龍學耿公爲郡。特以瑞巖迎之。貫辭以偈曰：三十年來獨掩關。使符那得到青山。休將麈尾人間事。換我一生林下閑。使命再至終不就。耿公嘆曰：今日隱山之流也。萬庵曰：彼有老宿能記其語者。乃曰：不體道本。沒溺死生。觸境生心。隨情動念。狼心狐意。諂行誑人。附勢阿容。徇名苟利。乖真逐妄。背覺合塵。林下道人終不爲也。予曰：貫亦僧中間氣也。逸事

雪堂生富貴之室，無驕倨之態，處躬節儉，雅不事物，住烏巨山，衲子有獻鐵鏡者，雪堂曰：溪流清泚，毛髮可鑑，蓄此何為？終却之。行實

雪堂仁慈忠恕，尊賢敬能，戲啖俚言，罕出于口，無峻阻，不暴怒，至於去就之際，極為介潔，嘗曰：古人學道，於外物澹然，無所嗜好，以至忘勢位，去聲色，似不勉而能，今之學者，做盡伎倆，終不奈何，其故何哉？志不堅，事不一，把作匹似閑耳。行實

雪堂曰：死心住雲巖，室中好怒罵，衲子皆望崖而退，方侍者曰：夫為善知識，行佛祖之道，號令人天，當視學者如赤子，今不能施慘怛之憂，垂撫循之恩，用中和之教，奈何如仇讐，見則詬罵，豈善知識用心乎？死心拽拄杖趁之曰：爾見解如此，他日諂奉勢位，苟媚權豪，賤賣佛法，欺罔世俗，定矣，予不忍，故以重言激之，安有他哉？欲其知耻改過，懷慕不忘，異日做好人耳。聽首座記聞

死心新和尚曰：秀圓通嘗言，自不能正，而欲正他人者，謂之失德，自不能恭，而欲恭他人者，謂之悖禮，夫為善知識，失德悖禮，將何以垂範後乎？與靈源書

死心謂陳瑩中曰：欲求大道，先正其心，少有忿嚏音帝，則不得其正，少有嗜慾，亦不得其正，然自非聖賢應世，安得無愛惡喜怒，直須不置之於前，以害其正，是為得矣。廣錄

死心曰：節儉放下，最為入道捷徑，多見學者，心憤憤口排排，就不欲繼踵古人，及觀其放下節儉，萬中無一，恰似庶俗之家子弟，不肯讀書，要做官人，雖三尺孺子，知其必不能為也。廣錄

死心謂洪堂曰：學者有才識，忠信節義者上，也，其才雖不高，謹而有量者次也，其或懷邪觀望，隨勢改易，此真小人也，若置之於人前，必壞叢林，而污瀆法門也。實錄

死心謂草堂曰：凡住持之職，發言行事，要在誠信，言誠而信，所感必深，言不誠信，所感必淺，不誠之言，不信之事，雖平居庶俗，猶不忍行，恐見欺于鄉黨，況為叢林主，代佛祖宣化，發言行事，苟無誠信，則湖海衲子，孰相從焉？黃龍實錄

死心曰：求利者，不可與道，求道者，不可與利，古人非不能兼之，蓋其勢不可也，使利與道兼行，則商賈屠沽，閭閻負販之徒，皆能求之矣，何必古人棄富貴，忘功名，灰心混智於空山大澤之中，澗飲木食，而終其身哉？必謂利與道行之不相違礙，譬如捧漏卮而灌焦釜，則終莫能溉濟矣。與韓子書

死心曰：晦堂先師，昔游東吳，見圓照赴淨慈，請蘇杭道俗爭之不已，一曰：此我師也，汝何奪之？一曰：今我師也，汝何有焉？一本見林間錄

死心住翠巖，聞覺範竄逐海外，道過南昌，邀歸山中，迎待連日，厚禮津送，或謂死心喜怒不常，死心曰：覺範有德衲子，鄉者極言去其圭角，今羅橫逆，是其素分，予以平日叢林道義處之，識者謂死心無私於人，故如此。西山記聞

死心謂草堂曰：晦堂先師言，人之寬厚，得於天性，若強之以猛，必不悠久，猛而不久，則返為小人，侮慢，然邪正善惡，亦得於天性，皆不可移，惟中人之性，易上易下，可從而化之。實錄

木石沒丘陵，火之微也，勺水可滅，及其盛也，焦都邑，燔山林，與夫愛溺之水，曠恚之火，曷常異乎？古之人治其心也，防其念之未生，情之未起，所以用力甚微，收功甚大，及其情性相亂，愛惡交攻，自則傷其生，他則傷其人，殆乎危矣，不可救也。與禪子著書

草堂曰：住持無他，要在審察人情，周知上下，夫人情審則中外和，上下通則百事理，此住持所以安也，人情不能審察，下情不能上通，上下乖戾，百事矛盾，此住持所以廢也，其或主者自恃聰明之資，好執偏見，不通物情，捨僉議而重己權，廢公論而行私惠，致使進善之途漸隘，任衆之道益微，毀其未見，未聞，安其所習所蔽，欲其住持經大傳遠，是猶却行而求前，終不可及。

與山堂書

草堂曰：學者立身，須要正當，勿使人竊議，一涉異論，則終身不可立矣。昔大陽平侍者，道學爲叢林推重，以處心不正，識者非之，遂致終身坎珂，逮死無歸，然豈獨學者而已，爲一方主人，尤宜祇畏。與一書記書

草堂謂如和尚曰：先師晦堂言，稱人廣衆中，賢不肖接踵，以化門廣大，不容親疎於其間也，惟在少加精選，苟才德合人望者，不可以己之所怒而疎之，苟見識庸常，衆人所惡者，亦不可以己之所愛而親之，如此則賢者自進，不肖者自退，叢林安矣。若夫主者好逞私心，專己喜怒，而進退於人，則賢者絀嘿，不肖者競進，紀綱紊亂，叢林廢矣。此二者實住持之大體，誠能審而踐之，則近者悅，遠者傳，則何慮道之不行，衲子不來慕乎？疎山石刻

草堂謂空首座曰：自有叢林已來，得人之盛，無如石頭、馬祖、雪峰、雲門，近代唯黃龍、五祖二老，

誠能收拾四方英俊衲子，隨其器度淺深，才性能否，發而用之，譬如乘輕車，駕駿驄，總其六轡，奮其鞭策，抑縱在其顧盼之間，則何往不達哉。廣錄

草堂曰：住持無他，要在戒謹其偏聽自專之蔽，不主乎先入之言，則小人諂佞，迎合之譏，不可得而惑矣。蓋衆人之情不一，至公之論難見，須是察其利病，審其可否，然後行之可也。疎山實錄

草堂謂山堂曰：天下之事是非未明，不得不慎，是非既明，以理決之，惟道所在，斷之勿疑，如此則姦佞不能惑，強辯不能移矣。清泉記聞

山堂震和尚初却曹山之命，郡守移文勉之，山堂辭之曰：若使飯梁噉肥，作貪名之衲子，不若草衣木食，爲隱山之野人。清泉才庵主記聞

山堂曰：蛇虎非鴟鵂之讎，鴟鵂從而號之何也？以其有異心故。牛豕非鸚鵡之馭，鸚鵡集而乘之何也？以其無異心故。昔趙州訪一庵主，值出生飯，州云：鴉子見人爲甚飛去，主罔然，遂躡前語問州，州對曰：爲我有殺心在，是故疑於人者，人亦疑之，忘於物者，物亦忘之。古人與蛇虎爲伍者，善達此理也。老龐曰：鐵牛不怕獅子吼，恰似木人見花鳥，斯言盡之矣。與周居士書

山堂曰：御下之法，恩不可過，過則驕矣，威不可嚴，嚴則怨矣，欲恩而不驕，威而不怨，恩必施於有功，不可妄加於人，威必加於有罪，不可濫及無辜，故恩雖厚，而人無所驕，威雖嚴，而人無所怨，功或不足稱，而賞之已厚，罪或不足責，而罰之至重，遂使小人故生驕怨矣。與張尚書書

山堂曰：佛祖之道，不過得中，過中則偏邪，天下之事不可極意，極意則禍亂，古今之人，不節不謹，殆至危亡者多矣，然則孰無過歟，惟賢達之士，改之勿吝，是稱爲美。與趙超然書

山堂同韓尚書子蒼萬庵顏首座賢真牧避難于雲門庵韓公因問萬庵近聞被李成兵吏所執何計得脫萬庵曰昨被執縛飢凍連日自度必死矣偶大雪埋屋其所繫屋壁無故崩倒是夜幸脫者百餘人公曰正被執時如何排遣萬庵不對公再詰之萬庵曰此何足道吾輩學道以義為質有死而已何所懼乎公頷之因知前輩涉世禍害死生皆有處斷矣真牧集

山堂退百丈謂韓子蒼曰古之進者有德有命故三請而行一辭而退今之進者惟勢與力知進退而不失其正者可謂賢達矣記聞

山堂謂野庵曰住持存心要公行事不必出於己為是以他為非則愛惡異同不生於心暴慢邪僻之氣無自而入矣幻庵集

山堂曰李商老言妙喜器度凝遠節義過人好學不倦與老夫相從寶峰僅四五載十日不見必遣人致問老夫舉家病腫妙喜過舍躬自煎煮如子弟事父兄禮既歸元首座責之妙喜唯唯受教識者知其大器湛堂嘗曰杲侍者再來人也山僧惜不及見湛堂遷化妙喜墮足千里訪無盡居士於渚宮求塔銘湛堂末後一段光明妙喜之力也日涉記

妙喜杲和尚曰湛堂每獲前賢書帖必焚香開讀或刊之石曰先聖盛德佳名詎忍棄置其雅尚如此故其亡也無十金之聚唯唐宋諸賢墨蹟僅兩竹籠褙子競相誦唱得錢捌拾餘千助茶毘禮可庵集

妙喜曰佛性住大滙行者與地客相毆於口切佛性欲治行者祖超然因言若縱地客摧辱行者非為有失上下名分切恐小人乘時侮慢事不行矣佛性不聽未幾果有莊客殺知事者

可庵集

妙喜曰祖超然住仰山地客盜常住穀超然素嫌地客意欲遣之令庫子行者為彼供狀行者欲保全地客察超然意抑令供起離狀仍返使叫喚不肯供責超然怒行者擅權二人皆決竹篋而已蓋超然不知陰為行者所謀烏乎小人狡猾如此可庵集

妙喜曰愛惡異同人之常情惟賢達高明不被其所轉昔圓悟住雲居高庵退東堂愛圓悟者惡高庵同高庵者異圓悟由是叢林紛紛然有圓悟高庵之黨竊觀二大士播大名于海上非常流可擬情乎昧於輕信小人詔言惑亂聰明遂為識者笑是故宜其亮座主隱山之流為高上之士也智林集

妙喜曰古人見善則遷有過則改率德循行思免無咎所患莫甚於不知其惡所美莫善於好聞其過然豈古之人才智不足識見不明而若是耶誠欲使後世自廣而狹於人者為戒也夫叢林之廣四海之衆非一人所能獨知必資左右耳目思慮乃能盡其義理善其人情苟或尊居自重謹細務忽大體賢者不知不肖者不察事之非不改事或是不從率意狂為無所忌憚此誠禍害之基安得不懼或左右果無可諮詢者猶宜取法於先聖豈可如嚴城堅兵無自而入耶此殆非所謂納百川而成大海也與寶和尚書

妙喜曰諸方舉長老須舉守道而恬退者舉之則志節愈堅所至不被壞常住成就叢林亦主法者救今日之蔽也且詐佞狡猾之徒不知羞耻自能諂奉勢位結托于權貴之門又何須舉與竹庵書

妙喜謂超然居士曰：天下爲公論，不可廢，縱抑之不行，其如公論何？所以叢林舉一有道士，聞見必忻然稱賀，或舉一不誦當者，衆人必憾然嗟嘆，其實無他，以公論行與不行也。烏乎！用此可以卜叢林之盛衰矣。可庵集

妙喜曰：節儉放下，乃修身之基，入道之要。歷觀古人，鮮有不節儉放下者。年來衲子，遊荆楚，賣毛褥，過浙右，求紡絲，得不愧古人乎？

妙喜曰：古德住持，不親常住，一切悉付知事掌管。近代主者，自恃才力有餘，事無大小，皆歸方丈，而知事徒有其虛名耳。嗟乎！苟以一身之資，固欲把攬一院之事，使小人不蒙蔽，紀綱不紊，亂而合，至公之論，不亦難乎？與山堂書

妙喜曰：陽極則陰生，陰極則陽生，盛衰相承，乃天地自然之數。惟豐亨宜乎日中，故曰：日中則昃，月滿則虧。天地盈虧，與時消息，而況於人乎？所以古之人，當其血氣壯盛之時，慮光陰之易往，則朝念夕思，戒謹彌懼，不恣情，不逸慾，惟道是求，遂能全其令聞。若夫墜之以逸慾，敗之以恣情，殆於不可救，方頓足振腕，而追之晚矣。時乎難得而易失。蕪林集

妙喜曰：古人先擇道德，次推才學而進。當時苟非良器，置身于人前者，見聞多薄之，由是衲子自思，砥礪名節而立。比見叢林凋喪，學者不顧道德，少節義，無廉耻，譏淳素爲鄙朴，獎囂浮爲俊敏，是致晚輩識見不明，涉獵抄寫，用資口舌之辯，日滋月浸，遂成澆漓之風。逮語于聖人之道，膏若面牆，此殆不可救也。與于菴書

妙喜曰：昔晦堂作黃龍題名記曰：古之學者，居則巖穴，食則土木，衣則皮草，不係心於聲利，不

籍名於官府，自魏晉齊梁隋唐以來，始剏招提，聚四方學徒，擇賢者，規不肖，使智者導愚迷，由是賓主立上下分矣。夫四海之衆，聚于一寺，當其任者，誠亦難能，要在終其大，捨其小，先其急，後其緩，不爲私計，專利於人，比汲汲爲一身之謀者，實霄壤矣。今黃龍以歷代住持，題其名于石，使後之來者，見而目之，曰：孰道德，孰仁義，孰公於衆，孰利於身，嗚呼！可不懼乎？石刻

張侍郎子詔謂妙喜曰：夫禪林首座之職，乃選賢之位，今諸方不問賢不肖，例以爲僥倖之津途，亦主法者失也。然則像季固難得其人，若擇其履行稍優，才德稍備，識廉耻節義者，居之，與夫險進之徒，亦差勝矣。可庵集

妙喜謂子詔曰：近代主法者，無如真如、菡、善輔、弼、叢林、莫若楊岐。議者謂：慈明真率，作事忽畧，殊無避忌，楊岐忘身事之，惟恐不周，惟慮不辨，雖衝寒冒暑，未嘗急己情容，始自南源，終于興化，僅三十載，總柄綱律，盡慈明之世而後已。如真如者，初自束包行脚，逮于應世，領徒爲法，忘軀，不啻如飢渴者造次顛沛，不避色，無疾言，夏不排窓，冬不附火，一室簡然，凝塵滿案，嘗曰：衲子內無高明遠見，外乏嚴師良友，妙克有成器者，故當時執拗如拳鐵脚，倔強如秀圓通，諸公皆望風而偃，嗟于二老實千載衲子之龜鑑也。可庵記聞

子詔同妙喜萬庵三人，詣前堂本首座寮，問疾。妙喜曰：林下人，身安然後可以學道。萬庵直謂不然，必欲學道，不當更顧其身。妙喜曰：爾這漢，又顛耶？子詔雖重妙喜之言，而終愛萬庵之語爲當。記聞

子詔問妙喜：方今住持何先？妙喜曰：安著禪和子，不過錢穀而已。時萬庵在座，以謂不然，計常

住所得善能撙節浮費用之有道錢穀不勝數矣何足爲慮然當今住持唯得抱道衲子爲先假使住持有智謀能儲十年之糧座下無抱道衲子先聖所謂坐消信施仰愧龍天何補住持子韶曰首座所言極當妙喜回顧萬庵曰一箇箇都似爾萬庵休去已上並見子可庵集

萬庵顏和尚曰妙喜先師初住徑山因夜參持論諸方及曹洞宗旨不已次日音首座謂先師曰夫出世利生素非細事必欲扶振宗教當隨時以救蔽不必取目前之快和尚前日作禪和子持論諸方猶不可妄況今登寶華王座稱善知識耶先師曰夜來一時之說焉首座曰聖賢之學本於天性豈可率然先師首謝之首座猶說之不已萬庵曰先師竄衡陽賢侍者錄貶詞揭示僧堂前衲子如失父母涕泗愁嘆居不遑處音首座詣衆寮白之曰人生禍患不可苟免使妙喜平生如婦人女子陸沈下板絨嘿不言故無今日之事況先師所應爲者不止於是爾等何苦自傷昔慈明瑯琊谷泉大恩結伴參汾陽適當西北用兵遂易衣混火隊中往今徑山衡陽相去不遠道路絕間關山川無險阻要見妙喜復何難乎由是一衆寂然翌日相繼而去

廬山智林集

萬庵曰先師移梅陽衲子間有竊議者音首座曰大凡評論於人當於有過中求無過詎可於無過中求有過夫不察其心而疑其跡誠何以慰叢林公論且妙喜道德才器出於天性立身行事惟義是從其量度固過於人今造物抑之必有道矣安得不知其爲法門異時之福耶聞者自此不復議論矣智林集

音首座謂萬庵曰夫稱善知識當洗濯其心以至公至正接納四來其間有抱道德仁義者雖

有罅隙必須進之其或姦邪險薄者雖有私恩必須遠之使來者各知所守一心同德而叢林安矣

音首座曰古之聖人以無災爲懼乃曰天豈棄不穀乎范文子曰惟聖人能內外無患自非聖人外事必內憂古今賢達知其不能免嘗謹其始爲之自防是故人生稍有憂勞未必不爲終身之福蓋禍患誘辱雖堯舜不可逃況其他乎與妙喜書

音首座謂萬庵曰凡住持者孰不欲建立叢林而鮮克能振者以其忘道德廢仁義捨法度任私情而致然也誠念法門凋喪當正己以下人選賢以佐佑推獎宿德疎遠小人節儉修於身德惠及於人然後所用執侍之人稍近老成者存之便佞者疎之貴無醜惡之謗偏黨之亂也如此則馬祖百丈可侔臨濟德山可逮智林集

萬庵顏和尚曰比見叢林絕無老成之士所至三百五百一人爲主多人爲伴據法王位拈槌擊拂互相欺誑縱有談說不涉典章宜其無老成人也夫出世利生代佛揚化非明心達本行解相應詎敢爲之譬如有人妄號帝王自取誅滅況復法王如何妄竊烏乎去聖逾遠水潦鶴之屬又復縱橫使先聖化門日就淪溺吾欲無言可乎屬庵居無事條陳傷風敗教爲害甚者一二流布叢林俾後生晚進知前輩兢兢業業以荷負大法爲心如冰凌上行劍刃上走非苟名利也知我罪我吾無辭焉智林集

萬庵曰古人上堂先提大法綱要審問大衆學者出來請益遂形問答今人杜撰四句落韻詩喚作釣話一人突出衆前高吟古詩一聯喚作罵陣俗惡俗惡可悲可痛前輩念生死事大對

衆決疑，既以發明，未起生滅心也。

萬庵曰：夫名行尊宿，至院主人陞座，當謙恭叙謝，屈尊就卑，增重之語，下座同首座大衆，請陞于座，庶聞法要多見。近時相尚，舉古人公案，令對衆批判，喚作驗他，切莫萌此心。先聖爲法忘情，同建法化，互相誦唱，令法久住，肯容心生滅，與此惡念耶？禮以謙爲主，宜深思之。

萬庵曰：比見士大夫監司郡守入山，有處次日，令侍者取覆長老，今日特爲某官陞座，此一節猶宜三思。然古來方冊中雖載，皆是士大夫訪尋知識而來，住持人因參次，畧提外護教門，光輝泉石之意，既是家裡人，說家裡兩三句談話，令彼生敬，如郭功輔楊次公訪白雲，蘇東坡黃太史見佛印，便是樣子也，豈是特地妄爲取笑識者。

萬庵曰：古人入室，先令掛牌，各人爲生死事大，踴躍來求，決擇多見。近時無間老病，盡令求納降款，有麝自然香，何用公界驅之，因此妄生節目，賓主不安，主法者當思之。

萬庵曰：少林初祖衣法雙傳，六世衣止不傳，取行解相應，世其家業，祖道愈光，子孫益繁。大鑿之後，石頭馬祖皆嫡孫，應般若多羅懸識，要假兒孫脚下行是也。二大士立言妙語，流布寰區，潛符密證者比比有之。師法既衆，學無專門，曹溪源流派，別爲五方，圓任器水體是同，各擅佳聲，力行己任，等閑垂一言，出一令，網羅學者，叢林鼎沸，非苟然也。由是互相誦唱，顯微闡幽，或抑或揚，佐佑法化，語言無味，如煮木札羹，炊鐵釘飯，與後輩咬嚼，目爲拈古，其頌始自汾陽暨雪竇，宏其音顯其旨，汪洋乎不可涯。後之作者，馳騁雪竇而爲之，不顧道德之奚若，務以文彩煥爛相鮮，爲美使後生晚進不克見古人渾淳大全之旨，烏乎予遊叢林，及見前輩，非古人語。

錄不看，非百丈號令不行，豈特好古，蓋今之人不足法也。望通人達士，知我於言外可矣。

萬庵曰：叢林所至，邪說熾然，乃云戒律不必持，定慧不必習，道德不必修，嗜慾不必去，又引維摩圓覺爲證，贊貪瞋癡，殺盜淫爲梵行，烏乎斯言豈特起叢林今日之害，眞法門萬世之害也。且博地凡夫，貪瞋愛慾，人我無明，念念攀緣，如一鼎之沸，何由清冷。先聖必思大有於此者，遂設戒定慧三學以制之，庶可廻也。今後生晚進，戒律不持，定慧不習，道德不修，專以博學強辯，搖動流俗，牽之莫返，予固所謂斯言乃萬世之害也。惟正因行脚高士，當以生死一著，辨明持誠存信，不爲此輩牽引，乃曰此言不可信，猶鴆毒之羹，蝮飲之水，聞見猶不可，況食之乎。其殺人無疑矣。識者自然遠之矣。 與草堂書

萬菴曰：草堂弟子，惟山堂有古人之風。住黃龍日，知事公幹，必具威儀，詣方丈受曲折，然後備茶湯禮，始終不易。有智恩上座，爲母修冥福，透下金二錢，兩日不尋，聖僧才侍者，因掃地而得之，掛拾遺牌，一衆方知。蓋主法者清淨，所以上行下効也。 清泉集

萬菴曰：比見衲子，好執偏見，不通物情，輕信難廻，愛人佞己，順之則美，逆之則踈，縱有一知半解，返被此惡習所蔽，至白首而無成者多矣。 已上並見于智林集

萬菴節儉，以小參普說當供，衲子間有竊議者，萬菴聞之曰：朝饔暮飯，厭龜糲，人之常情，汝等既念生死事大，而相求於寂莫之瀕，當思道業未辨，去聖時遙，詎可朝夕事貪饕耶。 眞牧集

萬菴天性仁厚，處躬廉約，尋常出示語句，辭簡而義精，博學強記，窮詰道理，不爲苟止而妄隨，與人評論古今，若身履其間，聽者曉然如目覩，衲子嘗曰：終歲參學，不若一日聽師談論，爲得

也。記聞

萬菴謂辯首座曰：圓悟師翁有言：今時禪和子，少節義，勿廉耻，士大夫多薄之，爾異時儻不免做這般蟲豸，常常在繩墨上行，勿趨勢利，佞人顏色，生死禍患，一切任之，卽是不出魔界而入佛界也。法語

辯首座出世住廬山棲賢，常携一筇，穿雙屨，過九江東林，混融老見之，呵曰：師者人之模範也，舉止如此，得不自輕？主體甚滅裂，辯笑曰：人生以適意爲樂，吾何咎焉？援毫書偈而去，偈曰：勿謂棲賢窮，身窮道不窮，草鞋猛似虎，拄杖活如龍，渴飲曹溪水，飢吞栗棘蓬，銅鐵額漢，盡在我山中，混融覽之有愧。月窟集

辯公謂混融曰：象龍不足致雨，畫餅安可充飢，衲子內無實德，外恃華巧，猶如敗漏之船，盛塗丹艸，使偶人覩之，安於陸地，則信然可觀矣，一旦涉江湖，犯風濤，得不危乎？月窟集

辯公曰：所謂長老者，代佛揚化，要在潔己，臨衆行事，當盡其誠，豈可擇利害，自分其心，在我爲之固當，如是，若其成與不成，雖先聖不能必，吾何苟乎？月窟集

辯公曰：佛智裕和尚住西禪，衲子務要整齊，惟水庵和尚賦性冲澹，奉身至薄，昂昂然在稠人中，曾不屑慮，佛智因見之，呵曰：奈何，慕直如此，水菴對曰：其非不好受用，直以貧無可爲之具，若使有錢，亦欲做一兩件皮毛，同入社火，既貧固無如之何，佛智笑之，意其不可強，遂休去。月窟集

佛智謂水菴曰：住持之體有四焉，一道德，二言行，三仁義，四禮法，道德言行乃教之本也，仁義

禮法乃教之末也，無本不能立，無末不能成，先聖見學者不能自治，故建叢林以安之，立住持以統之，然則叢林之尊，非爲住持，四事豐美，非爲學者，皆以佛祖之道故，是以善爲住持者，必先尊道德，守言行，能爲學者，必先存仁義，遵禮法，故住持非學者，不立，學者非住持，不成，住持與學者，猶身之與臂，頭之與足，大小適稱而不悖，乃相須而行也，故曰：學者保於叢林，叢林保於道德，住持人無道德，則叢林將見其廢矣。實錄

佛智曰：駿馬之奔逸，而不敢肆足者，銜轡之禦也，小人之強橫，不敢縱情者，刑法之制也，意識之流浪，不敢攀緣者，覺照之力也，烏乎？學者無覺照，猶駿馬無銜轡，小人無刑法，將何以絕貪慾，治妄想乎？與鄒居士法語

水庵一和尚曰：易言：君子思患而預防之，是故古之人思生死大患，防之以道，遂能經大傳遠，今之人謂求道迂闊，不若求利之切當，由是競習浮華，計較毫末，希目前之事，懷苟且之計，所至莫肯爲周歲之規者，況生死之慮乎？所以學者日鄙，叢林日廢，綱紀日墜，以至凌夷顛沛，殆不可救，嗟乎！可不鑑哉？雙林實錄

水庵曰：昔遊雲居，見高庵夜參，謂至道逕挺不近人情，要須誠心正意，勿事矯飾，偏邪矯飾則近詐，佞偏邪則不中正，與至道皆不合矣，竊思其言近理，乃刻意踐之，逮見佛智先師，始浩然大徹，方得不負平生行脚之志。與月堂書

水庵曰：月堂住持，所至以行道爲己任，不發化主，不事登謁，每歲食指隨常住所得用之，衲子有志充化導者，多却之，或曰：佛戒比丘持鉢以資身命，師何拒之弗容？月堂曰：我佛在日則可，

恐今日爲之，必有好利者，而至於自鬻矣。因思月堂防微，杜漸深切，著明稱實之言，今猶在耳。以今日觀之，又豈止自鬻而已矣。法語

水庵謂侍郎尤延之曰：昔大愚慈明、谷泉、瑯琊、結伴參汾陽，河東苦寒，衆人憚之，惟慈明志在於道，曉夕不怠，夜座欲睡，引錫自刺，嘆曰：古人爲生死事大，不食不寢，我何人哉！而縱荒逸，生無益於時，死無聞於後，是自棄也。一旦辭歸，汾陽嘆曰：楚圓今去，吾道東矣。西湖記聞

水庵曰：古德住持，率已行道，未嘗苟簡自恣。昔汾陽每嘆，像季澆漓，學者難化。慈明曰：甚易，所患主法者不能善導耳。汾陽曰：古人淳誠，尙且三二十年，方得成辨。慈明曰：此非聖哲之論。善造道者，千日之功，或謂慈明妄誕，不聽。會有梵僧託夢汾陽，勉令法施，啓迪後來。不三年，果有六人成道者。汾陽嘗有頌曰：胡僧金錫光，爲法到汾陽。六人成大器，故我爲敷揚。西湖記聞

投子清和尙，圖水庵像，求贊曰：嗣清禪人，孤硬無敵，晨昏一齋，脇不至席，深入禪定，離出入息，名達九重，談禪選德，龍顏大悅，賜以金帛，力辭者三。上乃嘉嘆，真道人也。草木騰煥，傳予陋質，炷香請贊，是所謂青出於藍，而青於藍者也。見圖像

水庵曰：佛智先師言，東山演祖，嘗謂歌龍學曰：山僧有圓悟，如魚之有水，鳥之有羽，故丞相紫嵩居士贊曰：師資相可，希遇一時，始終之分，誰能間之。紫嵩居士可謂知言矣。比見諸方尊宿，懷心術以御衲子，衲子挾勢利以事尊宿，主賓交利，上下欺侮，安得法門之興叢林之盛乎。與梅山潤書

水庵曰：動人以言，惟要深切，言不深切，所感必淺。人誰肯懷，昔白雲師祖，送師翁住四面，叮嚀

曰：祖道凌遲，危如累卵，母恣荒逸，虛喪光陰，復敗至德，當寬容量度利物存衆，提持此事，報佛祖恩。當時聞者，孰不感動，爾來召對宸庭，誠爲法門之幸。切宜下身尊道，以利濟爲心，不可矜己自伐，從上先哲謙柔敬畏，保身全德，不以勢位爲榮，遂能清振一時，美流萬世，予慮光景不長，無復面會，故此切囑。見投子書

水庵少個儻，有大志，尙氣節，不事浮靡，不循細檢，胸次岸谷，徇身以義，雖禍害交前，不見有頹穉之色。住持八院，經歷四郡，所至兢兢業業，以行道建立爲心。淳熙伍年，退西湖淨慈，有偈曰：六年灑掃皇都寺，瓦礫翻成釋梵宮。今日功成歸去也，杖頭八面起清風。士庶遮留不止，小舟至嘉禾天寧，未幾示疾，別衆告終。行實

月堂昌和尙曰：昔大智禪師，慮末世比丘驕惰，特製規矩以防之，隨其器能，各設攸司。主居丈室，衆居通堂，列十局頭首之嚴肅，如官府居上者，提其大綱，在下者理其衆目，使上下相承，如身之使臂，臂之使指，莫不率從。是以前輩遵承，翼戴拳拳奉行者，以先聖之遺風未泯故也。比見叢林衰替，學者貴通才，賤守節，尙浮華，薄真素，日滋月侵，漸入澆漓，始則儉安，一時及玩習，既久，謂其理之當然，不謂之非義，不謂之非理。在上者，憚憚焉畏其下，在下者，賸賸焉伺其上。平居則甘言屈體，以相媚悅，得間則狠心詭計，以相屠戮。成者爲賢，敗者爲愚，不復問尊卑之序，是非之理，彼既爲之，此則効之，下既言之，上則從之，前既行之，後則襲之，烏乎非彥聖之師，乘願力積百年之功，其蔽固則莫能革矣。與舜和尚書

月堂住淨慈最久，或謂和尙行道，經年門下未聞有弟子，得不辜妙湛乎？月堂不對，他日再言

之月堂曰：子不聞昔人種瓜而愛甚者，盛夏之日，方中灌之，瓜不旋踵而淤敗，何也？其愛之非不勤，然灌之不以時適，所以敗之也。諸方老宿，衲提挈衲子，不觀其道業內充，才器宏遠，止欲速其爲人，逮審其道德，則淫污，察其言行，則乖戾，謂其公正，則邪佞，得非愛之過其分乎？是正由日中之灌瓜也。予深恐識者笑，固不爲也。北山記聞

月堂曰：黃龍居積翠，因病三月不出，真淨宵夜懇禱，以至燃頂煉臂，仰祈陰相，黃龍聞之，責曰：生死固吾分也，爾參禪不達理，若是真淨從容對曰：叢林可無克文，不可無和尚，識者謂真淨敬師重法，其誠至此，他日必成大器。北山記聞

月堂曰：黃太史魯直嘗言：黃龍南禪師，器量深厚，不爲事物所遷，平生無矯飾，門弟子有終身不見其喜怒者，雖走使致力之輩，一以誠待之，故能不動聲氣而起慈明之道，非苟然也。一本見于黃龍石刻

月堂曰：建炎己酉上巳日，鐘相叛於豐陽，文殊導禪師厄於難，賊勢既盛，其徒逸去，師曰：禍可避乎？卽毅然處于丈室，竟爲賊所害，無垢居士跋其法語曰：夫愛生畏死，人之常情，惟至人悟其本不生，雖生而無所愛，達其未嘗滅，雖死而無所畏，故能臨死生禍患而不移，其所守師其人乎？以師道德節義，足以教化叢林，垂範後世，師名正導眉州丹稜人，佛鑑之詞也。一本見于惠大師之記聞，蓋惠乃鐘相之小女也矣

心聞責和尚曰：教外別傳之道，至簡至要，初無它說，前輩行之不疑，守之不易，天禧間，雪竇以辯博之才，美意變弄，求新琢巧，繼汾陽爲頌古，籠絡當世學者，宗風由此一變矣，逮宣政間，圓

悟又出己意，離之爲碧巖集，彼時邁古淳全之士，如寧道者，死心靈源，佛鑑諸老，皆莫能廻其說，於是新進後生，珍重其語，朝誦暮習，謂之至學，莫有悟其非者，痛哉！學者之心術壞矣，紹興初，佛日入闕，見學者牽之不返，日馳月驚，浸漬成蔽，卽碎其板，關其說，以至祛迷援溺，剔繁撥劇，摧邪顯正，特然而振之，衲子稍知其非而不復慕，然非佛日高明遠見，乘悲願力，救末法之蔽，則叢林大有可畏者矣。與張子韶書

心聞曰：衲子因禪致病者多，有病在耳目者，以障眉努目，側耳點頭爲禪，有病在口舌者，以顛言倒語，胡喝亂喝爲禪，有病在手足者，以進前退後，指東劃西爲禪，有病在心腹者，以窮玄究妙，超情離見爲禪，據實而論，無非是病，惟本色宗師，明察機微，目擊而知，其會不會，入門而辨，其到不到，然後用一錐一箭，脫其廉纖，攻其搭滯，驗其真假，定其虛實，而不守一方便，味乎變通，俾終踏於安樂無事之境，而後已矣。語錄

心聞曰：古云：千人之秀曰英，萬人之英曰傑，衲子有智行，聞于叢林者，豈非近英傑之士耶？但能勤而參究，去虛取實，各得其用，則院無大小，衆無多寡，皆從其化矣。昔風穴之白丁，藥山之牛欄，常公之大梅，慈明之荆楚，當此之時，悠悠之徒，若以位貌相求，必見而詒之，一旦據師席，登華座，萬指圍遶，發輝佛祖叔世之光明，叢林孰不望風而靡，矧前輩皆負環瑋之材，英傑之氣，尙能區區於未遇之際，含耻忍垢，混世同波，而若是，況降茲者歟？鳥乎古猶今也，此猶彼也，若必待藥山風穴而師之，千載一遇也，若必待大梅慈明而友之，百世一出也，蓋事有從微而至，著功有積小而成大，未見不學而有成，不修而先達者，若悟此理，師可求，友可擇，道可學，德

可修，則天下之事何施而不可。古云：知人誠難，聖人所病，況其他乎。與竹庵書
拙庵佛照光和尚，初參雪堂於薦福，有相者一見而器之，謂雪堂曰：衆中光上座，頭顱方正，廣
額豐頤，七處平滿，他日必爲帝王師。孝宗皇帝淳熙初，召對稱旨，留內觀堂七宿，待遇優異，
度越前來，賜佛照之名，聞于天下。記聞

拙庵謂虞尹文丞相曰：大道洞然，本無愚智，譬如伊呂起於耕漁，爲帝王師，詎可以智愚階級
而能擬哉。雖然，非大丈夫，其孰能與焉。廣錄

拙庵曰：野庵常言，黃龍南禪師，寬厚忠信，恭而慈愛，量度凝遠，博學洽聞，嘗同雲峰悅遊湖湘，
避雨樹下，悅笑居相對，南獨危坐，悅瞋目視之曰：佛祖妙道，不是三家村古廟裡土地作死模
樣，南稽首謝之，危坐愈甚，故黃太史魯直稱之曰：南公動靜不忘恭敬，真叢林主也。幻庵集

拙庵曰：率身臨衆，要以智遣妄，除情須先覺，背覺合塵，則心蒙蔽矣。智愚不分，則事紊亂矣。
靈覺寺書

拙庵曰：佛鑑住太平，高庵充維那，高庵齒少氣豪，下視諸方，少有其意者，一日齋時鳴鐘，見
行者別器置食于佛鑑前，高庵出堂厲聲曰：五百僧善知識，作這般去就，何以範模後學。佛鑑
如不聞見，逮下堂詢之，乃水盞菜，蓋佛鑑素有脾疾，不食油，故高庵有愧，詣方丈告退。佛鑑曰：
維那所言甚當，緣慧勳病乃耳。嘗聞聖人言，以理通諸礙，所食既不優於衆，遂不疑也。維那志
氣明遠，他日當柱石宗門，幸勿以此芥蒂，逮佛鑑遷智海，高庵過龍門，後爲佛眼之嗣。

拙庵曰：大凡與官員論道，酬酢須是剗去知解，勿令他坐在窠窟裡，直要單明，向上一著子，妙

喜先師嘗言：士大夫相見，有問卽對，無問卽不可，又須是箇中人，始得此語，有補於時，不傷住
持之體，切宜思之。與興化普庵書

拙庵曰：地之美者善養物，主之仁者善養士，今稱住持者多，不以衆人爲心，急己所欲，惡聞善
言，好蔽過惡，恣行邪行，徒快一時之意，返被小人就其好惡取之，則住持之道，安得不危乎。
與洪老書

拙庵謂野庵曰：丞相紫嵩居士言，妙喜先師平生以道德節義勇敢爲先，可親不可疎，可近不
可迫，可殺不可辱，居處不淫，飲食不源，臨生死禍患視之如無，正所謂于將鏖鎬，難與爭鋒，但
虞傷缺耳。後如紫嵩之言。幻庵記聞

拙庵曰：野庵住持通人情之始終，明叢林之大體，嘗謂予言：爲一方主者，須擇有志行，衲子相
與毗贊，猶髮之有梳，面之有鑑，則利病好醜不可得而隱矣。如慈明得楊岐，馬祖得百丈，以水
投水，莫之逆也。幻庵集

拙庵曰：末學膚受，徒貴耳賤目，終莫能究其奧妙，故曰：山不厭高，中有重巒積翠，海不厭深，內
有四溟九淵，欲究大道，要在窮其高深，然後可以照燭幽微，應變不窮矣。與觀老書

拙庵謂尤侍郎曰：聖賢之意，含緩而理明，優遊而事顯，所用之事，不期以速成，而許以持久，不
許以必進，而許以庶幾，用是推聖賢之意，故能亘萬世而持之無過失者，乃耳。幻庵集

侍郎尤公曰：祖師以前無住持事，其後應世行道，迫不得已，然居則蓬蓽，取蔽風雨，食則麤糲，
取充飢餒，辛苦憔悴，有不堪其憂，而王公大人，至有願見而不可得者，故其所建立，皆磊磊落落

落驚天動地，後世不然。高堂廣廈，美衣豐食，願指如意，於是波旬之徒，始洋洋然動其心。越趨權勢，不苟利養。嘗曰：萬事不可佚豫爲，不可奢態持。蓋有利於時而便於物者，有其過而無其功者，若縱之奢佚，則不濟矣。不肖佩服斯言，遂爲終身之戒。老師昨者，遭遇主上，留宿觀堂，實爲佛法之幸。切冀不倦悲願，使進善之途開明，任衆道益大。庶幾後生晚輩，不謀近習，各懷遠圖，豈不爲叢林之利濟乎。然侍者記聞

密庵傑和尚曰：叢林興衰在於禮法，學者美惡在乎俗習。使古之人巢居穴處，澗飲木食，行之於今時，則不可也。使今之人豐衣文采，飯粳嚼肥，行於古之時，亦不可也。安有它哉？習不習故，夫人朝夕見者爲常，必謂天下事正宜如此。一旦驅之，就彼去此，非獨生疑而不信，將恐亦不從矣。用是觀之，人情安於所習，駭其未見，是其常情，又何足怪。與施可諫書

密庵謂悟首座曰：叢林中，惟浙人輕儒少立，子之才器宏大，量度淵容，志尙端確，加以見地穩密，他日未易言，但自韜晦無露，圭角毀方，瓦合持以中道，勿爲勢利少枉，卽是出塵勞，而作佛事也。與笑庵書

密庵曰：應庵先師嘗言，賢不肖相返，不得不擇。賢者持道德仁義，以立身，不肖者專勢利詐佞，

以用事，賢者得志，必行其所學，不肖者處位，多擅私心，妬賢嫉能，嗜慾苟財，靡所不至，是故得

賢則叢林興，用不肖則廢，有一于斯，必不能安靜。見于岳和尚書

密庵曰：住持有三莫，事繁莫懼，無事莫尋，是非莫辨，住持人達此三事，則不被外物所惑矣。

警侍者記聞

密庵曰：衲子履行頹邪，素有不善之迹者，叢林互知，此不足疾，惟衆人謂之賢，而內實不肖者，

誠可疾也。與善慧書

密庵謂水庵曰：人有毀辱當順受之，詎可輕聽聲言，妄陳管見，大率便佞有類，邪巧多方，懷險詭者，好逞私心，起猜忌者，偏廢公議，蓋此輩趨尙狹促，所見暗短，固以自異爲不群，以沮議爲出衆，然既知我所用終是，而毀謗固自在彼，久自明，不須別白，亦不必主我之是，而訐觸於人，則庶可以爲林下人也。與水庵書

自得輝和尚曰：大凡衲子誠而尙正，雖愚亦可用，佞而懷邪，雖智終爲害。大率林下人操心不正，雖有才能，而終不可立矣。見于簡堂書

自得曰：大智禪師，特勸清規，扶救末法，比丘不正之蔽，由是前賢遵承，拳拳奉行，有教化，有條理，有始終，紹興之末，叢林尙有老成者，能守典刑，不敢斯須而去。左右近年已來，失其宗緒，綱不綱，紀不紀，雖有網羅安得而正，諸故曰：舉一綱則衆目張，弛一機則萬事壞，殆乎綱紀不振，叢林不興，惟古人體本以正末，但憂法度之不嚴，不憂學者之失所，其所正在於公，今諸方主者，以私混公，以末正本，上者苟利不以道，下者賊利不以義，上下謬亂，賓主混淆，安得衲子向

正而叢林之興乎。與尤侍郎書

自得曰：良玉未剖，瓦石無異，名驥未馳，駑駘相雜，逮其剖而瑩之，馳而試之，則玉石駑驥分矣。夫衲子之賢德而未用也，混於稠人中，竟何辨別？要在高明之士以公論舉之，任以職事，驗以才能，責以成務，則與庸流迥然不同矣。與或庵書

或庵體和尚初參此庵，元布袋於天台護國因上堂，舉龐馬遷佛頌，至此是遷佛場之句，此庵喝之，或庵大悟，有投機頌曰：商量極處見題目，途路窮邊入試場，拈起毫端風雨快，這回不作探花郎。似此匿迹天台，丞相錢公象先慕其為人，乃以天封招提，勉令應世，或庵聞之曰：我不解懸羊頭賣狗肉也，即宵遁去。

乾道初，瞎堂住國清，因見或庵讚圓通像，曰：不依本分，惱亂衆生，瞻之仰之，有眼如盲，長安風月貫今昔，那箇男兒摸壁行。瞎堂驚喜曰：不謂此庵有此兒，即逼索之，遂得於江心，固於稠人中，請充第一座。天台野錄

或庵乾道初，翻然訪瞎堂于虎丘，姑蘇道俗聞其高風，即詣郡舉請住城中覺報，或庵聞之曰：此庵先師囑我，他日逢老壽，止，今若合符契矣，遂忻然應命，蓋覺報舊名老壽庵也。虎丘記聞或庵入院後，施主請小參，曰：道常然而不淪，事有蔽而必變，昔江西南嶽諸祖，若稽古爲訓考，其當否，持以中道，務合人心，以悟爲則，所以素風凌然，逮今未泯，若約衲僧門下，言前薦得，屈我宗風，句下分明，沈埋佛祖，雖然如是，行到水窮處，坐看雲起時，由是緇素喜所未聞，歸者如市。語錄異此

或庵既領住持，士庶翕然來歸，衲子傳至虎丘，瞎堂曰：這箇山蠻杜拗子，放拍盲禪，治備那一隊野狐精，或庵聞之以爲僞，食曰：山蠻杜拗得能憎，領衆匡徒，似不曾越格倒拈，苜蓿柄拍盲禪，治野狐僧，瞎堂笑而已。記聞

或庵謂侍郎曾公遠曰：學道之要，如衡石之定物，持其平而已，偏重可乎？推前近後，其偏一也，明此可學道矣。見于曹公書

或庵曰：道德乃叢林之本，衲子乃道德之本，住持人棄厭衲子，是忘道德也，道德既忘，將何以修教化，整叢林，誘來學，古人體本以正末，憂道德之不行，不憂叢林之失所，故曰：叢林保於衲子，衲子保於道德，住持無道德，則叢林廢矣。見于簡堂書

或庵曰：夫爲善知識，要在知賢，不在自賢，故傷賢者愚，蔽賢者暗，嫉賢者短，得一身之榮，不如得一世之名，得一世之名，不如得一賢衲子，使後學有師，叢林有主也。與四極書或庵遷焦山之三載，寔淳熙六年八月四日也，先示微恙，即手書并硯一隻，別郡守侍郎曾公遠，至中夜化去，公以偈悼之曰：翩翩隻履逐西風，一物渾無布袋中，留下陶泓將底用，老夫無筆判虛空。行狀

瞎堂遠和尚曰：學道之士，要先正其心，然後可以正己正物，其心既正，則萬物定矣，未聞心治而身亂者，佛祖之教，由內及外，自近至遠，聲色惑於外，四肢之疾也，妄情發於內，心腹之疾也，未見心正而不能治物，身正而不能化人，蓋一心爲根本，萬物爲枝葉，根本壯實，枝葉榮茂，根本枯悴，枝葉夭折，善學道者，先治內以敵外，不貪外以害內，故導物要在清心，正人固先正己。

心正己立而萬物不從化者未知有也。與顏侍郎書

瞎堂謂或庵曰：人之才器自有大小，誠不可教，故褚小者不可懷大，綆短者不可汲深，鴟鵂夜撮蚤，察秋毫，晝出瞑目而不見，丘山蓋分定也。昔靜南堂傳東山之道，顯悟幽奧，深切著明，逮應世住持，所至不振，圍悟先師歸蜀，同範和尚訪之大隋，見靜率畧凡百弛廢，先師終不問回至中路，範曰：靜與公爲同參道友，無一言啓迪之何也。先師曰：應世臨乘，要在法令爲先，法令之行在其智能，能與不能以其素分，豈可教也。範頷之。虎丘記聞

簡堂機和尚住番陽筓山，僅二十載，羹藜飯黍，若絕意於榮達，嘗下山，聞路傍哀泣聲，簡堂惻然逮詢之，一家寒疾僅亡兩口，貧無斂具，特就市貨棺葬之，鄉人感嘆不已。侍郎李公椿年謂士大夫曰：吾鄉機老有道，衲子也以慈惠及物，筓山安能久處乎。會樞密汪明遠宣撫諸路，達于九江，郡守林公叔達虛圓通法席迎之，簡堂問命，乃曰：吾道之行矣，即忻然曳杖而來，登座說法，曰：圓通不開生藥鋪，單單只賣死貓頭，不知那箇無思算，喫著通身令汗流，緇素驚異，法席因茲大振。懶庵集

簡堂曰：古者修身治心，則與人共其道，與事立業，則與人共其功，道成功著，則與人共其名，所以道無不明，功無不成，名無不榮，今人則不然，專己之道，惟恐人之勝於己，又不能從善務義，以自廣也，專己之功，不欲他人有之，又不能任賢與能，以自大也，是故道不免於蔽，功不免於損，名不免於辱，此三者乃古今學者之大分也。

簡堂曰：學道猶如種樹，方榮而伐之，可以給樵薪，將盛而伐之，可以作榱桷，稍壯而伐之，可以

充榱桷，老大而伐之，可以爲椽棟，得非取功遠而其利大乎。所以古之人，惟其道固大而不狹，其志遠奧而不近，其言崇高而不卑，雖適時齟齬窮飢寒殆亡，丘壑以其遺風餘烈，亘百千年，後人猶以爲法而傳之，鄉使狹道苟容，邇志求合，卑言事勢，其利止榮於一身，安有餘澤溥及于後世哉。與李侍郎書

簡堂熙淳伍年四月，自天台景星岩再赴隱靜，給事吳公帶佚老子休休堂和淵明詩十三篇送行，其一曰：我自歸林下，已與世相疎，賴有善知識，時能過吾廬，伴我說道話，愛我讀佛書，既爲岩上去，我亦爲膏車，便欲展我鉢，隨師同飯蔬，脫此塵俗累，長與巖石居，此巖固高矣，卓出山海圖，若比吾師高，此岩還不如。二我生山窟裡，四面是屏顏，有巖號景星，欲到知幾年，今始信奇絕，一覽小衆山，更得師爲主，二妙未易言。三我家湖山上，觸目是林丘，若比茲山秀，培塿固難儔，雲山千里見，石泉四時流，我今纔一到，已勝五湖遊。四我年七十五，木末掛殘陽，縱使身未逝，亦能豈久長，尙冀林間住，與師共末光，孤雲俄暫出，遠近駭蒼黃。五愛山端有素，拘俗亦可憐，昨守當塗郡，不識隱靜山，美師來又去，愧我復何言，尙期無久住，歸送我殘年。六師心如死灰，形亦似槁木，胡爲衲子歸，若響答空谷，願我塵垢身，正待醍醐浴，更願張佛燈，爲我代明燭。七扶疎巖上樹，入夏總成陰，幾年荆棘地，一旦成叢林，我方與衲子，共聽海潮音，人生多聚散，離別忽驚心。八我與師來往，歲月雖不長，相看成二老，風流亦異常，師宴坐岩上，我方爲聚糧，儻師能早歸，此樂猶未央。九紛紛學禪者，腰包競奔走，才能說葛藤，痴意便自負，求其道德尊，如師蓋稀有，願傳上乘人，永光臨濟後。十吾邑多緇徒，浩浩若雲海，大機久已亡，賴有小

機在仍更與一岑純全兩無悔堂堂二者禪海內共期待(十一)古無住持事但只傳法旨有能悟色空便可超生死庸僧昧本來豈識西歸履買帖坐禪床佛法將何恃(十二)僧中有高僧士亦有高士我雖不爲高心粗能知止師是箇中人特患不爲爾何幸我與師俱是隣家子(十三)師本窮和尚我亦窮秀才忍窮俱已徹老肯不歸來今師雖暫別泉石莫相猜應緣聊復爾師豈有心哉 景心石刻

給事吳公謂簡堂曰古人灰心泯智於千巖萬岳之間澗飲木食若絕意於功名而一旦奉紫泥之詔輟光匿跡於負春賤役之下初無念於榮達而卒當傳統之列故得之於無心則其道大其德宏計之於有求則其名卑其志狹惟師度量凝遠繼踵古人乃能棲遲於筓山一十七年遂成叢林良器今之衲子內無所守外逐紛華少遠謀無大體故不能扶助宗教所以不逮師遠矣 高侍者記聞

簡堂曰夫人常情罕能無惑大抵蔽於所信阻於所疑忽於所輕溺於所愛信既偏則聽言不考其實遂有過當之言疑既甚則雖實而不聽其言遂有失實之聽輕其人則遺其可重之事愛其事則存其可棄之人斯皆苟縱私懷不稽道理遂忘佛祖之道失叢林之心故常情之所輕乃聖賢之所重古德云謀遠者先驗其近務大者必謹於微將在博採而審用其中固不在慕高而好異也 與吳給事書

簡堂清明坦夷慈惠及物衲子稍有誣誤蔽護保惜以成其德嘗言人誰無過在改之爲美住鄱陽筓山日適值隆冬雨雪連作餽粥不繼師如不聞見故有頌曰衲轍蒙頭燒楮楮不知身

在寂寥中平生以道自適不急於榮名赴廬山圓通請日拄杖草履而已見者色莊意解九江郡守林公叔達目之曰此佛法中津梁也由是名重四方其去就真得前輩體格歿之日雖走使致力爲之涕下

禪門寶訓集 下 終

國譯 緇門寶藏集

解題

緇門寶藏集三卷一冊は、敕諭定慧明光佛頂國師の撰述にして、國師の滅後、寛文十三年春、門人惠詢初めて版に鏤めて世に流布せしが、寶永の頃、版木烏有に歸したりしを、安永八年冬、良哉再び刊行して叢林に頒ちたり。

本書は三卷二十二章より成り、始めは信心を決し、生死を怖るゝを以て本と爲し、終りは履踐を勤め、休歇の地に到るを以て極と爲す。而して中間は師友を擇び、性心を明め以て向上末後、邪正寶主の句に到るまで部類を分ちて該載し、又間々評論を加へて之を折衷せり。叢林學徒の指針、之れに過ぎたるはなし。

國師名は文守、字は一絲、岩倉具堯の第三子なり。十四歳にして相國寺の雪岑梵岑和尚に侍して得度し、後に泉州堺に趣き、澤庵宗彭和尚に參す。十九歳にして横尾の賢俊律師に會して、毘尼を講習し、又泉州に歸りて澤庵和尚に參す。寛永の初め一庵を洛西西ヶ岡に結びて閑夢と扁し、禪燕を樂む。此頃近衛信尋公屢々庵居を訪ねて禪談に耽る。偶々後水尾上皇師の道僧を聞き、召して法要を咨問

したまひ、大に皇情に愜ふ。尋で丹波の九路峯下に一庵を創して桐江庵と稱し、二三の衲子と共に拈坐して古道を激稱す。時に鳥丸光廣桐江庵に抵りて参扣、狗子の話に参す。師一日齋後、庵前の大樹下を過り、忽然として大悟、爾來應接常に異なり、機に觸るゝ者なし。時に後水尾上皇近臣に命じて洛北西加茂村に靈源寺を創し、師をして開山第一世たらしめ、又詔して丹波の桐江庵を鼎新して大梅山法常寺と號し、同じく第一世たらしむ。尋で江州永源寺の請を受け、愚堂、雲居の老宿と商量往來し、遂に愚堂の法嗣となる。正保二年病に罹り醫藥效ありしも、翌年再び發して終に癒えず、其年三月十九日案に靠つて支坐す、午時に至り右脇に臥して寂す。世壽三十九、法臘二十、全身を瑞石の後山に葬り、遺髪を法常寺に收む、塔を淵黙と曰ふ。延寶六年春、救して定慧明光佛頂國師と賜ふ。滅後、門人其の遺稿を蒐輯して語錄五卷を編し、今猶ほ世に流布す。

國譯重刊緇門寶藏集叙

道本と言なし、言に由つて道を顯す。是の故に漫録あり、寶訓あり、筆語あり、武庫あり。伏して惟れば、一絲守和尚、初め洛の西岡に隠れ、後丹山に入りて、杳として蹤跡を絶す。然れども湖海の緇徒、藹足して風に走り、樹に就いて芽を縛する者、其の幾ばくと云ふことを知らず。終に名、九重に達して、法常、靈源の二刹を開榛し、特に徽號を賜ふて、定慧明光佛頂國師と曰ふ。住庵の古標を示すの暇、佛祖の遺言往行を招撫して問々品藻を加へて、名けて緇門寶藏集と曰ふ。軒かに知る、昏衢の慧炬、病家の良藥なることを。翅だ今時を利するのみにあらず、抑々亦化を後昆に垂るゝ者歟。善、因つて加ること蔑し焉。嗚呼寶永の頃、池魚の患に罹りて、板、鳥有と成る。世に行はんと欲すれども、未だ由ならくのみ。邇日、一僧あり、重ねて梓に鑿めて、之が弘通を圖る。其の功を傷すに臨んで、叙を予に請ふ。確辭すれども可かず、言に譏劣を忘れて、莠語以て卷首に題す。參玄の徒、行餘力

①漫録は次第種類を別たすして、次ぎ次ぎにものせる釋家の語録、又は旅行の徒然草、鳩巢の駁難雜話、長明の方丈記、枕の草紙の類、皆漫録なり。
②緇徒は僧徒、或は僧侶なり。
③九重は朝廷の意なり。
④招撫はひろひ採るなり。
⑤品藻は批評の言葉なり。
⑥軒かには明かになり。
⑦昏衢の慧炬は暗夜の燈に同じ。
⑧池魚の患は類焼の災なり、風

あるときは、且つ繙き且つ閲して、拳々服膺せば、一字々々一言々々、果して國師の骨髓なることを知らん。此れ又言に由つて道を顯す者にあらずや。然るときは寶藏を豁開して、家珍を運出すること斯に在り。然りと雖も、玉匙金鑰、今何人の手裡にか歸す、道ふこと勿れ、新羅は海東に在りと。

安永第八星躔己亥孟冬日

前華嶽良哉元明謹撰

俗通に曰く、城門火災を失すれば、殃、池魚に及ぶと。
①其功を僞すは「書經」にあり、僞は顯はすの意なり。
②勸劣は淺劣なり。

國譯繙門寶藏集卷之上

桐江庵主 文守 編輯

一 學道は須らく決定信を生ずることを要すべし

佛曰く、「信は道元功德の母たり、一切の諸善法を長養し、疑網を斷除し、愛流を出で、無上道を開示す。」又云く、「信は能く智功德を増長し、信は能く必ず如來地に到る。」と。

經に曰く、「信は能く永く煩惱の本を斷す。」又云く、「信は能く速かに解脱門を證す。」と。

高峯妙和尚曰く、「從上若しくは佛、若しくは祖、彼岸に超登し、大法輪を轉じ、攝物利生、此の一個の信の字の中に由つて流出せすと云ふこと莫し。昔、善星比丘あり、佛に侍ること二十年、左右を離れず、蓋し謂く、此の一箇の信の字なし、聖道を成せず、生ながら泥犁に陥る。」と。

華嚴觀に曰く、「信ありて解なくば、無明を増長し、解ありて信なくば、邪見を増長す。信解圓通、方に行の本たり云云。」又云く、「信ありて法界を信せざれば、信是れ邪なり。」

①疑網は疑問、或は疑惑なり。
②無上道は無上菩提と云ふが如く、見性悟了の意なり。
③彼岸は菩提、涅槃を得る事にて、大悟徹底の意なり。
④泥犁は耕牛を謂ふ。

大惠禪師曰く、「正信を具し、正志を立す。此れ乃ち成佛作祖の基本なり。」^①舍利弗曰く、「信を以て得入す、己が智分に非ず。」

●智度論に云く、「佛言く、「若し人信あれば、能く我が大法海の中に入りて能く沙門の果を得て、空しく剃頭染衣せず。若し信なければ、是の人、我が大法海に入ること能はず。枯樹の華實を生ぜざるが如く、沙門の果を得ず。剃頭染衣して、種々の經を讀み、難を能くし答を能くすと雖も、佛法の中に於て、空しく所得なし。」是の義を以ての故に、佛法の初に在り。」と、善は信根に依るが故に、

經に云く、「佛法の大海は、信を能入と爲す。」と。

二 學道は須らく生死の大事を信得することを要すべし

無業國師曰く、「只這の口食身衣、盡く是れ賢を欺き聖を罔して、求徳將來、他心惠眼、之れを観る、膿血を喫するが如くに、一般なり。總に須らく他に償ふて、始めて得べし、云云。」又曰く、「臨終の時、一毫も凡聖の情量盡きず、纖塵も思念未だ忘れずんば、念に隨ひ生を受けて、輕重の五陰、驢胎馬腹の裏に向つて、託質泥犂、^②饅湯裏に煮煉せらるること、一徧了らん。從前の記持憶想、見

①舍利弗は梵語 Śālistambha にして、佛、十大弟子の一なり、其眼舍利弗に似、又母を舍利と云ふ故に、舍利弗と云ふ、佛は梵語多羅 (Dhara) にして子の意なり、佛弟子中智惠第一を以て稱せらる。
②智度論は印度龍樹の造、姚秦の羅什三藏これを漢譯す、大品般若經九十品の註釋なれども、解説精密多面に互り、あらゆる當時の思想傳説を網羅し、一種の百科辭典の體を爲す、一部百卷より成る。
③一般なりは相似たり、或は相等しの意なり。
④饅湯裏は煮湯也。

解智慧、都盧一時に失却して、依前として再び、^①蟻蚊虻と爲る。」

如今、學佛の徒、日に學び月に積んで、功を爲す者、記持憶想、見解智慧の八字を出でず。這箇、已に一時に失却するが如し、畢竟何を以てか佗の生死に敵せん。眞正の學人、豈に著忙せざることを得んや。

大惠禪師曰く、「某、未だ睡著せざる時の如し。佛の誡し玉ふところの者は、依つて之を行ふ、佛の訶し玉ふところの者は、敢て違犯せず。從前、師に依る、及び自ら工夫を做す、零碎たる所得の者の懼々たる時は都べて受用することを得。牀に上りて半惺半覺の時に及んで、已に主宰と作ることを得ず。夢に金寶を得と見ても、夢中に歡喜すること限なし。夢に人に刀杖を以て相逼られ、及び諸の惡境界を見ては、^②則ち夢中に、^③恐怖惶恐す。自ら念ふ、此の身尙は存す、只是れ睡著すれば、已に、^④主宰と作ることを得ず。況んや地水火風分散して、衆苦熾然たらんに、如何が回換せらるることを得ん。這裏に到つて方に始めて著忙す。」

①蟻蚊は「けらむし」なり。
②恐怖惶恐は怖るゝなり。
③主宰は我の意なり。

妙喜翁、二十餘歳より三十六に甫るまで、此の大疑を懐く。一日忽ち圓悟一言の下に在りて、始めて平穩を得。蓋し他の上梢、只生死を怕るゝの心切なるが爲に、又實に生死に敵するの法を明めざるときは、自休し能はざるのみ。今の學者、初より深く生死を怕るゝの正念なく、只だ麤心淺志を

將て參禪學道、纔かに小見小解を得て、以て萬足と爲す。嗚呼。古今の異、是の岐に因る、宜なるかな矣哉。

人天寶鑑に云く、「湖南の雲蓋山智禪師夜丈室に坐す。忽ち焦灼の氣、枷鎖の聲を聞く。即いて之を見れば、廻ち火枷を荷ふ者あり、火猶ほ起滅して停らず、枷尾、門闔に依る。智驚いて問うて曰く、「汝をば誰とか爲す、苦、斯の極に至るや。」枷を荷ふ者對へて曰く、「前住當山守願也。不合に互に檀越の僧に供する物を將て、僧堂を造る故に、此の苦を受く。」智曰く、「何の方便を作してか免るべき。」願曰く、「望むらくは、僧堂を估直して、僧供に填設することをせば、免るべきのみ。」智、己が賞を以て、其の言の如くして、爲めに之を償ふ。一夕夢に願、謝して曰く、「師の力に頼つて、地獄の苦を免れて、人天の中に生ずることを得たり。三生の後、復た僧と爲るを得ん。」今に門闔燒痕猶ほ存せり。」(清規)

王荆公が子、秀、所爲不善なり、秀死して後、荆公、恍然として、秀が鐵枷を荷ひ門の側に立つを見る。是れに因つて宅を捨てて寺と爲し、秀が爲めに冥福を 追薦す。(名臣言行錄)

山庵恕中禪師曰く、「杭州天目山の義斷崖は、高峯に見えて旨を得たり、歸向する者甚だ多し。既に死して夢を現じて、吳興細民の家に託生す。後に僧と爲る。名は瑞應、字は寶曇、幼より壯に至りて、人の禮拜供養を受くること虚日なし。余、天界に寓居せし時、寶曇も亦在り。隣居すること頗る久し、

①王荆公は王安石の事なり、宋人、孟嘗君の傳を作る。
②追薦は追善供養なり。

其の所爲を察するに、碌々として常人と以て異なることなし。間々己躬の事を以て、之を叩く者有れば、但だ 懷懼するのみ。前身、實に常人に非ず、胡ぞ乃し頓に前世の所習を忘るゝこと是くの如きや。」古人の曰く、「聲聞尙ほ出胎に昧く、菩薩猶ほ隔陰に迷ふ。然るときは修行の人、慎まざる可けんや。」(山庵雜錄)

又曰く、「洪武庚戌の冬、奉化の田子中、余を太白に訪ふ。同居するもの久し。余偶々言ふ、「金剛般若經は、閻羅王界に、稱して功德經と爲す、故に世人、亡者を薦むるに多く之を讀む。」子中誓つて身を終るまで受持す。一日、其の母の諱日に値ふて、發心して此の經を誦すること百過、以て薦む。晨に起きて松榻の上に坐して、方に誦して九遍に至る。鬼卒の一老嫗を枷紐して、榻前に跪かしむるを見る、髮 離披として面を覆ふ。熟々之を視れば、乃ち亡母なり。子中倉卒として爲す所を知らず、須臾に引き去る、將に枷を脱せんとするもの若し。是に於て子中、大いに泣く、恨むらくは即時に經を輟めて、母と相勞問せざることを。余謂らく、此の經、功德の大なること、喻を云ふべからず。子中發心して持受するが若きんば、即ち冥に陰界を感じて、母子をして兩相見することを得せしむ、以て其の苦を釋く。嗚呼、偉なるかな。」(山庵雜錄)

①懷懼は愧ぢるの意なり。
②閻羅王界は梵語閻魔羅(Māra)の略、閻浮州の南方鐵圍山の外部にある地獄に住んで、常に十八の將官と八萬の獄卒とを従へて、世界の有情の死して地獄に來るものを審判し、之れを懲罰し、以て諸種の不善業を遮止す。
③離披は亂れ散る貌。

玄沙備禪師曰、「如今、若し了せずんば、明朝後、驢胎馬肚の裏に入つて、犁を牽き、把を拽き、鐵を銜み、鞍を負ひ、確擽磨々せられて、水火裏に燒煮し去らん。大いに容易に受けず、大いに須らく恐懼すべし。」と。

鳩摩羅多尊者曰、「善惡の報、三時あり。凡そ人但だ仁あつて、天く、暴にして壽く、逆にして吉、義あつて凶なるを見て、便ち謂へり、因果を亡じ、罪福虚なりと。

殊に知らず、影響の如くに相隨ふて、毫釐も忒ふことなきことを。縦ひ百千萬劫を経るとも、亦磨滅せず。」と。

經に曰く、「假使ひ百千劫にも、所作の業亡せず、因縁會遇の時、果報還つて自ら受く」と。

無業國師曰く、「嗟乎、人身を得る者は、爪甲上の土の如く、人身を失ふ者は、大地の土の如し。良に傷むべき哉。」と。

三 學道は須らく佛祖の規範を毀犯せざることを要すべし

智論に云く、「外典を學習するは、刀を以て泥を割くが如し。泥所成なくして、刀自ら損す。又日光を視るが如く、人の眼をして暗からしむ。」

今時の僧侶、未だ半卷の金文、一冊の語録を解せず、還つて詩文を習ひ外典を讀む、尤も憐むべき

①鳩摩羅多尊者は、釋尊より十九の法嗣なり。
②天くは天折とて、若死するを云ふ。
③爪甲上の土は爪の上に乗る丈の土の意にして、大地の土の多に比し、甚少なるを云ふ。
④外典は老、莊、儒、諸子百家の佛敎以外の典籍を云ふ。

なり。然りと雖も、往古の高僧、或は異學に通じ、或は篇章を善す。其の意他なし、只だ外道を摧伏し、佛化を助通せんと要するのみ。是に因つて局見の陋儒、偏墮の俗士を驅り得て、以て内外護を成することは、蓋し此れに由れり。夫の大願の韓愈に於ける、明敎の歐陽に於けるが如き、此れ其の人なり、豈に其れ今時の庸編、才を銜ひ、能を飾り、名を求め、利を徵むるの類に同じからんや。謹んで道流に報ず、器量分あり、世齡數あり、確く泥を割くの誠を守りて、外典詩文等の書に觸るゝ莫れ。幸に佛祖の文字あり、工夫若し餘力有るときは、請ふ指を染めよ。

智覺禪師曰く、「若し姪を去らずんば、一切清淨の種を斷せん。若し酒を去らずんば、一切智慧の種を斷せん。若し盜を去らずんば、一切福德の種を斷せん。若し肉を去らずんば、一切慈悲の種を斷せん。」

而今、門下の禪侶、此の姪盜酒肉に於て、確く一生不犯の力を得ば、以て我が家の種草と爲るに足らん。其餘の微細の過患、自然に脱し去らん。蓋し他をして常に無心の道を學ばしむるが故に。

①韓愈は韓退之、文公と云ふ、儒學の大斗、晩年佛道に歸依す、始め佛骨の表を作りて潮州に貶せらる、其の文や佛を退くるにあり。然れ共當時の佛道蕩々として邪道に逸き、遂に荒唐の説をなして佛骨を宮中に入れ、これを安置するに至る、故に此表を上りて非を論ず。世人文公を評して儒學の徒と、文公何ぞしかく儒學ならんや、大道の存する所は、先聖同一軌なり。

如く、百千劫を経るとも、祇に熱砂と名けん。汝、姪身を以て、佛の妙果を求めば、縦ひ妙悟を得るとも、皆是れ姪根なり。根本姪を成ずれば、三塗に輪轉して、必ず出づること能はず、必ず姪機をして、身心俱に斷じて、斷性も亦無からしめば、佛菩提に於て、斯く希冀すべし。」

⑧ 楞嚴經(Srangana-Sutra)は具には「大佛頂如來密印修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」と云ひ、又略して「首楞嚴經」とも云ふ。
⑨ 三塗は三途とも云ふ、地獄、餓鬼、畜生の三途なり。
⑩ 温飽は温き美衣を着け、又美食に飽かんとするを云ふ。

近古以來、禪門徒、男色を犯すを以て常と爲す。時俗循習して弊を爲す。更に其の非を知る者なし。至若、知識の名字を領する者も、亦忌み憚ること無きに至る、何ぞ其れ狂妄、此くの如く甚だしきや。竊かに他の男色に耽著する者を觀るに、其の愛纏嫉妬、塵俗の女色に荒むよりも甚だし。夫れ沙門は、佛祖の大事を以て念と爲す。又何の暇あつてか、塵俗の嗜む所に耽著せんや。山僧が會裏、失口にも這般の俗話を打することを許さず。何ぞ況んや他の少年の沙彌等に就いて、戲言戲動を做す者をや。

四 學道は須らく慚愧を生ずるを要すべし

希顏首座の釋難文に曰く、「蓋し家を出でて僧と爲る、豈に細事ならんや。安逸を求むるに非ず、

温飽を求むるに非ず、蝸角の利名を求むるに非ず。生死の爲めなり、衆生の爲めなり、煩惱を斷じて、三界海を出で、佛の惠命を續けんが爲めなり。聖を去ること、時遙かにして佛法大いに壞す、汝敢て妄りに爾ることを爲さんや。寶梁經に云く、「比丘、比丘の法を修せず、大千睡する處なし云々」と。六尺の身あつて、智慧なきを、佛、之を痴僧と謂ふ。三寸の舌あつて、説法すること能はず、佛、之を啞羊僧と謂ふ。僧に似て僧に非ず、俗に似て俗に非ず、佛、之を烏鼠僧と謂ふ。亦秃居士と曰ふ。」

⑪ 三界は欲界、色界、無色界の三なり。
⑫ 精進は六度の一にして、奮勵努力して惡を止め善を進むるを云ふ。

懶庵樞和尚曰く、「楞嚴經に云く、「云何ぞ、賊人我が衣服を假りて、如來を裨販し、種々の業を造る」と。若し戒を以て心を攝めずんば、縦饒ひ佛祖に齋するも、未だ如來を裨販し、種々の業を造ることを免れず。況んや、平々の人をや。」

高庵、雲居に住す。衲子室中に其の機に契はざる者を見る毎に、即ち其の袂を把り、色を正して之を責めて曰く、「父母汝が身を養ひ、師友汝が志を成じ、飢寒の迫なく、征役の勞なし。此に於て堅確精進にして、道業を成辨せずんば、他日何の面目あつてか、父母師友に見えんや。」衲子其の語を聞き、泣涕して已まざる者あり。其の號令整嚴なること、此くの如し。(禪門寶訓)

今五百歳に垂んとすと雖も、若し眞實辨道の衲子有りて、之を讀まば、豈に寒心せざることを得んや。

雲峯悅和尚、小參の略に云く、「豈に見すや、教中に道ふ、寧ろ熱鐵を以て身に纏ふとも、信心の人の衣を受けず。寧ろ洋銅を以て、口に灌ぐとも、信心の人の食を受けず。上座若しや是にし去らば、直饒ひ大地を變じて黄金と作し、長河を攪いて、酥酪と爲し、上座に供養すとも、未だ分外と爲さず。若しや未だ是ならずんば、滴水寸絲に至つても、便ち須らく被毛戴角して、犁を牽き把を拽いて、他に償ふて始めて得べし。」

五 學道は須らく師を擇び友を擇ぶを要すべし

先聖曰く、「寧ろ戒を破ること、須彌山の如くすべくとも、邪師に一邪念を薰せらるること、芥子許りの如きも、情識の中に在るべからず。油の麩に入るが如く、永く出づべからず。」(大惠書)

佛曰く、「若し諸の衆生、善友を求むと雖も、邪見の者に遇ふて、未だ正悟を得ず。是を名けて外道種性と爲す。邪師の過謬なり、衆生の咎に非ず。」(圓覺經)

圓悟禪師曰く、「學道は師を擇ぶことを先とす。既に眞正に頂門の眼を具する善知識を得ば、其れに依つて死生の大事を決擇せよ。」(心要)

志公曰く、「出世の明師に逢はざれば、枉げて大乘の法薬を服す。」(傳心法要)

尸迦越經に云く、「弟子、師に事ふるに五事あり。一には當に之を敬難すべし。二に當に其の恩を知るべし。三に所教、之に隨ふ。四に思念厭はず。五に當に後に從ふて稱譽すべし。」(釋氏要覽)

瀉山祐禪師曰く、「我を生む者は父母、我を成す者は朋友。善者に親附するは霧露中に行くが如く、衣を濕さすと雖も、時々潤あり。惡者に狎し習へば惡知見を長じ、曉夕惡を造る。即目交々報い、歿後に沈淪す。」(湛堂和尚、妙喜に謂つて曰く、「

像季の比丘、外多く物に徇ひ、内心を明めず。縦ひ弘く爲すこと有るとも、皆究竟に非ず。蓋し附す所卑猥にして然らしむ。牛に搏つの蟲の飛んで數歩に歩むとも、若し驥尾に附せば、便ち追風逐日の能あるが如し。乃ち依托の勝れるなり。是の故に、學者居るには必ず處を擇ぶ。遊ぶには必ず士に就く。遂に能く邪僻を絶ち、中正に近く。正言を聞くなり。」(禪門實訓)

因果經に云く、「朋友に三の要法あり。一には失あるを見て、輒ち相曉諫す。二に好事あるを見て、深く隨喜を生ず。三に苦厄在つて相棄捨せず。」

四分律に云く、「七法を具して方に親友を成す。一に作り難きを能く作る。二に與へ難きを能く與ふ。三に忍び難きを能く忍ぶ。四に密事相告ぐ。五に互に相覆藏す。六に苦に遭ふて捨てず。七に貧

① 像季は末法、或は末世の意なり。
② 驥尾に附すは、駿馬の尾に付けて風を追ひ、日を送ふ千里の能あるが如し。
③ 四分律は佛滅後百年、曇無德羅漢が上座部の律中より、わき集めたる律本なり、四度にそれを監修せるに依り、四分律の名あり、又之を所依とせる宗を四分律宗と云ふ。

窮輕しめず。

尸迦越經に云く、「一に作惡を見て、屏處に往いて曉諫呵止す。二に所有の急事、當に奔赴して救護すべし。三に所有の私語、他人に説向することを得ず。四に常に相敬難す。五に所有の好事、當に多少分、之を與ふべし。」(釋氏要覽)

善知識には遭ひ逢ふこと得難し。譬へば梵天より一の芥子を投じて、下界針鋒の上に安するが如きは、猶ほ易し。明師道友に値ふて、正法を聞くことを得るは、甚だ難し。西天の九十六種の外道の如き、皆出離を求め、邪師に遇ふに因つて、反つて生死に沈む。(宗鏡錄)

六 學道は須らく實の如く信受することを要すべし

六祖、一日衆に謂つて曰く、「汝等自心是れ佛、更に狐疑すること莫れ。外一物として、能く建立するなし。皆是れ本心、萬種の法を生ず。故に經に曰く、「心生すれば、種種の法生じ、心滅すれば、種種の法滅す」と。若し種智を成就せんと欲せば、須らく一相三昧、一行三昧に達すべし。若し一切處に於て、而も相に住せず、彼の相の中に於て、憎愛を生せず。亦取捨なし、利益成壞等の事を念せず、安閑恬靜、虛融澹泊なる、此を一相三昧と名く。若し一切處に於て、行住坐臥、純一真心にして、道場を動せず、直に淨土を成する、此を一行三昧と名く。」

●屏處の屏は陰の意なり。

●六祖は慧能大師禪師なり。

百丈懷海禪師に僧問ふ、「如何なるか是れ大乘頓悟の法要。」師曰く、「汝等、先づ諸縁を歇め、萬事を休息して、善と不善と世出世間一切の諸法、記憶すること莫れ、緣念すること莫れ。身心を放捨して、其をして自在ならしめ、心、木石の如くにして、辨別する所なく、心所行なくして、心地若し空なれば、惠日自ら現す。雲開いて日出づるが如くに相似たり。但だ一切の攀緣、貪瞋愛取を歇め、垢淨情盡き、五欲八風に對して動せず。見聞覺知に縛せらるゝことを被らず、諸境に惑さるゝことを被らずんば、自然に神通妙用を具足せん。是れ解脱の人なり。一切の境に對して、心靜亂なく、攝せず、散せず、一切の聲色を透過して、滯礙あることなきを、名けて道人と爲す云々。」又曰く、「夫れ學道の人、若し種々の苦樂、稱意不稱意の事に遇ふて、心退屈なく、名聞利養衣食を念せず、功德利益を貪らず、世間の諸法の爲に滯礙せられず、親なく愛なく、苦樂平懷にして、麤衣寒を遮り、糲食命を活し、兀兀として愚の如く聾の如くにして、

●糲食は玄米を云ふ、魚食の事を云ふ。

稍々相應の分あらん。若し心中に于て、廣く知解を學び、福を求め、智を求めば、皆是れ生死、理に于て益なし。却つて知解の境風に漂溺せらるゝことを被りて、還つて生死海裏に歸す云々。」又曰く、「但是れ三乘教は、皆貪瞋等の病を治す、祇々如今、念々若し貪瞋等の病あらば、先づ須らく之を治すべし。義句知解を求覓することを用ひざれ。知解は貪に屬す、貪變じて病と成る、祇々如今、但一切有無の諸法を離る、亦離を離れ、三句の外に透過して、自然に佛と差なし。既に自らは佛、何ぞ慮ら

ん、佛の語を解せざることを。祇々恐らくは、是の佛ならずして、有無の諸法に縛せられて、自由を得ざることを。理未だ立せざるを以て、先づ福智あり。福智に載り去られて、賤しきが貴を使ふが如し。如かず先づ理を立て、後に福智あらんには云々。」(會元)

馬大師曰く、「道は修することを用ひず、但々汚染すること莫れ。何をか汚染と爲す。但々生死の心、造作趣向あるは、皆是れ汚染なり。若し直に其の道を會せんと欲せば、平常心是れ道。謂ゆる平常心は是れ造作なく、是非なく、取捨なく、斷常なく、凡なく聖なし。經に云く、「凡夫の行に非ず、賢聖の行に非ず、是れ菩薩の行なり」と。只如今、行住坐臥、機に應じて物を攝す、盡く是れ道なり。」(傳燈錄)

黄檗和尚曰く、「若し成佛を得んと欲せば、一切の佛法總に學ぶことを用ひざれ、唯々無求無著を學せよ。八萬四千の法門は、八萬四千の煩惱に對す。祇々はれ教化攝引の用なり。」又曰く、「但々縁に隨つて、舊業を消す、更に新殃を造ること莫れ。」と。

徳山和尚上堂、若しや己に於て、無事ならば妄に求むること勿れ。妄に求めて得れば、亦得るには非ず。汝但々心に無事に、事に無心ならば、虚にして靈に、空にして妙ならん。若し毛端許りも之が本末を言はゞ、皆自欺と爲る。何が故ぞ、毫釐も繫念すれば三途の業因。警爾として情生すれば萬劫の

①馬大師は馬祖道一禪師なり。
②黄檗は黄檗希運禪師なり。
③警爾は一寸の間、一見と云ふが如し。
④頭領は煩惱の爲に縛らるる事、牛馬の束縛せらるるが如く、心自在ならぬ事を馬のメヅナや鎖に譬ふ。

編鑽。聖名凡號盡く是れ虚聲。殊相劣形皆幻色と爲る。汝之を求めんと欲せば、累なきことを得んや。其の之を厭ふに及んで、又大患と成る、終に益なし。(會元)

臨濟和尚曰く、「已起の者續くこと莫れ。未起の者放起することを要せざれ。便ち爾が十年の行脚に勝らん。」と。

圓悟禪師曰く、「一念不生、放つて玲瓏ならしめよ、纒かに是非彼我得失あらば、他に隨ひ去ること勿れ。乃ち是れ終日竟夜、親しく自家眞の善知識に參するなり。何ぞ此の事、辨せざることを憂へん、切に須らく自ら看すべし。」(心要)

雪堂和尚曰く、「尋常、兄弟に向ひて説く、他の機境に上ることを要せざれと。如何なるか之を機境と謂ふ。佛、之を機境と謂ふ。法、之を機境と謂ふ。而も況んや文章一切の雜事をや。若し問々地を守らば、自然に虚にして靈に、寂にして妙ならん。水上の葫蘆子の如くに相似たり。蕩々地にして拘なく絆なし、撈著すれば便ち動、捺著すれば便ち轉ず。眞に大自在を得たり。」(拾遺錄)

懶庵和尚、衆に示して曰く、「汝等諸人總に來りて安に就く、甚麼をか求覓す。若し作佛を欲せば、汝自らは是れ佛、而も却つて傍家に走りて、忽々として渴鹿の陽燄を趁ふが如し。何時か相應することを得去らん。阿彌作佛を欲せば、但々如許多の顛倒攀緣妄想惡覺垢欲不淨衆生の心なきときは、汝便ち是れ初心正覺の佛、更に何處に向つてか別に討ねん。」

七 學道は須らく先言往行を識取せんことを要すべし

圓悟禪師曰く、「佛道 懸曠なり、久しく勤苦を受けて、乃ち成ずることを得べし。祖師門下、臂を断ち雪に立ち、石に腰け確を舂く、麥を擔ひ車を推す、園に事へ飯を作す、田疇を開き湯茶を施す、土を般び磨を拽く、皆志を抗し俗を絶ち、自ら強めて息はず、功業を成ずることを圖る者、乃ち之を能くす。所謂未だ一法として烟墮懈怠の中より生ずること有らず。」(心要)

圓悟禪師曰く、「禪子は當に痛く死生を以て事と爲し、務めて知見解礙を消し、佛祖の傳付する處の大因縁を徹證すべし。名聞を好むこと勿れ、歩を退き實に就いて、行解道徳充實することを疾ち、愈々潛通して愈々匿る可らず。諸聖 天龍將に人を推し出さんとするのみ。」(心要)

黃龍曰く、「未だ見性せざる人、安然として手を拱いて、無作無修を倣ふ。」

(冥極會要)

五祖演和尚曰く、「今時の叢林學道の士、聲名揚らず、人の爲に信せらるゝに匪ざることは、蓋し梵行清白ならず、人の爲に誦當ならざるが爲なり。輒ち或は苟も名聞利養を求めて、乃ち廣く其の華飾を衒はゞ、遂に識者に譏らるゝことを被らん。故に其の要妙を蔽ふ。道徳、佛祖の如くなること有り」と雖も、聞見疑ふて信せず。爾が輩、他日若し把第、頭を蓋ふこと有らば、當に此を以て自ら勉むべし。」

べし。」

演祖曰く、「古人己が過を聞くことを樂しむ、善を爲すことを喜ぶ、荒を包ぬるに長し、惡を隠すに厚く、謙りて以て友に交り、勤めて以て衆を濟ふ、得喪を以て其の意を貳にせず。所以に光明碩大にして、今昔に照映す。」と。嵩嶽元珪禪師曰く、「有心を以て物の爲にして、身を想ふに無心なれ。」と。(會元) 禘子日用の用心、幾ど此に過ぎず。

大覺蓮和尚曰く、「禍患は隱微に藏れて、急忽にする所に發す。」と。

瀉山和尚曰く、「舉措、他の上流を見て、擅に庸鄙に隨ふこと莫れ。」と。

朱世英、晦堂に問うて曰く、「君子不幸にして、小も過差あれば、聞見之を指目して暇あらず。小人終日、惡を造れども、以て然りと爲さず。其の故は何ぞや。」晦堂の曰く、「君子の徳は美玉に比す、瑕、内に生ずること有れば、必ず外に見はる。故に見者異なれりと稱す、指目せざることを得ず。夫の小人の若き者の日用の所作、過惡に非すと云ふことなし。又安ぞ用て之を言はん。」

黃龍南和尚曰く、「自ら損する者をば人益す、自ら益する者をば人損す。

情の得失なり、豈に容易ならんや。」

黃龍曰く、「聖賢の學は 造次に成す可きに非ず、須らく積累に在るべし、積累の要は惟れ専と勤となり。嗜好を屏絶して、之を行じて倦むこと勿れ。然して後に擴めて之に充

① 謙りては謙遜しての意。
② 造次は一寸、或は暫くの意なり。

てば、天下の妙を盡しつ可し。」

英邵武曰く、「物暴かに長ずる者は、必ず夭折し、功速かに成す者は、必ず壞し易し、久長の計を推さずして、卒成の功を造らば、皆遠大の資に非ず。」

昔、苗侍者夜坐睡らず、圓木を以て枕と爲し、小睡すれば枕轉ず、覺めて復た起き、安坐すること故の如し、率ね以て常と爲す。或人の謂く、「用心太だ過ぎたり。」苗曰く、

「我れ般若に於て緣分素より薄し、若し刻苦勵志せずんば、恐くは妄習の爲に率かれん。」(禪門實訓)

◎太だ過ぎたり。

水庵一和尚曰く、「昔大愚慈明、谷泉瑯琊と伴を結んで汾陽に參す。河東苦寒なり、衆人之を憚る。惟り慈明志道に在り、曉夕怠らず。夜坐睡らんと欲すれば、錐を引いて自ら刺す。嘆じて曰く、「古人、生死事大の爲に食せず寝ねず、我れ何人ぞや、而も荒逸を縱にせんや。生れて時に益なく、死して後に聞ゆること無くんば、是れ自ら棄つるなり。」と、一旦辭して歸る。汾陽嘆じて曰く、「楚圓今去る、吾が道東す。」と。

靈源清和尚曰く、「先哲の言く、「學道は之を悟るを難しと爲す、既に悟りては之を守るを難しと爲す、既に守りては之を行ふを難しと爲す。今行時に當る、其の難きこと又悟と守とに過ぎたり。蓋し悟と守とは精進堅卓にして、勉むること己躬に在るのみ。惟れ行ふことは必ず心を等しうして、死するま

で誓ひて、己を損して他を益するを以て任と爲す。若し心等しからず、誓堅からざるときは、損益倒置して、便ち墮して流俗の阿師と爲る、是れ宜しく祇み畏るべし。」

靈源、圓悟に謂つて曰く、「禘子、見道の資ありと雖も、若し深く蓄へ厚く養はずんば、用を發すること必ず峻暴なり。特に教門に補なきのみに非ず、將た恐らくは禍辱を招くこと有ることを。」

圓悟和尚曰く、「人誰れか過なからん、過ちて能く改むる、善焉より大なるは莫し。從上皆過を改むるを稱して賢と爲す、過なきを以て美と爲さず。故に人の己を行ふこと、多く過差あり、上智下愚俱に免れざる所なり。唯智者は能く過を改めて善に遷る。愚者は多く過を蔽ひ非を飾る。善に遷るときは其の徳日に新なり、是を君子と稱す。過を飾るときは其の惡彌々著はる、斯を小人と謂ふ。是を以て義を聞いて能く徙るは、常の情の難しとする所なり。善を見て樂み従ふことは、賢徳の尙ぶ所なり、望むらくは公言外に想忘せば可なり。」

圓悟、佛鑑に謂つて曰く、「白雲師翁、動用舉措必ず往古に稽ふ。嘗て曰く、「事古に稽へざる、之を不法と謂ふ。」予、前言往行を誦りて、遂に其

◎稽ふは敬ふ。

の志を成す、然も特に古を好むに非ず。蓋し今人は法に足らざればなり。」

白雲端和尚曰く、「道を守りて貧を安んずるは、禘子の素分なり。窮達得喪を以て、其の守る所を移す者は、未だ道を語る可らず。」

佛鑑勲和尚、珣佛燈に謂つて曰く、「高上の士は名位を以て榮とせず、達理の人は抑挫の爲に困せられず、其れ恩を承けて力を効し、利を見て誠を輸すこと有るは、皆中人以下の爲す所なり。」

佛鑑曰く、「道の爲に憂へざるときは、心を操ること遠からず。身を處すること常に逸なるときは、志を用ふることも大ならず。古人艱難を歴、險阻を嘗めて、然して後に終身の安を享く。蓋し事難きときは志鋭く、刻苦するときは慮深し、遂に能く禍を轉じて福と爲し、物を轉じて道と爲す。多く見るに、學者物を逐ふて道を忘れ、明に背いて暗に投ず、是に於て己が不能を飾りて、人を欺いて以て智と爲す。人の逮ばざるを強ひて人を侮りて以て高しと爲す。此を以て人を欺いて、欺く可らざるの先覺あることを知らず。此を以て人を掩ふて、掩ふべからざるの公論あることを知らず。故に自ら智とする者をば、人之を愚とす、自ら高しとする者をば人之を下す。」

佛眼遠和尚曰く、「林下の人言を發して事を用ふ、舉措絶爲、先づ須らく籌慮して、然して後に之を行ふべし。倉卒に暴れ用ふること勿れ。或は自ら予決すること能はずんば、應に須らく耆舊に諮詢し、博く先賢に問うて、以て見聞を廣くし、其の未能を補ひ、其の未曉を燭すべし。豈に虚りに氣勢を作り、専ら貢高を逞しうして、自ら其の醜を彰す可けんや。苟も一行之を前に失すれば、百善と雖も得て後を掩ふ可らず。」

①耆舊は耆宿又は耆老に同じ、先覺の人を云ふ。

靈源和尚曰く、「凡人平居、内照多く能く曉了すれども、事に涉りて外に馳するに及んでは、便ち混融に乖いて、其の法體を喪す。必ず佛祖の任を紹ぎ、後昆を啓迪せんと欲思はゞ、常に自ら檢責せずんばある可らず。」

雪堂行和尚曰く、「學者氣志に勝るときは小人と爲る、志氣に勝るときは端人正士と爲る。氣と志と齊しうして得道の賢聖と爲る。人ありて剛愎にして、規諫を受けざるは、氣の然らしむるなり。端正の士は強ひて不善を爲さしむと雖も、寧ろ死すとも不二なり、志の然らしむるなり。」

草堂清和尚曰く、「原を燎くの火は、熒熒より生ず、山を壞するの水は、涓涓より漏る。夫れ水の微なるや、捧土塞ぐべし、其の盛なるに及んでは木石を漂し、丘陵を没す。火の微なるや、勺水滅しつべし、其の盛なるに及んでは都邑を焦し、山林を燔く。夫の愛溺の水、瞋恚の火と曷んぞ常に異ならんや。」

①乖いては背いてなり。
②啓迪は啓發の意なり。
③熒熒は少しの火なり。
④涓々は響の落ちる貌、少しの水なり。

草堂曰く、「學者身を立てるには、須らく正當ならんことを要すべし、人をして竊議せしむる勿れ。一たび異論に涉れば、身を終るまで立つべからず。」

晦堂心和尚曰く、「稠人廣衆の中、賢不肖種を攝す、化門廣大なるを以て、親疎を其の間に容れず。惟れ少しく精選を加ふるに在り、苟も才徳人の望に合ふ者、己が怒る所を以て、之を疎にすべからず。苟も見識庸常にして、衆人惡む所の者、亦己が愛する所を以て、之を親しむ可らず。此くの如きと

自得輝和尚曰く、「大凡そ衲子誠にして正に向はゞ、愚なりと雖も亦用ふべし。伎にして邪を懐かば智なりと雖も終に害を爲さん。大率、林下の人、心を操ること正しからずんば、才能ありと雖も、終に立つべからず。」

簡堂機和尚、清明坦夷にして、慈惠物に及ばず。衲子稍々註誤あれば、蔽護保惜して以て其の徳を成す。嘗て言ふ、「人誰か過なからん、之を改むるを美と爲すに在り。」

大惠禪師曰く、「學道の人、日を逐ふ。但々他人を檢點する底の工夫を將て、常に自ら檢點せば、道業辨せざる事有ることなし。或は喜、或は怒、或は静、或は鬧、皆是れ檢點の時節なり。」

大惠禪師曰く、「逆境界は打し易し、順境界は打し難し。我が意に逆ふ者をば、只だ一箇の忍の字を消して、定省すれば少時に便ち過ぎ了る。順境界は直に是れ備が回避する處なし、磁石と鐵と相遇ふが如く、彼此覺えずして合して一處と作る。」

八 學道は須らく病中の用心を辨することを要すべし(瞻病附)

幻住老人曰く、「身は報縁に屬す、誰か老病なからん。百丈の建立、意斯に在り、古宿延壽堂に扁して省行と爲すことは、其れをして行苦を省察して、悲智を興さしめんとなり。乃ち病人は煩惱を生ずることを得易し、健者は常に惻隱の心を懐くといふの句あり。十方聚會、四海家を同じうす、既に親疎貧富の殊なし。

①惻隱は孟子に「惻隱の心は仁の端なり」とあり、即ち憐みの心なり。

彼が病は即ち己が病なり、人の安は即ち我が安なり。故に教の中に謂ふ、「看病は乃ち福田の中の最勝なる者なり。」謂く、攝養其れ罔す可けんや。又曰く、「或は輪次の直病深く惻隱を懐く、密かに慈悲を運び、彼の病縁を観る、自己に受くるが如くにして、寒温飢飽、量に隨つて觀察し、湯藥の需むる所、時々問候せよ。病者或は妄に異見を生じ、瞥に嗔心を起さば、徐ろに語りて應酬して其の正念を勉めよ、庶はくば自利々他ならん。」

②輪次は次ぎ／＼に等し。
③三業は身、口、意の三業なり。

圓悟禪師曰く、「疾苦身に在り、宜しく善く心を攝し、外境の爲に搖られず、中心亦念を起さず、常に生死事大、無常迅速を以て意と爲して、斯く須らくも恣縱にすべからず。唯々嗔の一法、三業に於て大なる過患たり。儘し順違あらば切に生せしむる勿れ。常に己を虚にし、心を正しうして外より來り觸るゝことを觀ること、虚舟飄瓦の如きと。古徳曰く、「生也猶ほ衫を着るが如く、死や還つて袴を脱するに同じ」と。生死を以て大變と爲さざることを知るべし。(圓悟心要)

諸苦の中、病苦を深と爲す、作福の中、省病を最と爲す。是の故に古人病あるを以て善知識と爲す、人に曉すに看病を以て福田と爲す。(福門警訓、省行堂記)
瞻病人の五徳、四分律に云く、「一に病人の可食不可食を知る。二に病人の便利唾吐を惡まず。三に

慈愍心あつて衣食の爲にせず。四に能く湯藥を經理す。五に能く病人の爲に法を説いて歡喜せしめて、己に善法を増長す。瞻病人の六失、増一經に云く、「一に良藥を辨せず、二に懈怠、三に喜曠好睡、四に但々衣食を貪る、五に法を以て供養せず、六に病人と共に言語談笑せず。」(釋氏要覽)

國譯緇門寶藏集卷之上終

國譯緇門寶藏集卷之中

九 學道は須らく邪正を辨することを要すべし

參禪を勤むる文に云く、「夫れ解は須らく圓解なるべし、他の明眼の宗師に還す。修は必ず圓修なるべし、叢林の道伴に分付す。初心薄福にして善く親依せず、見解偏枯にして修行懶惰なり。或は高く聖境を推して、己靈に孤負す、寧ろ德相神通を知らんや。凡夫悟道することを信せず、或は自ら天真を恃んで、因果を撥無す、但々智襟に向つて流出して、地位に依つて修行せず。所以に粗解の法師教眼に通せず、虚頭の禪客行門を貴ばず、此れ偏枯の罪なり。」(緇門警訓)

①叢林は檀林とも云ふ、禪家に多く用ふ、修行僧の多く集りて修進する道場なり。
②撥無は因果の理の歴然と存在するを、妄りに其の理を無して誤執するを云ふ。
③若し因縁云以下は、外道の執する五見を斥けたるなり。

百丈懷海禪師曰く、「常に衆人を勤む、須らく法塵煩惱を懼るゝこと、三塗を懼るゝが如くにして、乃ち獨立の分あるべし。假使ひ一法の涅槃に過ぎたる者あるも、亦少許りも珍重を生ずることなし。此の人歩々是れ佛、若し本清淨、本解脱自らは是れ佛、自らは是れ禪道なりと執して、解する者は即ち自然外道に屬す。若し因縁修成と執して、證得する者は即ち因縁外道に屬す。有を執せば即ち常見外道に屬す。無を執せば即ち斷見外道に屬す。」

亦有亦無を執せば即ち邊見外道に屬す。非有非無を執せば即ち空見外道に屬す。祇だ如今、但佛見涅槃等の見を作すこと莫れ。都て一切有無等の見なく、亦無の見なきを正見と名く。一切の聞なく、亦無聞なきを正聞と名く。是れ外道を摧伏す。(廣燈錄)

萬庵顏禪師曰く、「叢林至る所邪說熾然たり。乃ち曰く、「戒律必ずしも持せざれ、定惠必ず習はざれ、道徳必ず修せざれ、嗜慾必ず去らざれ。」又維摩圓覺を引いて證と爲す、貪、瞋、痴、殺盜、婬を贊して梵行と爲す。烏乎、斯の言豈に特に叢林今日の害を起すのみならんや、眞に法門萬世の害なり。且つ博地の凡夫、貪瞋愛慾人我無明、念々攀緣して一鼎の沸くが如し、何に由つてか清冷ならん。先聖必ず大いに此に於ける者有らんことを思うて、遂に戒定惠の三學を設けて、以て之を制す。庶はくは廻すべきことを。今、後生晚進、戒律を持せず、定惠習はず、道徳修せず、専ら博學強辯を以て、流俗を搖動す、之を牽けども返ること莫し。予因に謂ゆる斯の言乃ち萬世の害なり。」(禪門實訓)と、所謂、萬世の害、乃ち今時の禪林に在りて見つ可し。

智覺禪師曰く、「近ごろ末世誑説の一禪、只虚頭を學び、全く實解なし。歩々に有を行じ、口々に空を談す、自ら業力の牽るゝを責めず、更に人をして因果を撥無ならしむ。便ち説く、飲酒食肉は菩提を礙せず、行盜行淫、般若に妨げなし、生れて王法に遭ひ、死して阿鼻に陥る。」

①阿鼻は地獄なり。

吾が國、法の澆漓に方りて、宗風 陵夷し、異見競ひ起る。師席を珍位化を大方に闡く者、盛んに誑説の一禪を唱へ、後學を幻惑すること幾んど百餘年。已に虚を承け響を接し、天下に基布するに至る。想ふに夫れ天魔の屬、我が衣服を偷み、我が法を壞するの時か。凡そ措大家の族、内酒色に荒み外畋獵を好む、其の施爲する所、多く惡業を以て樂と爲し、善をなすことを喜ばず。是れ亦富貴叢中の常分なり、是の故に常に因なく果なきの説を愛して、三世の業報を説くことを喜ばず。將に謂へり、瞿曇德惡の方便なりと。適々大方に住持する 厖眉長老に就いて、竊かに平日の狂解を呈するに、長老之を密室に招きて、懷を開き印定す。更に拈提向上若干の古則を引いて、捏合して證と爲す。士大夫是に於て、平生の痒處に抓著し、死に抵るまで疑はず、善行日に弛べ、惡業轉々肆なり。死して 阿鼻に陥るを待たず、生れて一世の禍辱を招く、怖るべし畏るべし。佛曰く、「衆生の咎に非ず、邪師の過謬なり。」と、吁、其れ斯の謂乎。

②澆漓は末世の意なり。
③陵夷は山の高原の次第に低地に赴くを云ふ、即ち宗風陵夷は宗風の衰頽を意味す。
④偷みは盗むの意なり。
⑤三世は過去、現在、未來、なり。
⑥瞿曇は釋尊の異名なり。
⑦厖眉長老は厖眉は厚き眉毛の事にして老人の事なり、長老は内に智徳ありて尊ぶべきもの、或は長者老年の徳あるものに名く。譬喻經には、必ずしも出家を先んぜず、その善本を修し正行を分別し、設ひ年齒幼なるも諸根漏缺なきを長老と云ひ、又長阿含經には、耆年長老、法長老、作長老の三長老を擧ぐ、譯家には藏主、首座、單寮、西堂、東堂の職にあるを、一般に長老と云ふ。

心聞貢和尚曰く、「衲子禪に因つて病を致す者多し。病耳目に在る者あ

り、眉を瞪げ目を努り、耳を側て、頭を點するを以て禪と爲す。病口舌に在る者あり、顛言倒語、胡喝亂喝を以て禪と爲す。病手足に在る者あり、進前退後、指東劃西を以て禪と爲す。病心腹に在る者あり、玄を窮め妙を究め、情を超え見を離るゝを以て禪と爲す。實に據つて論せば、是れ病に非すと云ふこと無し。惟り本色の宗師は、幾微を明察して、目撃して其の會と不會とを知り、門に入りて其の到と不到とを辨す。然して後に一錐の一節を用ひて、其の廉纖を脱し其の搭滯を攻め、其の眞假を驗し其の虚實を定む。一方便を守りて變通に味からず、終に安樂無事の境を蹈み、而して後に已む。」(禪門實訓)

今、この病を受くる底の漢子を求むるに、也た多く得べからず、祖道の下衰知る可きなり。

大惠禪師曰く、「近代の佛法傷むべし、人の師と爲る者、先づ奇特玄妙を以て、何様に蘊在して遞に相襲し、口耳傳授して以て宗旨と爲す。此くの如きの流、邪毒心に入りて治療すべからず。古徳之を誘般若の人と謂ふ。千佛出世すとも懺悔を通せず。」

阿鼻は阿鼻旨の略、阿鼻地獄の稱、梵語(Avīci)無間と譯す、現在に上品の惡業を爲したるもの來世に生れて、苦痛を受くべき地獄にして、獄城の周圍八萬餘里ありと。地藏菩薩本願經卷上には、この地獄につきて五種の無間を明せり、曰く、一に、この獄に墮落せるものは日夜苦を受け間斷なく、二に、一人の身も、大城内に彌滿し、多人の身も亦然り。三に、身を苦しむる器具數をつくして出で來り、間斷なく、四に、男女、老幼、貴賤、人畜を問はず、罪業を犯せるもの皆悉くこゝに苦みを受くるが故に、趣果無間。五に、この獄に墮落せるものは、一日、一夜に、萬死、萬生して受苦に間斷なきが故に、總じて無間地獄と名く。

心問實は萬年心問實譯師なり。

近代、専門潛授の禪、此に出です。蓋し且つ奇特玄妙を以て、遞に相傳授するは尙ほ可なり。諸方の古則、只是れ淺近の傳謎子なり、笑ふ可し。

無學祖元禪師曰く、「我れ日本の兄弟を見るに、一生悟を得る者多かる可らず。此の國の風たるや、只だ奇才を貴んで、悟解を求めず。是の故に設ひ靈根ある者も、博く内外の典籍を覽、深く巧僞の文章を嗜み、自ら此の事を究むるに違あらず。迷中に一生を過ぎ了る、固に憫むべしと爲す。或は一類の道人と稱する者あり、多くは是れ其の器量、博學強記に堪へず、故に開坐を以て功業と爲して、眞實向道の心を辨せず。此の類も亦今生に開悟すべき者に非ず。」

今已に三百餘年、往々に此の兩般の病を見る、達人の言、信に誣ひず。嗟乎、國風の習弊此くの如く其れ陋し、悲しいかな。

無業國師曰く、「如今、天下禪を解し道を解する者、河沙數の如く、佛を説き心を説くもの、百千萬億あり。纖塵も去らずんば、未だ輪廻を免れず、思念亡せずんば、盡く須らく沈墜すべし。斯くの如きの類、尙ほ自ら業果を識らず、妄に言ふ、自利々他、自ら上流と謂ひて、他の先徳に並ぶ。但言ふ、觸目佛事に非すと云ふことなく、舉足皆是れ道場と。其の習ふ所を原ぬるに、一箇五戒十善の凡夫に如かず。其の言を發するを觀るに、他の二乘十地の菩薩を嫌ふ。且た醍醐の上味世の珍奇と爲すと

り。
① 幾微。先あり、微にして顯れざるを云ふ。易經に「機は動の微」とあり。
② 一割。誰又は誰なり。

も、斯等の人に遇うては、翻つて毒藥と成る。

近日、禪學の弊、覺識依通を以て悟明と爲す。穿鑿機緣傳授を以て、參學と爲す。險怪奇語を以て提唱と爲す、律儀を破壊するを以て解脱と爲す、貴達に交結し、^① 夤緣して位に據るを以て、出世の方便と爲す。(中略廣錄)

往古に在りても、也た偶々此の弊あり、近世に在りては、也た一等に此くの如し。於戲、魔說較、退き、祖道再び行はれんことを得んと欲すとも、亦得べからず、傷むべし。

大珠惠海禪師に大徳問ふ、「大虚能く靈智を生ずるや否や。真心、善惡を緣するや否や。貪欲の人は是れ道なりや否や。是を執し非を執する人、向後心通するや否や。境に觸れて心を生ずる人、定ありや否や。寂寞に住する人、惠ありや否や。傲物を懐く人、我ありや否や。空を執し有を執する人、智ありや否や。文を尋ね證を取る人、苦行して佛を求むる人、心を離れ佛を求むる人、心是れ佛なりと執する人、此の智道に稱ふや否や。請ふ禪師一々に爲に説け。」師曰く、「太虚、靈智を生せず。真心、善惡を緣せず。嗜欲深き者は機淺し。是非交争ふ者は未だ通せず。境に觸れて心を生ずる者は定少し。寂寞にして機を忘る者は惠沈む。傲物高心なる者は我壯なり。空を執し有を執する者は皆愚なり。文を尋ねて證を取る者は益滯る。苦行して佛を求むる者は外道なり。心是れ佛なりと執する者は魔たり。」大徳曰く、「若し是くの如くならば畢竟して所有無かるべし。」師曰く、「畢竟して是なるは大徳なり。」

① 臨關は天台の五時教に喰へたる五味中最上の酪味なり、即ち實相涅槃を指すなり。
② 夤緣は、まとひつく義なり。
③ 於戲、あり、嘆息の聲なり。

り。是れ畢竟して所有なきにあらず。」と、大徳、^② 踊躍禮謝して去る。(傳燈錄)

眞淨文和尚曰く、「其の斷見と云ふは、自心の本妙明の性を斷滅却して、一向に心外に空に著し禪寂に滯る。常見と云ふは一切法空を悟らず、世間諸の有無の法に執著して、以て究竟と爲す也。」

(正法眼藏)

宗鏡錄に曰く、「縁を見て體を見ずんば即ち是れ常見。體を見て縁を見ずんば即ち是れ斷見。今因縁に従つて性を見れば、常に落ちず。眞性の中に於て縁起すれば、斷に墮せず、實知見と名づく。」

臨濟大師曰く、「夫れ出家と云ふは、須らく平常眞正の見解を辨得して、佛を辨じ魔を辨じ、眞を辨じ偽を辨じ、凡を辨じ聖を辨すべし。若し是くの如く辨得せば眞の出家と名づけけん。」

然も舊開田地に閣くと雖も、一度贏ち來れば、方に始めて休す。而今、奴郎分たす佛魔辨せず。拍盲に休し將ち去る。自ら謂く、「此れ開々地を守る。此れ休歇の田地なり」と。是れ眞の出家にあらず、只養恬の凡夫のみ。若し是にし去らんと要せば、死中に眼を具して始め得べし。

玄沙備禪師曰く、「一般、繩床に坐する和尚あつて、善知識と稱す。^③ 問著すれば便ち身を搖し手を動し、眼を黙し舌を吐いて、^④ 瞪視す、更に一般あり。昭々靈々たる靈臺智性、能見能問を説いて、^⑤ 五蘊身田の裏に向つて、主宰と作る。恣麼にし

③ 踊躍は手の舞ひ足のふむ處を知らざる喜悅の貌を云ふ也。
④ 問著。問ふに同じ、著は助語也。
⑤ 瞪視す。目を張り、直視するを云ふ。
⑥ 五蘊は色、聲、香、味、觸の五なり。

て、善知識と爲さば大いに人を賺す。」

十 學道は須らく知るべし學解の病と爲ることを

臨濟和尚曰く、「今時の學人、得ざることは、蓋し名字を認めて解せんが爲めなり。大策子上に死老漢の語を抄して、三重、五重、復子に裏んで、人をして見せしめず、之れを玄旨なりと云うて、保重することを爲す。」

新豐和尚道く、「佛祖の言教を見ること、生冤家の如くにして、始めて參學の分あり。」
黃蘗和尚曰く、「今時の人、祇だ多智多解を得んと欲して、廣く文義を求むるを、喚んで修行となす。知らず、多智多解は驕つて壅塞となることを。唯多く兒に酥乳を與へて、喫せしむることを知つて、消と不消と總都て知らず。」(傳心法要)

①大策子上、立派な冊子の上と云ふ意。
②玄旨。玄妙不可思議の主旨、老子に曰く、玄之又玄と。上乘の眞理を云ふ。

淨山遠和尚、道悟眞に謂うて曰く、「學んで道に至らず、見聞を衒耀し、機解に馳騁し、口舌辨利を以て、勝つものは猶ほ廁室に、丹艱を塗汚するが如し。祇だ其の臭を増すのみ。」

馮山和尚曰く、「若し外に向つて、一智一解を得て、將た禪道と爲さば、且つ沒交渉、糞を運んで入ると名づく。糞を運んで出づると名づけず。汝が心田を汚す。所以に道ふ、是れ道にあらずと。」(會元)

十一 學道は須らく坐禪を修習することを要すべし

(附 坐禪邪正)

六祖壇經に曰く、「何をか坐禪と名づく、外一切の善惡の境界において、心念起らざるを名づけて坐となす。内自性を見て動かざるを、名づけて禪となす。何をか禪定となす。外、相を離るゝを禪とし、内、亂れざるを定と爲す。若し諸境を見て、心亂れざるは是れ眞定なり。」と。

淨名經に曰く、「即時に豁然として還つて本心を得」と。
龐居士語錄に云ふ、「心如なれば即ち是、坐、境如なれば即ち是、禪、如々都て假らず。大道中邊なく、若し能く是くの如き解くは、眠時も亦眠らず。」

天台師靜上座に人問うて曰く、「弟子毎に夜坐するに當りて、心念紛飛す、未だ攝伏の方を明めず、願はくは示誨を垂れよ。」師曰く、「如し或は夜間にして安坐せんに心念紛飛せば、紛飛の心を得て、以て、紛飛の處を究めよ。之を究むるに處なきとは、紛飛の念何んぞ存せん。反つて究心を究めば、能究の心安んか在らん。又能照の智本空、所緣の境も亦寂なり、寂にして寂に非ざれば、蓋し能寂の人もなし。照にして照に非ざれば、蓋し所照の境もなし。境智俱に寂にして心慮安然たり。外枝を尋ねず内定に住せず、二途俱に泯して一性怡然たり。此れ乃ち還源の要道なり。」(會元)
臨濟禪師曰く、「懶若し不動清淨の境を取りて是と爲さば、懶即ち他の無明を認めて郎主と爲す。」

這箇の説話、多少か 椿々地向つて 死模様を倣ふ底の漢を驚動したる。若し這裏に向つて観得透し打得徹せば、一偏に許す一半を救ひ得ることとを。

臨濟曰く、「一般の瞎禿子ありて、飽まで飯を喫し了りて便ち坐禪觀行し、念漏を把促して放起せしめず、喧を厭ひ静を求む、是れ外道の法なり。祖師の云く、「偏若し心に住して静を看、心を擧して外を照し、心を攝して内を澄しめ、心を凝して定に入る、是くの如きの流皆是れ造作なり」と。今初心の坐禪と稱する者を觀るに、但箇の 臭皮袋子を拘得し、浮想妄念起滅停らず、他の所謂心に住し静を看、心を凝し内澄む底と尙ほ未だ交渉せず。而も況んや眞の圓満に於てをや。畢竟狐兔の癡坐と異なることなし。

南陽忠國師に因に僧問ふ、「坐禪して静を看る、此れ復た若爲ん。」師曰く、「不垢不淨、寧ろ心を起して淨相を看ることを用ひんや。」

大惠禪師曰く、「衆生の狂亂は是れ病佛、寂靜波羅蜜の藥を以て之を治す。病去つて藥存すれば、其の病愈々甚だし。」

① 椿々地。地盤、即ち地上を謂ふ。

② 死模様、蝶鬚仙人第四禪を得、出入の息断ゆと、一樹下に坐し、兀然として動かす。鳥不動を見て、之を木と思ひ、頂に卵を生む。仙人定より起きて、其頂に卵を生むを覺ゆ。思惟して曰く、「我若し起きて行けば、鳥母來らず、卵必ず破壊せん」と。乃ち再び定に入る。鳥子飛去つて、方に起きて遊行すと。蓋し禪の分位を得たるを云ふ。

③ 臭皮袋子、即ち此の穢身を云ふなり。

佛心才禪師の坐禪儀に云く、「夫れ坐禪は端身正意にして、己を深くし心を虚にし、足を疊み 跏趺して、視を收め聽を反して、惺々として味ます、沈掉永離、縦ひ事を憶ひ來るも、情を盡して拋棄して、靜定の處に向つて正念諦觀す。坐を知るも是れ心、及び返照するも是れ心、有無中邊内外を知る者も心なり。此の心虚にして知り、寂にして圓明、了々として斷常に墮せず。靈覺昭々として、揀んで虚空に非ず。今覺家を見るに力め坐して悟らざる者は、病依計に由り、情偏邪に付き、迷ふて正因に背き、枉げて止作に隨ふ、悟らざるの失、其れ斯に在る焉。

若し也た一念を 斂澄して、密に無上に契はゞ智鑑廓然として、心華頓に發し、無邊の計執直下に消磨し、積劫の不明一時に豁現す。忘れて忽ちに記するが如く、病の頓に瘳するが如く、内に歡喜の心を生ず。自ら知る、當に作佛すべきことを。即ち知る、自心の外に別佛なきことを。然して後、悟に順じて増修し、修に因つて證す。證悟の源是れ三。別なし、名づけて一解・一行・三昧と爲す、亦無功用の道と云ふ。」

仰山和尚曰く、「若し是れ祖宗・門下・上根智ならば、一聞千悟して大總持を得ん。其れ根微にして智劣なるあり。若し安禪靜慮せずんば、這裏に到

④ 跏趺、結跏趺坐の略、圓滿安坐の義、身體疲倦せず、精神また安穩、魔王も佛弟子の之を行ふを見ては怖畏すと云へり、これに全跏坐と平跏坐との二種あり、足の表を趺と云ひ、裏を跏といふ。兩足互に蟠結して坐するなり、即ち右足を以て左脛上に安し、左足を以て右脛上に安する坐相を全跏坐といひ、右足を疊て左脛上に安するのみなるを半跏坐或は半坐といふ。前者を如来坐、吉祥坐と云ふに對して、後者を菩薩坐と云ふ。これ禪定を修する最も普通なる坐相なり。

⑤ 斂澄。收めすましむるを云ふ。

りて總に須らく茫然たるべし。

玄沙備禪師曰く、「饒ひ汝身心を鍊り得て、虚空に同じ去り、饒ひ汝靜明湛不搖の處に到るも、識陰を出でず、古人喚んで急流の水の如しと作す、流急なれども覺せず、妄に恬靜と爲す。恣廢の修行盡く他の輪廻の際を出づること得ず、依前として輪廻を披し去らん。」

中峰和尚曰く、「或は靜默の中に坐して、塵勞暫息の頃に於て、忽ちに陰識の中に於て、遽に箇の相似底の道理を省得すること有れば、便乃ち依約して是と爲す。經教の中の語言を勾引し、證過して心中に含む。知らず、此の病是れ陰識の依通、眞の生死の本にして見性に非ざることを。」

圓覺經に云く、「無礙清淨の惠、皆禪定に依つて生ず。」

趙州和尚曰く、「備、衣單下に向つて坐すること十年、若し禪を會せずんば、老僧が頭を截取し去れ。」

古德曰く、「凡を超え聖を越ゆれば、必ず靜縁を假る、坐脫立亡は須らく定力に憑るべし。」

十二 學道は須らく見性明心を要すべし

達磨大師、二祖に謂つて曰く、「汝但々外諸縁を息め、内心喘ぐことなかれ、心、墻壁の如くにして以て道に入るべし」と。二祖、種々に心と説き性と説くことを作すとも契はず。一日忽ち悟りて乃ち曰く、「以て諸縁を息む可し」と。達磨曰く、「斷滅と成り去ること莫らんや不や」と。曰く、「無し」。達磨

曰く、「子、作廢生。二祖曰く、「了々として常に知る、故に之を言ふとも及ぶ可らず。」達磨曰く、「此れ諸佛の傳ふ所の心體、更に疑ふこと勿れ」と。(宗門統要)

佛、阿難に告げ玉はく、「我常に説いて言ひき、汝が身と汝が心とは皆是れ妙明の眞精、妙心の中の所現の物なり。云何んぞ、汝等本妙圓妙の明心、寶明の妙性を遺失する。縁

を聚めて内に搖ぎ外に趣いて奔逸す。昏擾々の相を以て心性と爲す。一たび迷ふて心と爲れば、決定して惑ふて色身の内と爲る。色身より外、山河

虚空大地に泊るまで、咸く是れ妙明の眞心中の物と云ふことを知らず。譬へば澄清たる百千の大海、之を棄て、唯一浮漚の體を認めて、目けて全

潮と爲して、瀛渤を窮め盡すと云ふが如し。」(楞嚴經)

異見王、波羅提尊者に問ふ、「何者か是れ佛。」曰く、「見性是れ佛。」王曰く、「師見性するや否や。」曰く、「我れ佛性を見る。」王曰く、「性、何の處に在る。」曰く、「性、作用に在り云々。」即ち偈を説いて曰く、「胎に在りては身

と爲り、世に處しては人と爲り、眼に在りては見と曰ひ、耳に在りては聞と曰ひ、鼻に在りては香を辨じ、口に在りては談論し、手に在りては執捉し、足に在りては運奔す。徧現して俱に沙界を該ね、

收攝して一微塵に在り、識者は是れ佛性と知り、識らざる者は喚んで精魂と作す。」(會元達磨章)

④阿難。阿難陀(Ananda)の略、釋尊の從弟にして、佛成道の年に生れ、釋尊五十五歳の時より二十餘年間、侍者となりて、東西の化導に隨行し、入滅の際にも、阿耨樓陀とともに其左右に事へし弟子なるが、多聞強記を以て知られしにより、滅後、佛の教法を編集するに當りては、經文の大部分は、この人の記憶裡に存せしものを原案とせられたり。

潮州大顛和尚曰、「夫れ學道の人ハ須らく自家の本心を識るべし、心を將て相示して、方に道を見るべし。多く時輩を見るに、只揚眉動目一語一默を認めて、驀頭に印可して以て必要と爲す。此れ實に未だ了せず。吾れ今、汝諸人の爲に分明に説出せん、各々須らく聽受すべし。但一切の妄運・想念・思量を除却せば、即ち汝が真心なり。此の心、塵境及び靜默を守認する時と全く交渉なし。即ち心是佛、修治を待たず。何を以ての故に、機に應じ照に隨つて冷々として自ら用ふ、其の用處を窮むるに、了に得べからず、喚んで妙用と作す。乃ち是れ本心大いに須らく護持すべし、容易にす可らず。」(傳燈錄)

寶塔紹巖禪師、衆に示して曰く、「諸仁者還つて心を明むるや、也た未だしや。是れ語言談笑の時、凝然[㊦]杜默の時、知識に參尋する時、道伴商畧する時、觀山翫水の時、耳目絶對の時、是れ汝が心にあらざること莫らんや否や、如上の所解盡く魔魅の爲に攝せらる、豈に心を明むと曰はんや、更に一類の人あり。身中の妄想を離れて、外別に十方世界に遍して日月を含み、太虚を包むことを認めて、是を本來の真心と謂ふ。斯れ亦外道の所計なり、心を明むるに非ざるなり。諸仁者會せんと要するや、心、是なる者なし、亦不是なる者なし。汝、執認せんと擬せば、其れ得べけんや。」(會元)

㊦印可。佛の眞理として決定し給ふを云ふ。三法印とて、諸行無常印、一切法無我印、涅槃寂靜印と云ふことあり。この三法印に契ふものは佛敎の正しき教理なり。今の印可とは、師が弟子に對して其の悟了徹底を證するに用ふ。
㊦杜默は默想に同じ。

眞淨和尚曰く、「佛法の至妙無二なり、但未だ妙に至らずんば、互に長短あらん。苟も妙に至りぬれば、心を悟るの人なり。實の如く自心究竟本來成佛なることを知りぬれば、實の如くに自在に、實の如くに安樂に、實の如くに解脱し、實の如くに清淨なり。而も日用唯自心を用ひよ、自心の變化把得して便ち用ひよ、是と非とを問ふこと莫れ。擬心思量せば早く不是なり、擬心せざれば一々に天真、一々に明妙、一々に蓮花の水に著かざるが如く、心の清淨なること彼に超えたり。所以に自心に迷ふが故に衆生と作り、自心を悟るが故に成佛す。而るに衆生即佛、佛即衆生、迷悟に由るが故に彼此あり。」(正法眼藏)

百丈禪師、潯山に謂うて曰く、「經に云く、『佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。時節既に至りぬれば迷ひて忽ち悟るが如く、忘れて忽ち憶するが如し。方に己が物を省みるに、他に從つて得ず。』故に祖師の云く、『悟了同未悟、無心亦無法。』祇だ是れ虚妄凡聖等の心なければ、本來の心法元自ら備足せり。汝今既に爾り、善く自ら護持せよ。」(會元)

僧、仰山に問ふ、「和尚、人の禪を問ひ道を問ふを見て、便ち一圓相を作す、中に於て牛の字を書き、意何くにか在る。」仰山云く、「這箇也た是れ閑事、忽ち若し會得せば外より來らず。忽ちに若し會せずんば、決定して識らず。我且く爾に問はん、諸方の老宿、爾が身上に於て、那箇か是れ爾が佛性と指示する。爲た復た語底是か默底是か、是れ不語不默底是なること莫らんや。爲た復た總に是か、爲た復た總に不是か。爾若し語底是と認めば、盲人の象尾に摸著するが如し。若し默底是と認めば、盲人

の象耳に摸著するが如し。若し不語不默底是と認めば、盲人の象鼻に摸著するが如し。若し物々都て是と道へば、盲人の象の四足に摸著するが如し。若し總に不是と道へば、本象を抛ちて空見に落在す。是くの如く衆盲の所見、只象の上に於て名差別す。偏好からんことを要せば、切に象を摸する莫れ。道ふこと莫れ、見覺是と。亦道ふこと莫れ、不是と。祖師云く、
⑤「菩提本樹なく、明鏡亦臺なし、本來無一物、爭でか塵埃に染むることを得ん。」又云く、「道本と形相なし、智慧即是れ道、此の見解を作す者、是を眞の般若と名づく。明眼の人は象を見て、其の全體を得。佛の見性の如きも亦然り。」(碧巖)

巖頭和尚、衆に示して云く、「夫れ大統綱宗の中の事、須らく句を識るべし。若し句を識らずんば、個の話を作し難し。甚麼か是れ句。百不思議の時を喚んで正句と爲す。亦居頂と云ひ、亦得住と云ひ、亦歴々と云ひ、亦惺々と云ひ、亦的々と云ひ、亦佛未生の時と云ふ、亦得地と云ふ、亦與廢の時と云ふ。與廢の時を得て、等しく一切の是非を破す。纔かに與廢ならば便ち不與廢、便ち轉轉轉地、若し也た看不過ならば、纔かに人に刺著せ

⑤菩提本と樹なし。慧能禪師、始め五祖に參するや、五祖大師一日門人を喚んで總に來らしめて、世人生死事大なり、汝等日を終るまで福田を求め、生死の苦界を出離せんことを求めず、自性若し迷はば福なんぞ救ふべき、汝等各去つて自ら智慧を見、自の本心般若の性を取つて、各一偏を作り來りて吾に呈して看せしめよ、若し大意を悟らば汝に衣法を付して、第六代の祖となさん。衆退く。此時神秀上座たり、慧能禪師にありて衆を破り確を踏む。四日を経て神秀壁面に偈を書して曰く、「身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々勤めて拂拭せよ、塵埃をして惹かしむること勿れ」と、此時慧能此菩提本と樹なしの偈を稱す、よつて衣鉢をうけて六祖となる。

られて、眼眩眩地、恰も殺不死底の羊に似て相似たり。見すや、古人の道、沈昏不好なりと、須らく轉得し始めて得べし。」(正法眼藏)

章敬和尚上堂に曰く、「至理は言を亡す、時の人悉にせず、強ひて他事を習ふて以て功能と爲す。知らず自性元と塵境に非ざることを。是れ個の微妙の大解脱門、有らゆる鑑覺染ます礙せず、是くの如きの光明、未だ曾て休廢せず。曇劫より今に至るまで、固に變易なし、猶ほ日輪の遠近斯れ照すが如く、衆色に及ぶと雖も、一切と和合せす。靈燭妙明にして、鍛鍊を假るに非ず、了せざるが爲の故に物象を取る。但目を控へて妄に。空花を起するが如し。徒らに自ら疲勞して、枉げて劫數を経る。若し能く返照せば、第二人なし。舉措施爲、實相を虧かず。」(會元)

⑤曇劫、無始以來と云ふに同じ。

浮山遠公、演首座に謂つて曰く、「心は一身の主、萬行の本なり。心妙悟せざれば、妄情自ら生ず。妄情既に生ずれば、見理明かならず。見理明かならざれば、是非謬亂す。所以に心を治むには、須らく妙悟を求むべし。悟るときは神和し、氣靜かにして容敬し色莊なり。妄想情感皆融して真心と爲る。此を以て心を治むれば、心自ら靈妙なり。然して後、物を導き迷を指す、孰れか化に従はざらん。」

佛曰く、「一切衆生、妄に四大を認めて、自らの身相と爲す。六塵の縁境を自心の相と爲す。彼の病目の空中の華と、及び第二の月とを見るに譬ふ、故に無明と名づく。」(圓覺經)

佛曰く、「汝縁心を以て法を聴かば、此の法も亦縁なり。」

佛曰く、「思惟の心を以て、如來圓覺の境界を測度するは、螢火を取りて須彌山を焼くが如し。」

十三 學道は須らく話頭工夫を用ひて主と爲すを要すべし

趙州和尚曰く、「兄弟久立すること莫れ、事あらば商量し、事なくんば衣鉢下に向つて、坐して理を窮むれば好し。」

圓通德禪師曰く、「道眼若し未だ明かならずんば、甚麼の用處か有らん。無事にして切に須らく尋究すべし。」

圓悟禪師曰く、「但々心念をして澄靜ならしむ。紛々擾々の處、正に好し工夫を作すに。」

大惠禪師曰く、「工夫熟せば關椀子を撞發せん。所謂、工夫と云ふは、世

世の塵勞を思量する底の心を、乾屎橛の上に回在して、情識をして行せ

ず、土木偶人の如くに相似らしむ。昏但にして巴鼻の把促すべき没しと覺

得する時、便ち是れ好消息なり。」

古德曰く、「般若の上には虚しく棄つる底の工夫なし。」

大惠禪師曰く、「兄弟、工夫を做すに因縁を擧することを消せず。只去つて近處に看よ。只六祖、明

上座の爲に云ふが如し、汝但善惡都て思量すること莫れ。當恁麼の時、一切思量せず、我に明上座

●乾屎橛、乾きし屎柄杓を云ふ、又窻なり、昔、雲門大師に僧問ふ、如何なるは是れ佛、門曰く「乾屎橛」と。閃電光、擊石火の活用、若し眨眼せば、既に睡過す、禪の妙用大機は、この如くにして茲に存す。

が本來の面目を還せと。但恁麼に看よ。」

大惠曰く、「工夫急なる可らず、急なれば躁動す。又緩なる可らず、緩なれば昏但す。」

圓悟禪師曰く、「他、活句に參じて死句に參せざれ。活句下に薦得すれば、永劫にも忘れず。死句下

に薦得すれば自救不了。若し祖佛の與めに師と爲ることを要せば、須らく活句を明取すべし。」(心要)

高峯妙和尚曰く、「若し實に著し參禪せんと言はゞ、決して須らく三要を具足すべし。第一に大信根

あらんことを要す、明かに知る此の事、一座の須彌山に靠るが如きことを。第二に大憤志あることを

要す、父を殺す冤讎に偶うて、直に便與に一刀兩段せんことを欲するが如し。第三に大疑情あらんこ

とを要す。暗地に一件の極事を做し了りて、正に露れんと欲し、未だ露れざるの時に在るが如し。十

二時中果して能く此の三要を具し、日を尅し功を成すことを管取せよ。甕中鼈を走らすことを怕

れず。苟も其の一を闕けば、譬へば折足の鼎の如く、終に廢器と成る。」(高峯錄)

高峯曰く、「疑は信を以て體と爲す、悟は疑を以て用と爲す、信十分あれば疑十分あり、疑十分を得

れば悟十分を得。」(高峯錄)

草堂、晦堂に侍立す。晦堂、風幡の話を擧して、草堂に問ふ。堂云く、「適かに入處なし。」晦堂云

く、「汝、世間に猫の鼠を捕るを見るや。雙目瞪視して瞬かす、四足地に踞して動せず、六根順向し首

尾一直なり。然して後に擧するに中らずと云ふことなし。誠に能く心に異縁なく、意に妄想を絶し、

六窓寂靜にして端坐默究せば、萬に一をも失せざる也。」(大惠武庫)

大惠禪師曰く、「生死の心未だ破れずんば、全體是れ一團の疑情、只疑情窟裏に就いて、個の語頭を擧せよ。僧、趙州に問ふ。「狗子に還つて佛性ありや也た無しや。」州曰く、「無。」行住坐臥、間斷することを得ず。妄念起る時亦心を將て遏捺することを得ざれ。但只此の語頭を擧せよ、靜坐を要して、纔かに昏沈を覺すれば、便ち精神を抖擻して、此の語を擧せよ。忽地に 瞎老婆の火を吹き、眉毛に和して眼睫一時に燒き了るが如し、是れ差事にあらず。」

大惠曰く、「近世叢林、邪法横に生じて、衆生の眼を瞎する者、勝げて數ふ可らず。若し古人の 公案を以て、擧覺提擧せずんば、便ち盲人の手中の杖子を放却して、一步も也た行くことを得ざるが如くならん。」(法語)

瀉山和尚曰く、「法理を研窮して、悟を以て則と爲す。」

中峯本和尚曰く、「只々所參の語の上に向つて、一推に捱住して、但生は與めに同生し、死は與めに同死せんことを伴取せよ。第一に別に方便を求むることを許さず。第二に咎を縁境に歸す可らず。第三に一念の感情を暫

① 抖擻、持ち揚ぐる意。

② 瞎老婆、瞎は一目盲なるを云ふ、又單に、めくらにも云ふ、十六國春秋に、「荷生一目なし、七歳の時、其祖洪之に戯れて曰く、瞎兒一涙なりと。」

③ 公案は公府の案牘なり。法のある所、王道の治亂實にこれに係る、公は聖賢其權を一にし、其の道を同じうするの至理なり、案は乃ち聖賢の理を爲すを記する也、凡そ天下を有つ者は、未だ嘗て公府無かるべからず、公府未だ嘗て案牘なかるべからず、蓋し取つて以て法と爲さんとす。公案行はるれば天下正しうして王道治る、佛祖の機縁之を目づけて公案と云ふも然り。乃ち靈源に會し、妙旨に契し、死生を破り、情量を越えて、三世十方百千の開士と、同じく

起することを得ず。」(廣錄)

參禪の一著は生死に敵するを要す、是れ説き了つて便ち休するにあらず。

參禪の一著は單に大道を明かにす、朝に聞いて夕に死すとも可なり。

參禪の一著は門を推して白に落つ、切に忌む外に向つて馳求することを。

參禪の一著は疑情を起すことを要す、大疑は必ず大悟あり。參禪の一著は

英靈の衲子擧起すれば、便ち落處を知る。參禪の一著は本來の面目、經文

語録に載せ難し。參禪の一著は直指人心、貴むらくは自ら肯て承當せんこ

とを要す。參禪の一著は萬人に敵して、怯戦して喪身失命するが如し。參

禪の一著は猫の鼠を捕るが如く、睛移し眼を動すことを許さず。參禪の一

著は大丈夫の事、將相の能く爲す所に非ず。(無門語錄)

中峯和尚、學者の只言通を尙んで、實悟を求めざることを斥けて、常に

曰く、「今の參禪、靈驗あらざることは、第一に古人眞實の志氣なし。第二

に生死無常を把りて、一件の大事と做さず。第三に積功以來の所習所重を拵捨し下らず、又久遠不退

轉の身心を具せず、畢竟して病何くにか在る、其れ實に生死の根本を識らざるが故なり。」(行錄)

高峯和尚曰く、「兄弟家十年二十年以至一生、世と絶ち縁と忘れ、單に此の事を明む、透脱せざるこ

裏くるの至理なり。又義を以て解すべからず、言を以て傳ふべからず、文を以て證すべからず、誠を以て度るべからず、故に靈山之れを別傳と云ふ、之れを傳ふる也。少林之を直指と謂ふ、之を指すなり。夫れ公案は情識の昏暗を燭らすの慧炬なり、見聞の翳膜を掲げるの金鏡なり、生死の命根を斷つる利斧なり、凡

聖の面目を見るの禪鏡なり、亂意之を以て照明、佛心之を以て開顯すと。

④ 提擧は、とりもつた云ふ。

⑤ 論語に、「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と。

とは病何くにか在る。自分の衲僧試みに拈出して看よ、是れ宿に靈骨なきこと莫らん麼。是れ明師に遇はざること莫らん麼。是れ沈空滯寂すること莫らん麼。是れ雜毒心に入ること莫らん麼。是れ時節未だ至らざること莫らん麼。是れ言句を疑せざること莫らん麼。是れ未だ得ざるを得と謂ひ、未だ證せざるを證と謂ふこと莫らん麼。若し膏肓の疾を論せば、總に者裏に在らず。既に者裏に在らず、畢竟甚麼の處にか在る。咄。三條椽下七尺單前。(高峰錄)

佛鑑勸禪師曰く、「毎に學道の兄弟を見るに、有るは省悟を求めず、唯々言説を務め、他の古人の因縁を會せんと要す、豈に大錯に非ずや。他の古人、只是れ一期病に對し方を施し、機に隨つて藥を發す、遂に如許多の葛藤路門あり、月を標して指頭門を敲く瓦子の如く、意只是れ扣を假りて門を開き、標に因つて月を見、儼し門開き月現することを得ば、瓦子指頭、何の用か之れ有る。」

佛鑑曰く、「參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし。研窮して徹底し去らしむ、是れ今日一轉語を下し得て、明日一則の因縁を過ぎ得るにあらず。古今の因縁、數河沙の若し、甚の休歇かあらん、畢竟心地を明めずんば、如何が生死を了達せん。只達磨初めて來

①膏肓とは、醫學入門に曰ふ、膈は春秋の時の秦人也。姓は高、名は緩、晋の景公疾む、緩を求めて治せしむ。未だ到らず、時に夢む、二豎子相謂つて曰く、我は膏の上に居らん、汝は膏の下に居れと。緩至つて曰く、痲膏膏にあり、藥爲さむべからずと。即ち命根に入るを云ふ。故に病の治すべからざるを膏肓に入ると云ふ。
②葛藤とは、雙方の間に争論の起るを云ふ。范成大の詩に「三十年來共葛藤」と。

りし時の如く、未だ許多の因縁あらず、甚として加人、道を悟ることあらん、云々。又曰く、「兄弟を勸め奉る、但心地を明め、因縁を會せざること愁ふること莫れ、古今の因縁なり。一時看ざれとは道はず、但々一則を將ち去りて看得透すれば、千則萬則皆同じ。若し這の一則を會得すれども、未だ那一則を會せずと道はゞ、決定して未だ是ならず。」(普燈錄)

大惠禪師曰く、「千疑萬疑、只是れ一疑、話頭上に疑ひ破るれば、千疑萬疑一時に破る。」

圓悟禪師曰く、「直に大死底の人の氣息を絶して、然して後、蘇醒するに似て、始めて廓いなること太虚に同じきことを知らん。」(心要)

瑞鹿本先禪師上堂、大凡そ參學は未だ必ずしも、問話を學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも、揀話を學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも、代語を學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも、別語を學ぶ、是參學にあらず。未だ必ずしも、經論中奇特の言語を稔破することを學ぶ、是れ參學にあらず。未だ必ずしも、祖師の奇特の言語を稔破する、是れ參學にあらず。若し是くの如き等の參學に於て、任ひ欄七通八達なるも、佛法の中に於て儼し見處なくんば、喚んで乾惠の徒と作さん。豈に聞かずや、古徳の曰く、「聰明、生死に敵せず、乾惠豈に苦輪を免れんや。諸人若し也た參學せば須らく眞實に參學して始めて得べし。行時は行時に參取し、立時は立時に參取し、坐時は坐時に參取し、眠時は眠時に參取し、語時は語時に參取し、默時は默時に參

③蘇醒、蘇生に同じ、よがみへるなり。

は立時に參取し、坐時は坐時に參取し、眠時は眠時に參取し、語時は語時に參取し、默時は默時に參

取し、一切作務の時は一切作務の時に參取せよ。既に是くの如き等の時に向つて參ず、且く道へ、個の甚人にか參じ、個の甚廢の語にか參ず。這裏に到つて須らく自ら個の明白の處ありて始めて得べし。若し是くの如くならずんば、喚んで ③造次の流と作さん、究了の旨なし。(會元)

開善謙禪師曰く、「時光過ぎ易し、且つ緊々に工夫を做せ。別に工夫なし、但々放下すれば便ち是なり。只心識上に有らゆる底を將て、一時に放下せよ、此は是れ真正徑截の工夫なり。若し別に工夫あらば、盡く是れ痴狂外邊に走らん。」

黃龍庵主(祖心)門に勝して曰く、「諸禪學に告ぐ、此の道を窮めんと欲せば、切に須らく自ら看るべし、人の替代るなし。時中或は是れ因縁を看得して、自ら歡喜入處あらば、卻つて來りて入室吐露して、爲に是非深淺を品評することを待て。如し、未だ發明せずんば、但且つ歇し去れ、道自ら現前せん。苦々として馳求すれば、轉々迷悶を増す。此れは是れ離言の道要自ら肯ふに在り、他に由つて悟らず、此くの如く發明するを方に ④無量劫來生死の根本を了達すと名づく。若し離言の道を見得すれば、即ち一切の聲言語是非を見るに、更に別法なし。若し離言の道を見ざれば、便ち類を將て目前差別の因縁を會して、以て所得と爲す。只恐らくは、誤りて門庭目前の光影を認めて、自ら覺知せず、翻つて剩語と成ることを。到頭、只是れ自ら謾じ枉げて心力を費す。宜なるかな、晝夜已に克

③造次は、一寸の義に同じ。
④無量劫來。一劫とは、吾人の算數にて計へ難き年月也、その劫の無量なる程久しき以來の——との義にて、迷惑生死の根本の因業深く遠きないふ也。

つて精誠、行住觀察微細に審思すること、別に用心なければ、久遠自然に個の入路あり。是れ朝夕に學んで事業を成するに非ず。若し也た是くの如く參詳すること能はずんば、如かす看經持課して此の殘生を度らんには、亦自ら亂生誘法の如きに勝る。若し老を送るの時敢保す、個の無事の人となりて、更に他の累なきことを。其餘の入室今去つて、 ⑤朔望兩度、卻つて請ふ、訪ひ及すことを。(羅湖野錄)

⑤朔望。朔は月の始めにして、一日をいひ、望は月の中にして十五日をいふ。

國譯編門寶藏集卷之中 終